

---

# 魔法少女リリカルなのは～欲望の王～

だかた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは欲望の王

### 【Nコード】

N3068X

### 【作者名】

だかた

### 【あらすじ】

とある世界に存在した

欲望から生まれたメダル

『コアメダル』

コアメダルから誕生した欲望を食らう存在

『グリード』

それらを封印した存在

『オーズ』

今、それらがミッドチルダに復活する

魔法少女リリカルなのは〜欲望の王〜

始まります

名前変更しました

## プロローグ

### 『欲望』

それは、多くの物を世に生み出した源

衣服も食べ物も建物も、人間が欲したから生まれた

欲望は何かの始まりであり、終わりである

欲望は人間が存在する限り、尽きる事無く永遠に続いていく

誕生と終末、何度も何度もそれを繰り返しながら・・・

そして、いつしか欲望は無限を超える存在になっていった

その昔、とある世界に1人の王がいた

その王は世界を支配する為に、力を欲した

そして、人間の進化の要である欲望に目をつけた

王は優れた錬金術師に指示し、人間の欲望を凝縮させたメダル

『コアメダル』と『セルメダル』を作らせた

10枚あったコアメダルはそのままではただのメダルに過ぎなかった

しかし、コアメダルを1枚抜いた途端、9という欠けた数字を埋めようとセルメダルが集まった

そして、『グリッド』という存在が生まれた

次に王はコアメダルを使用する為の装置を作り出した

3枚のメダルを使い、グリードという欲望の王達の更に上に立つ存在

人々はそれを『<sup>オーズ</sup>000』と呼んだ

結局、王は世界を手に入れる事は出来なかった

その原因は、無欲な1人の旅人と心を持った1人のグリードだった

青年は王を恐れず、心を持ったグリードを救おうとした

間違っている事は間違っているという、当たり前事が言える青年だったのだ

グリードは付け焼刃に王と他のグリード達から奪ったもう1つのオーズの力を青年に渡した

青年はそれを使いこなしグリードが生み出すヤミーという存在を倒していった

そして、グリッドが持つ『本当の欲望』に気付いた

虫系グリッドは『誰にも負けない力を持ち、生きていたいという欲望』

猫系グリッドは『傷付けられない自分だけの居場所が欲しいという欲望』

水棲系グリッドは『愛するのではなく、誰かに愛して欲しいという欲望』

重量系グリッドは『自分が好きになった誰かと一緒にいたいという欲望』

そして、鳥系グリッドは『心を確かに感じる為の命が欲しいという欲望』

その簡単そうで難しい欲望を、青年は簡単に解決してしまった

「お前っていう存在が命その物だろうがぁー!!」

鳥系グリード『アंक』と戦い、そう叫んだ

「死にたくないなら、俺達が護ってあげるよ」

虫系グリード『コノハ』を護る為に、王の刺客と戦った

「居場所が欲しいの？じゃあ、一緒に探そっか！」

猫系グリード『ラト』と共に居場所を探し、居場所になった

「お前を愛してくれてる奴がすぐ傍にいるじゃないか」

水棲系グリード『シャル』に愛してくれている者がいると気付かせた

「何があっても、アイツを信じて傍にいてやってくれ」

重量系グリード『リク』に何があっても相手を信じろと教えた

そうする事で、青年はグリード達と共に戦い、失った10枚目のメダルを甦らせていった

それは、天敵同士のオーズとグリードの間に生まれた絆だった

そして、己の欲望に負け、暴走した王をグリード達と共に倒したのだった

世界に浸透してしまったグリードへの恐怖は消し去れる物ではなかった

何処に行っても蔑まれ、何処に行っても忌み嫌われた

時折、青年達を理解してくれる人達もいた

しかし、そんな人達が自分達のせいで傷付けられるのを見て、青年はある決意した

青年の決意に他のグリード達も賛同した

そして、青年とグリード達は永い眠りに付く事になったのだった

それから、800年の時が過ぎた――

封印の棺と封印を施した戦士の銅像は時空管理局に回収された

それが、後に大事件を起こすとも知らずに・・・

## 第1話『目覚めとオーズと旅立ち』

第1話『目覚めとオーズと旅立ち』

ミッドチルダ

時空管理局ロストログア保管倉庫

そこに、1つの棺が存在した

それは、とある世界に存在したロストログアの反応がした棺

管理局はロストログアが封印されている物だと判断し、回収した

「これね、ドクターが言っていたのは」

そこに、1人の女性がやって来た

女性は棺の上の部分にあった3つの何かが入る部分がある突起を回した

その瞬間、棺に亀裂が入り、その亀裂が輝き始めた

「これでいいのかしら？まあ、あとはどうとでもなるでしょう」

そう言って女性はその部屋から逃げるように出て行った

しかし、棺の一部が壊れ、先に赤のメダルが10枚出ている事には女性は気付かなかった

棺は綺麗に消え去り、中からメダルが飛び出した

緑が7枚、黄が7枚

青が7枚、銀が7枚

大量のセルメダルがそれぞれのメダルを包み込み、人の形を成して行った

「・・・あれ？何処だここ？それに、何か縮んでる！？」

緑色の髪をした少女が部屋の中を見渡して言う

「随分と未来的だね。身長が縮んでるのは、たぶん封印の影響だよ」

黄色の髪をした少女が窓から外を見て言う

「・・・これ、なんだあ？」

「勝手に触っちゃダメよ！」

銀色の髪をした少年が部屋の壁にあった赤いボタンを押そうとしたのを青い髪をした少女が止めようとした

しかし、止めた時には既に遅く、少年は赤いボタン・緊急事態を知らせるベルを鳴らしてしまった

「な、何か、もしかしてヤバイんじゃない！？『ラト』！」

「もしかしくなくてもヤバイよ、『コノハ』」

少し焦りを見せて言うコノハにラトは落ち着いた様子で返す

「もう！『リク』！いつも勝手に触っちゃダメ！って言ってるでしょ！」

「ごめんなさい、『シャル』・・・」

ボタンを押してしまったリクをシャルが叱っている

「お説教中悪いけど、今は逃げようよ。シャル」

「・・・わかったわ。行くわよ、リク」

「うん」

「脱出だ」

4人はメダルに戻ってその部屋の窓から飛び出し、逃げ出した

管理局員が駆けつけた時、既にそこには誰もいなかった

4人は街外れの森の中に逃げ込んでいた

「ここまで逃げれば大丈夫かな？」

「さあ？人間の技術が進歩してれば、見つかるんじゃない？」

コノハとラトは逃げて来た方を見て追っ手がいなか確認しながら言う

「ごめんなさい・・・」

リクが申し訳なさそうに2人に言う

「べ、別にリクを責めてる訳じゃないよ？」

コノハは泣きそうなリクに慌てて言う

「そうだよ、リクが押さなくてもその内コノハが押してたよ」

ラトが爽やかな笑顔でリクの肩に手を置いて言った

「どという意味だ!？」

「僕達の中でボタンを押しそうなのは、子供のリクか馬鹿なコノハだけだよ」

ラトはやれやれと言った呆れた様子を見せてコノハに言う

「コノヤロ〜!!目覚めてもそれか〜!!」

コノハはラトに掴み掛かろうとしたが、シャルに水を掛けられて落ち着いた

「・・・『アंक』は？」

今まで黙っていたリクが一緒に眠っていたはずのアंकがいない事に気がついた

「そつえばいなかったわね。先に目覚めたのかしら？」

シャルがアंकが自分達より先に目覚めたのかと推測した

「わかんない。あ、無いと言えば私、コアメダルが3枚無いんだけど。知らない？」

コノハがもしかして無くしたのかなあ・・・と不安になって呟いている

「ああ、それなら、アंकが握ってたよ。すぐに何処かに行つたみたいだけど」

ラトは思い出したように言った

「私達全員から3枚ずつ抜いて行つたのね」

「でも、何の為に持ってたの？」

シャルがそつ言つとコノハが首を傾げる

「はぁ……。僕達から3枚ずつ抜いて行って、アंकがする事って言ったらアレしかないでしょ」

ラトは呆れたようにコノハに言った

「アレ？」

コノハはまだわからないのか首を捻って考えている

「……『映司』」

「ほら、リクでもわかってるよ」

「リクとコノハを比べないでくれる？リクに失礼よ」

シャルはリクの頭を撫でながらラトに言った

「ガーン……」

コノハは1人でorz状態になっていた

ここは、もう1つのロストログア保管庫

「・・・ここか」

そこに、1人の少年が侵入していた

少年は倉庫の中を見回して探しモノを探す

そして、1つの銅像を見つけた

顔はタカ、腕はトラ、足はバツタを模した姿をしている

「・・・映司、人間は何も変わってないぞ。いや、酷くなってるかもなあ」

少年は嘆くように銅像に向かって言う

「それでも、お前は何かあれば戦うんだろうな」

少年はそう言って手を前に出す

すると、手が赤い鳥の様な形態に変わった

少年は手から棺の突起部分だった物を取り出す

そして、銅像の腰に当てた

その瞬間、岩が弾け飛び、『オーズドライバー』に変わった

少年はドライバーに変わったそれに3枚のメダルを入れる

そして、横に付いていた『オースキャナー』でメダルをスキャンした

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOBA!TA・TO・BA!》

スキャナーから不思議な歌が流れると銅像が光を放ち、色を変えて行く

黒い身体に顔が赤、腕が黄、足が緑の部分がある戦士に変わった

「・・・あれ？・・・アंक？」

戦士はアंकに気付いて話し掛ける

「・・・アंकがいて俺が動いてるって事は……。ありやりや、封印が解けちゃったんだな」

戦士は身体の間接を伸ばしながら言う

「ありやりやで済みますのか。まあいい、早くしろ、映司。ここを出るぞ」

「え？あ、そういえば、ここ何処なんだ？」

戦士は腰のベルトを外しながらアंकに尋ねる

ベルトを外すと戦士は黒髪の少年に戻った

少年の名前は『火野映司』である

「俺も知らない。まあ、気に入らないって事は間違いないな」

アंकは映司にそう言いながら倉庫の出口に向かっていく

「てか！俺達なんか身長縮んでないか！？どうなってんだよ！？」

映司は自分の身体とアंकを見て言った

「俺が知るか！取り合えず、ラト達と合流するぞ！さっさと来い！」

アंकはそう怒鳴って先に行ってしまう

「あ、ちょっ！待てよアंक！」

そんな感じで2人は倉庫から出た

映司とアंकが倉庫から脱出し、クラナガンの街中を歩いていた

辺りはすっかり夜になってしまっている

「うわぁー！おい、凄いぞ！アंकー！」

映司はミッドチルダの夜の街を見て興奮し、アंकの背中をバシバシ叩きながら言う

「映司！いい加減にしろ！子供かお前は！！」

そんな映司にアंकは怒鳴った

「いやー、だって未来にタイムスリップしたんだぞ？興奮しないのか？」

映司は未だ興奮気味にアंकに言う

「まあ、800年も寝てれば人間の技術も進化するだろうな」

アंकは高層ビルや車などの乗り物を見て言う

「人間の欲望も随分変わったな。より強く、でかくなった・・・」

アंकは街を行き交う人々を見て言う

「まあ、しょうがないよ。それが人間だもん。行こう？アंक」

映司はそう言ってアंकの前を歩いて行った

2人は街の中を更に歩いていく

そして、怪しい場所に辿り着いた

「・・・お前を先に歩かせたのが間違いだった」

アंकは何かを後悔するように映司に言った

「何が？」

映司はアंकの後悔の訳がわからず首を傾げる

「お前はトラブルに巻き込まれるのが大の得意分野だろうが!!」

アंकは惚けた顔をしている映司に向かって怒鳴った

「・・・ああ、それは悪かった。ごめん」

「ったく・・・。ん？」

アंकは何かに気付いたように暗闇を見つめた

「ん？どうしたんだよアंक？何か見えるのか？」

映司もアंकが見つめている先を見る

しかし、映司には何も見えなかった

「傷だらけの女がいる。あと、追っ手もいるなあ」

「えっ！？じゃあ、助けないと！！」

「・・・お前がここに来た意味がわかった」

走り出した映司を追う様にアंकも走り出した

暗闇の中を『クイント・ナカジマ』は走り続けていた

彼女は仲間達と共に特秘事項の捜査中、何者かの襲撃を受けた

仲間達は自分を逃がし、家族の為に生きる様にと言ってくれた

彼女は必死に痛む身体に鞭を打って走り続けた

・ 仲間を助ける為に、仲間の無念を晴らす為に、そして家族の為に・

どれだけ走ったかわからない、どれだけあそこから離れたか分からない

仲間達を置いて自分は走り続けている

救援を呼ぶ為に、仲間が生きっていると信じて走り続けた

しかし、彼女のその思いは打ち砕かれた

「見つけたぞ、生き残りだな」

そこにいたのは先ほどいた敵の内の1人だった

紺色の髪をしたショートカットの女性だった

「くっ！」

「悪いが、あそこに立ち入った以上は死んでもらう！」

体が思うように動かない、体力が限界だ、もう駄目だとクイントは悟った

自分の人生が、自分の歩んできた道が、ここまでなのだと・・・

「ごめんなさい・・・アナタ、ギンガ、スバル・・・」

静かにクイントは目を閉じた

「IS発動、ライドイン・・・ッ!？」

女性が何かを発動させようとしたその瞬間、何かがぶつかった

それは、強力な火炎弾だった

「間に合ったあゝ」

クイントは霞む目を必死に開き、声の持ち主を見た

そこにいたのは、変わった民族衣装を着た少年とおしゃれな服を着た少年だった

「貴様等！何者だっ！！」

「通りすがりの旅人とグリードだ！アंक、その人を頼む！」

映司は目の前にいる女性を睨み付けながらアंकに言う

「まったく、また何の得にもならない事を！」

アंकはそう言いながら女性の前に腰を下ろすと、映司にメダルを投げ渡す

「悪い！でも、これが俺だから！」

映司はそう言ってドライバーを腰に当て、装着した

アंकから渡された3枚のメダルを入れる

そして、横に取り付けられていたオースキャナーでメダルをスキャンした

「変身！」

キーン！キーン！キイイーンッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

そして、映司の胸に紋章が刻まれ、力が宿った

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

不思議な歌が流れ、光が収まった時、そこにいた映司の姿は変わっていた

胸部の中心にあるサークルに刻まれた『鷹<sup>タカ</sup>』『虎<sup>トラ</sup>』『飛蝗<sup>バッタ</sup>』

『鷹の視力』が備わった赤の顔

『虎の爪』が装備された黄の腕

『飛蝗の脚』が備わった緑の脚

欲望の王『<sup>オーズ</sup>○○○』『タトバコンボ』がミッドチルダに降臨した

「!?!?!? 誰だか知らないが、片付けるッ!」

女性はオーズに向かって蹴りを放つ

「はっ!」

オーズはそれを簡単に受け止めた

「なに!?!」

オーズの胸に描かれた『虎の紋章』が輝く

すると、両腕の爪がしっかりとセットされた

「はぁっ!!」

オーズは女性に向かってトラクローを振るう

女性は腕のビーム状のブレードでそれを受け止めた

「セイヤッ!」

オーズはそれにお構い無しでトラクローを振るって行く

「くっ!この程度で・・・ッ!!」

女性はトラクローを避けてブレードで斬りつけようとした

しかし、オーズは後ろに飛び、それをかわす

オーズの胸の『飛蝗の紋章』が輝き、足にパワーが満ちていく

「久しぶりの変身、身体は鈍ってないな！」

オーズはそのまま重力を無視したジャンプで女性を蹴りまくった

「くっ！IS発動！ライドインパルスッ！」

女性はISを発動し、高速移動をし始めた

そして、オーズをブレードで斬り付ける

「いだ、いだだ！？」

オーズはよろめき、後ろに吹き飛ばされた

「くっそ・・・油断したあ・・・」

オーズはそう言って立ち上がる

「何やってんだ、映司！コアをコイツに変える！」

そう言ってアंकがオーズに2枚のメダルを投げる

「よし！」

オーズは攻撃を避け、メダルをキャッチする

『トラメダル』と『バッタメダル』を抜き取り『カマキリメダル』と『チーターメダル』に変える

キーン、キーン、キイイーンッ！

そして、オースキャンで再び力をスキャンした

《TAKA!》《KAMAKIRI!》《CHEETAH!》

再び、円形の様々な色をした力の紋章がオーズの周りを踊る

そして、オーズの胸に紋章が刻まれ、力が宿る

腕の『虎の爪』が『螳螂の鎌』に変わり、脚の『飛蝗の脚』が『獵豹の脚』に変わった

オーズはタトバコンボからタカキリーターに変わった

腕のパーツが起き上がり双剣『カマキリソード』になり、オーズはそれを構える

「行くぞ〜！ダッシュュッ！！」

「なっ！？ぐあああ！！？」

女性はオーズのスピードに着いて行けず、身体に無数の切傷を付けられる

女性はオーズのスピードに驚愕していた

無理も無い、魔法も使わずに自分と同じかそれ以上で移動したのだ

「そろそろ決めさせてもらいますよ！」

オーズは一度女性から離れてカマキリソードを構える

「はあああ・・・セイヤアアア!!!!!!」

そして、一瞬で女性の前まで移動し、思いっきり斬り付けた

「ぐっ・・・ああっ!!」

オーズが力を抑えた為、ブレードで防御出来たが女性は後ろに吹き飛ばされ、地面を転がった

「ま、まだだ・・・!」

女性はよろよろと立ち上がった

「まだやるのか?」

オーズはカマキリソードを構え直す

だがそこへ、眼鏡をかけた女性が現れた

「大丈夫ですかぁ? トーレお姉さま」

「クアットロか、すまない・・・離脱するぞ」

「わかりましたあ」

「待てっ！」

オーズが迫るが、転送の魔法陣が既に敷かれていた

「この借りは、必ず返す」

そう言い残し、女性が消えた

オーズは逃げられた事を確認してから、変身を解除した

そして、アंकに頼んだクイントの元に走った

「アंक！その人大丈夫なのか！？」

「血を流し過ぎてる、このままじゃマズイなあ」

アंकはクイントを見て言う

「と、取り合えず病院に！」

「ああ、わかってる。だがちょっと待て」

アंकはそう言って立ち上がり、右腕を残して身体をバラバラにした

そして、クイントの身体に憑依した

「あ、アंक？」

クイントは目を開き、ムクツと立ち上がる

髪は金髪に変わり、目付きが悪くなっている

「これで死ぬ心配は無い。さっさと病院探すぞ」

クイントに憑依したアंकはそう言ってスタスタと歩いて行ってし

まう

「お、おい！動いて大丈夫なのか！？おい！！」

映司は慌ててアंकの身体だったセルメダルを全て拾い、その辺に落ちていた袋に入れて、追い掛けた

↓時空管理局 本局 集中治療室↓

アंकがクイントの記憶を読み取り、調べた結果ここに運んだのだ  
った

要するに、元いた場所の近くに帰って来たのだ

「君達がクイントをここまで運んで来てくれたのか。俺は『ゲンヤ・ナカジマ』だ。礼を言う、妻を助けてくれてありがとう」

クイントの夫のゲンヤが零次とアंकに礼を言う

「いや、俺達は通り掛かっただけなんで、気にしないで下さい。それより、クイントさんの容体はどうなんですか？」

映司は集中治療室の中のベッドで眠っているクイントを見てゲンヤに尋ねる

「かなり酷くやられていたみたいだ。出血も多かった。でも、一応、峠は越えたらしい。後は本人の体力しだいだそうだ」

ゲンヤも集中治療室の中で眠っているクイントを見て映司に説明した

「そうですか、よかったです」

映司は安心したように息を吐きながら言った

「お前さん達が助けてくれていなければ、クイントは確実に死んでいただろうな。本当にありがとう」

ゲンヤはもう一度映司とアंकに頭を下げた

「だから、そんな気にしないで下さい。俺達は自分達の出来る事を  
しただけですから」

映司は笑いながらゲンヤに言った

「おい、映司。もう用は済んだだろ。行くぞ」

アंकは映司にそう言って歩き出す

「あ、おい！アंक！あの、じゃあ、俺達はこれで！お大事に！」

映司はゲンヤに早口でそう言つとアंकを追い掛けた

「・・・大した奴等だ。まだ小さいってのに・・・」

ゲンヤは去って行く2人を見てそう呟いた

深夜、映司とアंकは病院の入り口の前に立っていた

しばらくすると、2人の前に無数の機械の軍勢が現れた

「やっぱりなあ、思った通りだ」

アंकはそれを見てニヤリと笑って言う

「アंकの言う通り、口封じに来たのか」

そう言う映司の腰には既にドライバーが装着されている

「さっさと壊して来い、映司」

「うん」

映司はアंकにメダルを受け取り、ドライバーに入れる

そして、スキャナーでメダルをスキャンした

「変身！」

キン！キン！キイインッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

円形の様々な色の光が映司の周りを踊る

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

「はあ！」

オーズに変身した映司はトラクローを装備して機械の軍勢に突っ込んだ

そして、次々と機械を破壊していく

しかし、機械は次々と湧いて来た

「数だけはいな。映司！コレに変えろ！！」

そう言つてアंकは『クワガタ・コア』と『ウナギ・コア』をオーズに投げる

「ああ！よつと！」

オーズは目の前にいた機械をトラクロード破壊してメダルを受け取った

そして、『タカメダル』と『トラメダル』を抜いて、『クワガタメダル』と『ウナギメダル』に変える

そして、スキヤナーを滑らせた

キーン、キーン、キイーンッ！

《KUWAGATA!》《UNAGI!》《BATTLE!》

再び、円形の様々な色をした力の紋章がオーズの周りを踊る

そして、オーズの胸に紋章が刻まれ、力が宿る

頭の『鷹の目』が『鋏形の角』に変わり、腕の『虎の爪』が『電気鰻の鞭』に変わった

オーズはタトバコンボからガタウバに変わった

「はあっ！！」

オーズはクワガタヘッドから電撃を発し、ウナギアームの電気鞭で一気に機械を鉄屑に変えて行く

「クワガタとウナギって、こんなに相性よかったんだ！」

オーズは電気力が増している事に気付き、次々と機械を壊してた

「はあっ！！」

オーズは今までより更に強力な電撃を発して機械全部に当てた

機械は爆発し、巻き込み合い、バラバラと機械の残骸が散乱した

オーズはメダルを抜き、変身を解除する

「ふう、楽勝！」

映司はアंकの方を見て笑顔でそう言った

「ふん・・・ッ！？映司！！」

「え？」

アंकは何かに気付いて映司の名を叫ぶ

映司の後ろに、さっきの攻撃から逃れた機械が1機残っていたのだ

しかし、その機械は黄色い竜巻に吹き飛ばされ、粉々になった

「油断し過ぎだよ？映司」

「まったく、ちょっと目を離すとこれだ」

「映司〜！」

「久しぶりね、映司」

竜巻が来た方を見るとラト達4人がそこにいた

「みんな！どうしてここに？」

映司は4人を見て駆け寄り尋ねる

「メダルを使った気配があったから急いで来たんだよ。何があったの？」

ラトは近くにあった車のボンネットに座り、映司に尋ねる

「いや、さっき助けた人を狙ってロボットみたいなのが大量に湧いて来たんだ」

映司はこれまでの事を簡単に説明する

「また人助けしてたの？変わらないね」

ラトは笑いながら映司に言う

「うん、まあ、俺だしね」

映司は笑ってラトに返した

「アंक！お前が着いていながら何だこの醜態は！！」

「うるさい！アイツが勝手に油断しただけだ！！てか、お前醜態の意味わかってないだろ！！」

「う、うるさい！ちゃんとわかってるよ！」

アंकとコノハは再会早々に喧嘩を始めた

「まあまあまあ、2人とも落ち着けて！」

2人の間に映司が割って入る

「お前が原因だ!!」

そんな映司に2人は怒鳴った

「・・・ホント、変わらないわね」

「うん、おもしろい」

「変わらないのが映司の良い所なのかもね」

シャルとリクとラトは楽しそうに3人を見ていた

「で、これからどうする?」

喧嘩が沈静化し、これからどうするかの話し合いになっていた

「ん、取り合えず今日はどこかで野宿して、明日街を見て回れば

いいんじゃない？」

映司は腕を組んで旅人的な考えを言う

『お前達に野宿してる暇なんてないぞ』

「「「「え？」「」「」

「「あ？」「」

聞き覚えの無い声に全員が周りを見回す

その次の瞬間、白黒のオーロラに吞まれ、周りが宇宙のような光景に変わった

「これは・・・」

「よお、初めましてだな。オーズ」

いきなりの事に呆然としていた6人の前に1人の男が現れた

首にマゼンタ色のトイカメラを首から掛けたその男は6人に歩み寄って来る

「あなたは・・・誰ですか・・・？」

映司はその男に尋ねる

「俺の名は『門矢士』。通りすがりの仮面ライダーだ」

そう言って士はマゼンタ色の戦士が描かれたカードを見せる

「その通りすがりの仮面ライダーが俺達に何の用だ？」

アंकは士にグリード化した腕を向けて言う

「お前等を戦いの舞台、『過去』に連れて行ってやろうと思ってな」

「過去？」

士がそう言つと周りの光景が動き、1つの星が近付いて来る

「お前等も知ってる通り、世界は無数に存在している。お前達の戦いの舞台は『まだ』あの時代のあの世界じゃない」

士はそう言いながら近付いて来た世界を見る

「この時代のこの世界のとある街に願いを叶える石『ジュエルシード』とかいう石が散らばってる。それを集めろ」

士は何故か偉そうに命令口調で6人に言う

「おい、何でアイツはあんなに偉そうなんだ？」

アंकが怒りに震えながら映司に言う

「さ、さあ？俺様系の人なんじゃない？」

「おい、聞いているのか？」

「あ、はい。聞いてます、ジュエルシードって言うのを集めるんですよね？」

士に聞いてるのかと問われ、映司は少し焦って答える

「でも、ジュエルシードってどんな物なんですか？」

「ああ、こんなのだ」

そう言って士は映司に青い宝石を投げた

「そいつを集めていれば、大体の事は何とかなる」

士は段々説明が面倒になってきたのか雑になり始める

「そうですね……。あつ、でも、あの世界で俺達が助けたクイントさんって人が狙われてるんです。今俺達が離れたら……。」

「それは心配要らない。誰かがこの世界に残ればいい」

「……。俺と映司で決定だ。お前等は留守番してろ」

アंकはラト達4人に言い放つ

「まあ、面倒事は嫌だし。映司が言っただ人を護ってる方が楽かもね」

「じゃあ、私も残る」

「俺も」

「私達に任せなさい」

4人は面倒事に巻き込まれなくなかったようですぐにそれに賛成した

多分、来いと言っても来なかっただろう

「話は決まったみたいだな。まあ、説明はこんな感じだ。大体わかっただろう？」

「はい、大体わかりました。とにかく、ジュエルシードを集めればいいですね？」

「ああ、そうだ」

「メダル集めと変わんないな」

映司は笑いながらアंकに言う

「確かにそうだなあ」

映司の言葉にアंकは同意して言う

「でも、オーズが必要だって事は、その事件にメダルが関係してるんですか？」

「話が早くて助かる。そうだ、ジュエルシードと一緒にセルメダルもばら撒かれてる」

「じゃあ、俺達はセルメダルをばら撒いた奴を見つけ出せばいいんですよね？」

「ああ、そういう事だ」

映司の考えを士は肯定した

「じゃあ、行つて来い」

士がそう言つと映司とアंकはさっきのオーロラに包まれ消えた

「映司も物好きだなあ、関係ない赤の他人の為に戦えるなんて」

「アंकも変わったよ。昔は絶対に「何の得がある？」とか言い出す奴だったのに」

「まあ、映司と一緒にいれば嫌でも変わるんじゃない？影響力高いから」

「えいきょうりよく・・・？」

「なるほどね、アंकも映司に感化された訳だ」

「映司パワー・・・もしくは映司オーラかな？」

「ネーミングセンス皆無だね、コノハ」

映司とアंकがいなくなった事を良い事に、4人は好き勝手言い始める

「だからこそ、アイツは仮面ライダーと呼ばれるに相応しい奴なんだ」

4人の話を聞いて、士は小さく呟いた

「何か言った？」

「いや、何でもない。お前等もさっさと元いた世界に帰れ」

士がそう言つと、ラト、コノハ、リク、シャルもオーロラに包まれて消えた

「・・・頼んだぞ、仮面ライダー000」

士は映司達が向かった世界を見て呟いた後、空間と一緒に消えた

こうして、800年の眠りから目覚めた映司とアंकは新たな戦い

に身を投じるのだった

第1話『目覚めとオーズと旅立ち』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』× 3

『トラメダル』× 1

『チーターメダル』× 1

『クワガタメダル』× 1

『カマキリメダル』× 1

『バッタメダル』× 1

『ウナギメダル』× 1

## 第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、オーズである火野映司とグリードが800年の眠りから目覚める

2つ、手負いの魔導師、クイントを救う為、映司はオーズに変身する

そして3つ、通りすがりの仮面ライダー、門矢士に導かれ映司とア  
ンクは旅立った

第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』

「夜の海鳴市」

オーロラから出た映司とアंकはその街の一番高いビルの屋上にいた

「ここが戦いの舞台か……。平和そうな世界だけどなあ」

映司は街を見下ろして言う

「上目だけ見れば、確かに平和だ。だが、確かに感じるな」

「感じるって……セルメダルか？」

「ああ。だが、他にもおかしな力をいくつか感じる。奴が言ってた  
ジュエルシードとか言う石かなあ」

アंकはセルメダル以外にもおかしな力の気配を感じていた

「ところで、映司。お前、何持ってた？」

アंकが映司の手にあったアタッシユケースを指して言う

「え？あ、コレ？さっきなんか渡されたんだけど・・・」

映司はアタッシユケースを地面に置いて、開けてみた

「これ、お金かな？あと、本と・・・何だコレ？」

中身は札束とタウン誌と最新型のスマートフォン2台だった

「コレはこの世界の通貨だ。映司、それ貸してみろ」

「え？これ？はい」

映司はアंकに言われた通り、スマホを渡した

「ふん、なるほどな。これで離れた場所においても連絡が取れるらしいぞ」

「へえ！こんな小さな物で連絡が取れるんだあ」

映司はスマホを見て感心した様に言う

「でも、良く知ってるな、お前」

「あの女に憑依した時に記憶の中の知識を読み取らせてもらった」

「・・・抜かりないな、お前」

抜け目の無いアंकに映司は感心するのだった

「ジュエルシードかぁ・・・。見た目は普通の宝石にしか見えないんだけどなぁ・・・。」

映司は土から貰ったジュエルシードをポケットから出して見つめながら言う

「願いを叶えてくれる石か。アंकなら何をお願いする?。」

「アイス1年分だな」

「・・・」

「・・・何だ？」

「いや、別に。食いすぎて腹壊すなよ？」

映司はそう言っア Ank からジュエルシードに視線を戻す

「こんな小さな物をこんな広い街から探し出せるのかな？」

メダルならグリッドと戦えば手に入れる事が出来た

しかし、ジュエルシードは違ふと考え、映司は少し大変そうだと思つた

「いくつか固まつてる物もある、他にも集めてる奴等がいるみたいだなあ」

「俺達以外にもジュエルシードを集めている人達がいるのか・・・」

映司はメダルの要領で一度上に投げて掴み、握り締める

「まあ、何とかなるでしょ」

「・・・お前のそのポジティブな考えは何処から来るのか教えて欲しいな」

アंकは映司にの発言に呆れながら言った

「これまでも何とかなって来たし、大丈夫だって」

映司はアंकの背中を叩いて言った

「・・・じゃあ、それを見せてみる」

「え？」

「来たぞ、正面だ」

「え？正面？」

映司が正面を向くと数メートル先に黒いマントを靡かせた金髪の少女が降りて来た

その少女は映司達がその世界に現れるところを見ていた

「あの人達・・・何者だろう・・・」

映司達が転移魔法も使わずにこの世界に現れたのを見て少女は不振に思い、警戒していた

少女は魔力反応も出さずに転移する事が出来るなんて、聞いた事になかったのだ

少女は話している映司とアंकを見つめていた

そして、映司がポケットからジュエルシードを出したのを見た

「あれは・・・ッ！」

それは、少女が必死になって探している物だった

「『フェイト』！」

フェイトと呼ばれた少女はその声に振り返る

「『アルフ』、ジュエルシードを見つけたよ」

そこにいたのは、自分の使い魔のアルフだった

「うん、あたしもジュエルシードの反応を見つけたから急いで来たんだよ。で、何処にあるんだい？」

アルフはジュエルシードが何処にあるのかフェイトに尋ねた

「あの人達が持つてる」

そう言ってフェイトはビルの屋上に立っている映司とアंकを指差した

「アルフ」

「あいよ！」

フェイトは自分のデバイス『バルディツシュ』を握り締める

アルフはフェイトの横で指をパキパキ鳴らした

2人は屋上にいる映司達からジュエルシードを奪う為に零次達の前に降り立った

フェイトとアルフは映司とアंकの前に立ち塞がった

フェイトは映司を一瞥する

身長は自分よりも少し高く、顔立ちも端正な部類に入り、優しそうな雰囲気をする人だと感じた

（いろいろと聞きたいことはあるけど・・・）

フェイトはバルディッシュをサイズフォームに変形させる

フェイトの隣にいるアルフも拳を作って構えを取った

映司は状況を呑みこめていないような表情をしている

しかし、アंकはフェイト達をバッチリ睨んでいた

（ごめんなさい）

フェイトは心の中で映司とアंकに謝罪した

自分達がこれから行うことは完全に強盗だという事をフェイトはわかっていた

映司とアंकを気絶させてジュエルシードを奪うと言っのだから、それ以外に言いようはない

「ごめんなさい・・・」

フェイトは小さな声だが、映司に謝罪の言葉を告げる

そして、そのままバルディッシュを構え、映司に向かって駆け出した

「ごめんなさい・・・」

目の前にいるフェイトの小さな呟きは映司に届いていた

「えっ？」

映司は聞き返そうとしたが、返って来たのは金色の鎌による攻撃だった

「馬鹿映司！避ける！」

「おわっ！？」

アंकは映司の首根っこを掴んで後ろに飛んだ

映司が立っていた地点のコンクリートには大きな亀裂が走っている

「ちょ、何で攻撃してくるんだ！？あの子！？」

「俺が知るか！！さっさと変身しろ！！」

そう言っアंकは4枚のメダルを映司に渡す

「わ、わかった」

映司は着地して腰にドライバーを装着する

フェイトは体勢を立て直し、バルディッシュを構え直して、映司に向かって走り出す

そして、映司の首元を狙ってバルディッシュを振るった

映司はそれを避けてドライバーにメダルを入れて行く

「君、誰か知らないけど、いきなり襲って来るのはおかしいんじゃない？」

映司はメダルを3枚共入れ終え、フェイトに言う

「あなたが持っているジュエルシードを渡して下さい」

フェイトは映司の目を真っ直ぐに見て言い放つ

「・・・」

「アンタさあ、さっさと渡してくれないかい？痛い思いしたくないだろう？」

後ろからの声に振り向くと、アルフが腕を組んで立っていた

「・・・悪いけど、渡せない」

映司はポケットに入っているジュエルシードに手を当てて言った

いきなり攻撃して来る人物にこれを渡そうとは思えなかったのだ

「・・・アルフ」

「あいよ、フェイト」

フェイトはアルフに戦闘に参加するようアイコンタクトをする

それを見て、映司はオースキャナーを手にした

「映司、さっさと変身してこの女共片付けろ。俺が獣女の相手をしてやる」

アंकが映司の後ろに降り立ち言う

「ああ、わかった。変身！」

キン！キン！キイインッ！

《TAKA！》《TORA！》《BATT A！》

円形の様々な色の光が映司の周りを踊る

《TA・TO・BA！TATOB A！TA・TO・BA！》

不思議な歌が流れ、映司はオーズ・タトバコンボに変身した

「何だい？タカトラバツタって、ふざけてるのかい？」

アルフがオーズの変身音にツツコミを入れた

「歌は気にするな。ふざけてるかは・・・戦ってみればわかる」

そう言うとアंकは右腕をグリード化し、赤が強い虹色の翼を広げた

そして、アルフに火炎弾を放ち空に飛び上がった

「くっ！待て！！」

アルフはアंकを追って空に飛び上がる

しかし、アルフはアंकのテリトリーに誘い込まれた事を知らなかった

「おい、アंक！！手加減しろよ！？」

「わかってる！！」

空を飛んでいるアंकに向かってオーズは大きな声で言う

「さて、俺達も始めようか」

オーズはフェイトの方を見て言った

それを合図にフェイトは動き、オーズに向かってバルディッシュを振るった

「はあっ！」

オーズはそれをトラクローで受け止め、フェイトの腹部を手の平で突いた

「ぐっ!？」

フェイトは腹部に衝撃を受けて後ろに吹き飛ばされた

フェイトは後ろに飛ばされ、膝を着く

そして、映司を変身させた事を後悔した

変身する前と変身してからの戦闘力が全然違う

映司が変身と言つまでに攻撃する隙はいくらでもあった

しかし、自分は映司の変身を許してしまった

フェイトは自分の浅はかさに酷く後悔した

「やめた方がいいよ。これ以上すると君が怪我する」

「・・・それは、出来ません」

フェイトはバルディッシュを構えてオーズに向かって走る

「頑固だなあ」

オーズもフェイトに向かって走り出す

そして、バルディッシュとトラクローがぶつかり合った

いつもなら片手で受け止め片手のクローで切り裂く事が出来るが、  
相手は女の子だ

怪我でもさせたら一生後悔する事になる

オーズはバルディッシュのロッド部分を蹴り、フェイトを吹き飛ばす

「ぐっ」

「ん？」

しかし、蹴りを入れたオーズは手応えが無かった

フェイトはオーズの蹴りが当たる直前で後ろに飛んでいた

「バルディッシュ！」

「Arc Saber」

バルディッシュがそう電子音で言い放つと、フェイトはバルディッシュをフルスイングした

三日月形の刃がくるくると回転しながらオーズを狙って、向かって来る

「！！！」

キン！キン！キイインッ！

《TAKA!》《KAMAKIRI!》《BATA!》

そして、直撃した

オーズがいた場所を中心に爆煙が起こる

「やった？」

「いや、まだだよ」

爆煙を掻き分けながらオーズが出て来た

先ほどまでとは違い、黄色かった部分が緑になり、2本の剣を逆手持ちにして立っていた

オーズはタトバコンボからタカキリバに変わっていたのだ

そして、オーズは全くの無傷だった

「そ、そんな。確実に捕らえてたはずなのに・・・」

「うん、確かにね。でも、本体に当たらなきゃ意味無いよ」

確かにアークセイバーは直撃コースでオーズを捉えていた

しかし、直撃寸前で『トラ・コア』を『カマキリ・コア』にチェンジしたのだ

「もう終わりにしよ。ね？」

「・・・ダメ」

フェイトはオーズの言葉に耳を貸さず、バルディッシュを構えた

「・・・」

オーズは困った様に溜息をついた

「おい、映司！いつまでやってる！」

そこに、アルフと戦っていたはずのアンクが戻って来た

「あ、アルフ!？」

アンクを見て、フェイトは動揺し声を荒げた

それは、アンクが気絶したアルフを抱えていたからだった

「お、おい、アンク!手加減しろって言っただろ!!怪我してるじゃないか!!」

オーズはアンクに掴み掛かり頭を何度も殴って言った

フェイトよりオーズの方が動揺していた

「離せ!おう、お前!!今、俺の事何発殴ってんだよ!!ああ!？」

オーズの手を振り解き、今度はアンクがオーズに掴み掛かり殴り掛かった

「お前こそ！！その子に何したんだよ！？ああ！？」

とうとう2人で喧嘩を始めてしまった

「殴り掛かって来たからちょっと焼いてやっただけだろうが！！」

「何で焼くんだよ！！もつと他にやり方あっただろ！！」

「・・・あ、あの・・・」

フェイトはそれを見て、もう訳がわからなくなってしまった

「ほんっつと、ごめん！友達の子に怪我させちゃって！！」

映司はフェイトにアंक（無理矢理）と共に頭を下げていた

フェイトは戦いの疲れからか、壁を背に座っている

「おい、先に襲い掛かって来たのはコイツ等だぞ」

「いいから！女の子に怪我させたんだぞ！！問答無用で男は謝らないといけないんだよ！！しかも火傷だぞ！！痕が残ったらどうするんだよ！？」

「コイツ等の自業自得だろう」

「黙れ！この鳥野郎！！」

映司はアंकにそう言ってもう一度フェイトに頭を下げさせた

「あ、あの、もう、いいですから……。その人の言う通り、先に攻撃したのは私達ですから……」

謝り続ける映司にフェイトは少し困惑しながら言う

「アルフも少し経てば目を覚ますと思います。だから、大丈夫です」

「そっか、よかったぁ……」

映司は本当に安心したようにアルフを見て言った

「あ、あの、お名前を聞いてもいいですか？」

フェイトは映司とアंकの顔を見上げるようにして尋ねた

「え？あ、そういえば名乗ってなかったね。俺は火野映司。こっちはアंक、君は？」

映司はフェイトの前に膝を付いて座り、手を差し出した

フェイトは少し迷ったが映司の笑顔を見て答える事にした

「フェイト、フェイト・テストロッサです。こっちは使い魔のアルフ」

映司の手を握り、フェイトも名前を名乗った

「アルフちゃん、大丈夫かなあ・・・」

映司はまだアルフを心配そうに見つめている

「ふん、お人好しが・・・」

アंकは立ち上がってビルの縁に座って夜の街を見に行った

「・・・」

フェイトはアルフを心配している映司を見つめて言おうか迷っていた

しかし、自分達の目的を忘れる訳にはいかないと考え、勇気を出して映司に言う事にした

「あ、あの・・・」

「え？なに？」

「そ、その・・・ジュエルシードを私に・・・その・・・」

フェイトはしどろもどろになりながらも映司に何とか言おうとする

「・・・フェイトちゃん、1回深呼吸してみようか？」

「あ、はい・・・すう・・・はあ・・・」

「はい。じゃあ、もう1回聞くよ？なに？フェイトちゃん」

映司は笑ってフェイトに尋ねた

「あ、あなたの持っている、ジュエルシードを私に下さい！」

フェイトは今自分が持っている勇気を振り絞って映司に言った

「この事だね。何でフェイトちゃんはコレが欲しいの？」

映司は土から渡されたジュエルシードをポケットから取り出してフェイトに見せた

「か、母さんがジュエルシードを欲しがってるの・・・」

「お母さんが？何で？」

「・・・そこまでは教えてもらってない・・・」

フェイトは俯いて応えた

「そっか、はい」

映司はフェイトにジュエルシードを差し出す

「え？」

フェイトはそんな映司の態度に怪訝な表情を浮かべる

「あ、あの、もしかして・・・」

「必要なんですよ？ほら、俺達は別に要らないし、叶えたい願いも無い。集めろって知らない人から言われて集めようかなって考えてただけだから。お母さんと知らない人、どっちを優先させるべきかはすぐわかるよ」

映司はそう言ってジュエルシードをフェイトに握らせる

「あの、本当にいいの？」

「あ、2つだけ約束して欲しいんだけど、いい？」

「な、なに・・・？」

フェイトは何を言われるのかと少しビクビクしながら映司に言う

「この石を絶対悪用しない事、それと石の取り扱いに注意する事、怪我したら大変だからね。守れる？」

「え？そ、それだけ？」

「うん、それだけ」

「ほ、ホントに？その・・・他に要求したりは・・・」

「しないよ。アंकじゃあるまいし」

映司は笑いながらフェイトに言う

「おい、どついう意味だ？」

「うわぁ！？あ、アंक！？いつからいたんだ！？」

「さっきからだ！何がアंकじゃあるまいしだ！！」

アंकは映司の頭を引つ叩き言った

「あの・・・」

「何だ！！」

「あ、あ、あの・・・、その・・・」

アंकに怒鳴られ、フェイトは少し怯える

「止めるよ、アंक！怖がつてるだろ！ごめんね、なに？フェイトちゃん」

映司は凄んでいるアंकに抑えるように言う

「あ、えと、その・・・、ありがとう」

フェイトは映司に頭を下げると、バルディッシュの水晶部分にジュエルシードを取り込んだ

「う、うん・・・。フェイトお・・・無事かい・・・？」

気を失っていたアルフが目を覚まし、火傷を負った箇所を押さえながらフェイトがいる所まで歩み寄る

「アルフ、大丈夫？」

「う、うん。まだちょっと痛いけど大丈夫だよ。それより、ジュエルシードは奪えたのかい？」

アルフの問いにフェイトは首を横に振る

「うん」

それが合図となったのかアルフはこちらに歩み寄ろうとしている映司とアंकを睨みつけた

「ア、アルフ。ダメだよ。奪えなかったけど、渡してくれたから」

そう言いながらフェイトは映司から受け取ったジュエルシードをアルフに見せる

「え？そ、そうなのかい？」

「うん。だから、もう戦う必要は無いよ」

「そ、そっか、フェイトがそう言うなら・・・」

アルフはそう言つと警戒を解いた

「・・・おい」

「な、何だい？まだやるうってのかい？」

アंकに声を掛けられたアルフは拳を握り構える

「いや・・・、悪かったな。大丈夫か？」

「えっ？」

「ええっ!？」

そのアंकの発言にアルフが少し戸惑い、映司が驚愕した

「お、おい、アंक？熱でもあるんじゃないか？大丈夫か？」

映司はアंकのおでこに手を当てて言う

「・・・熱は無いみたいだな。じゃあ、明日はパンツの雨でも降るのかな？」

映司は空を見上げて不安そうに言う

「俺はもう2度と謝らない」

映司の言葉にアंकは固く誓ったのだった

「さうて・・・どうしようか・・・」

映司は伸びをして夜景を見ながら呟いた

「あの、どうしたの？」

「俺達さっきこの世界に来たから今日泊まる所無いからどうしようかと思って。やっぱり野宿かなあ」

お金も街の地理もわからない映司とアंकにはもう野宿という選択肢しかなかったのだ

「アंक、野宿でもいいか？」

「いつもの事だろ。今更聞くな」

「だよな。それじゃ、フェイトちゃん。ジュエルシードは俺達も集めないといけないからまた会うと思う。またね！」

そう言つて映司とアंकは取り合えず野宿出来る場所を探す為にビルから降りる事にし、歩き出した

「あ、あの！」

そんな2人をフェイトは呼び止めた

「なに？まだ何かあった？」

映司は振り返り、フェイトに尋ねる

「あの、もし、2人が良かったら私達の家泊まりませんか？」

映司にはフェイトが天使に見えた

「・・・アंक、天使がいるぞ」

「映司、しっかりしろ。フェイトは人間だ」

おかしい事を言い出した映司にアंकは頭を叩いて言った

「あ！でも、フェイトちゃんのご両親は許してくれるの？」

映司はハツと思い付き、フェイトに尋ねる

「私とアルフしか住んでないから大丈夫だよ。アルフもいいよね？」

「フェイトがいいなら、私はいいよ」

アルフは軽い感じで2人が泊まる事を承諾する

「うん・・・」

「映司、どうするかさっさと決めろ」

アंकは映司が渋っているのを見てイライラし始める

「他にアテがあるの？それとも私達の家はイヤ？」

フェイトが上目でどこか悲しい表情で映司を見つめる

（あれ？何もしないのに何だろう？この罪悪感・・・）

映司は何故か自分がやましいことをしたのでは、と思ってしまう

「フェイトとあたしがいいって言ってんだからさ。ありがたく受けなよ」

アルフが映司に覚悟を決めるように促す

映司はフェイトとアルフを見る

「・・・じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて、お世話になります」

映司は2人に軽く頭を下げた

「フェイトちゃん、さっきの服って戦闘服みたいな物なの？」

映司はフェイトの家に向かっていている間にフェイトに尋ねていた

「え？」

「いや、さっきと服装が違うから、どうなの？」

「バリアジャケットって言うんだけど・・・知らないよね」

フェイトは困った様な笑みを浮かべて言った

「うん、知らない。アंकは？」

「知ってる訳無いだろう」

アंकは聞くなという空気をかもし出して言った

その後、数分歩くとフェイトの家が見えて来た

「おお！凄い！ここがフェイトちゃんの家なの？」

映司はフェイト達が住んでいる高級マンションを見上げて声を上げた

そして、マンションに入って行く2人に零次とアंकも続く

そして、エレベーターに乗って上に上がる

（・・・耳と尻尾は消せるんだな）

アंकがアルフの耳と尻尾が消えているのを見て、自分の右腕も似たような物かと思った

エレベーターを出て少し歩いて部屋の前に到着し、鍵を開けて部屋の中に入った

高級マンションだけあって部屋の中は広く、ガラス張りの壁から綺麗な夜景が見える

フェイトとアルフはソファーに座る

「こんな凄い所に住んでるなんて、羨ましいなあ」

映司とアंकもソファーに座った

映司はちゃんと座っているがアंकはソファーに身体を倒し寝転がっている

「ところで、フェイトちゃんとアルフちゃんは何者なの？あの鎌みたいなのも凄かったし、バリアジャケットだっけ？あれも凄かったよ」

映司はずっと疑問に思っていたことを2人に尋ねる

「ああ、そうだ。お前達、一体何者だ？」

アंकも映司に便乗して2人に尋ねた

「私は『魔導師』なんだ。それで、アルフは私の使い魔だよ」

フェイトは2人の質問に答えた

「魔導師と使い魔か……。聞いたこと無いな」

映司は腕を組んで記憶の中を探すが覚えが無かった

「騎士なら知ってるがなあ。お前達が使っている魔法も俺達が知っている魔法とは違う様だなあ」

自分達が知っている魔法の魔法陣は、円形の中で正方形が回転する物ではなく三角形の中で剣十字の紋章が回転している物だった

「……時の流れだな」

アंकは隣にいる映司にしか聞こえないくらいの小さな声で呟いた

「……使い魔ってどういうものなの？」

映司は気を取り直してフェイトに尋ねる

「使い魔は魔導師が使役する一種の人造生物です」

「人造生物？」

「元々は普通の狼だったんだけど、ちょっと死病に掛かっちゃって・  
・。群から追放されて死に掛けていたところをフェイトに拾われ  
たんだよ。それで、フェイトがあたしと仮契約して、命を助けてく  
れたんだ」

アルフは幸せな出来事を思い出すように目を細め、優しい表情で零  
次に言った

「そうなんだ。フェイトちゃんは凄い魔導師なんだね」

映司は少し感動したようで目を潤ませながらフェイトに言った

「そ、そんな事ないよ。アルフもちっと褒めすぎだよ?。」

映司の言葉にフェイトは顔を赤くしながらアルフに言う

言われたアルフはニコニコ笑いながら尻尾を振ってる

フェイトが褒められて嬉しかったようだ

「あ、あの、今度はこっちから聞いてもいいですか？」

フェイトは遠慮がちに映司とアंकに言う

「うん、良いよ。何でも聞いて、アंकが答えてくれるから」

「俺か!？」

映司の発言にアंकはビックリした

「じゃ、じゃあ、映司とアंकは何者なの？」

「そうそう。映司は変身するし、アंकは背中から翼が生えるし。しかも、2人とも滅茶苦茶強いし。一体何者なんだい？それと、あのタカトラバツタつてのも気になる!」

「……コイツはオーズ、俺はグリードだ。後、歌は気にするな」

アंकは凄い雑に自分達の正体を明かした

「オーズとグリードってなに？」

フェイトは聞いた事がない単語に首を傾げる

アंकは更に詳しく説明する為に、コアメダルを出し、映司にドライバーを出させた

「この、オースドライバーに3枚のコアメダルを装填し変身するのがオーズだ」

「このメダルで変身するの？」

フェイトとアルフはコアメダルを手にとって見る

「そうだ。コアメダルは世界の様々な生物の力を蒐集、凝縮して造られたメダルだ」

「へえ、凄いんだね」

アルフはコアメダルをまじまじと見て言う

「じゃあ、グリードは？」

「自律意思を持つまでに進化したメダルを肉体として構成し、1個の生命体として誕生した存在だ」

「じゃあ、アंकの元はメダルなのかい？」

「ああ。だが、今は違う。メダルの塊だったのは映司と出逢うまでの話だ」

アंकは昔の嫌な事を思い出し、すぐに思考を止める

「まあ、こんなところだな」

アंकはメダルを身体に戻し、映司もドライバーを仕舞った

「映司とアंकって凄いだね」

フェイトは映司とアंकを見つめてそう言った

食事をご馳走になり、映司は片づけをしていた

因みに、インスタントばかりが出て来た為、映司が100円スーパーまで行き、食材を買って来て料理した

映司の料理はおいしく、フェイトとアルフには好評だった

しかし、鶏肉を使っていた為、アंकとは喧嘩になった

今、映司は食器を洗っている

フェイトに止められたが、泊めて貰ったお礼だと言って止めなかった

赤いシルクのような布を敷いたソファーに寝転がってアイスを食べている

因みにアイスは映司がついでに買って来た物だ

「フェイト〜！シャワー浴びるけど一緒に入るかい？」

バスルームからアルフのフェイトを呼ぶ声が聞こえた

既にバスルームに入っているらしく、一緒に入ろうとフェイトを誘ったようだ

「あ、うん、わかった！今行くよ、アルフ！」

そう言ってフェイトもバスルームに向かおうとした

しかし、途中で映司とアंकの方に振り返った

「映司、アंक」

「なに？フェイトちゃん」

「ああ？」

映司は食器を洗う手を止めてアंकは背凭れの向こうから少し顔を  
出してフェイトを見る

「2人はそんな事する人じゃないと思うけど・・・」

フェイトが何を言おうとしているのか映司には理解できた

「わかってる、覗かないよ。早く行っておいで、アルフちゃんが待  
ってるよ」

「ガキの身体に興味なんかあるか。さっさと行け」

そう言って映司は洗い物を再開し、アंकは姿勢を戻した

「・・・っん」

フェイトは2人の返答を聞いた後、少し不満に思いながら、パジャ  
マを持ってバスルームに向かった

「最近の子は進んでるんだな」

映司はフェイトの言動を見聞きし、笑いながら言い、洗い物を続ける

「背伸びしてるただのガキだ」

アंकは鼻で笑うとまたアイスを食べ始める

「まあ、今の俺達も子供だけだな」

「・・・」

珍しく映司に言い返せないアंकだった

海鳴市のある廃墟

「お、お前！何なんだよ！？」

一般的に不良と呼ばれる類の青年が突然現れ、仲間を痛めつけた黒いローブを着た男に怯えながら言う

「・・・その欲望、解放しろ」

男はそう言つとセルメダルを取り出して青年に投げた

青年の額にスロットが現れ、メダルが入る

すると、青年の腹の辺りからミイラ男のような怪物が現れた

「ひいゝ！？な、何なんだよゝ！？」

青年は腰を抜き逃げずにも出来ずにミイラ男をただ見つめていた

「これはお前の欲望だ」

男はミイラ男の横に立ち、青年に言う

「お前には、これもやろう」

そう言ってミイラ男に青い宝石を投げ付けた

宝石はミイラ男の体内に吸収され、力を流し込んだ

「お前の『願い（よくぼう）』、利用させてもらっぞ」

男は青年にそう言っつとミイラ男を連れて消えた

この世界に、初めてヤミーが誕生した瞬間だった

第2話『出逢いとジュエルシードとヤミー』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

### 第3話『温泉ともう1人と理由』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

### 第3話『温泉ともう1人と理由』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、門矢士に導かれ、映司とアंकはとある世界の過去にやって来た

2つ、ジュエルシードを求めるフェイトとアルフに出逢い、戦う

そして3つ、行くあてが無かった映司とアंकはフェイトの家に泊まった

第3話『温泉ともう1人と理由』

フェイトが住む高級マンションの屋上

そこに、朝っぱらからアイスを食べているアンの姿があった

チャリンチャリンチャリン

「・・・セルメダル、随分速い速度で溜まってるな」

アンはセルメダルが大量に生まれている気配を感じていた

「だが、場所がわからないだ？何だ、この鬱陶しい気配は・・・」

しかし、何故かヤミーの居所がわからなかった

「チツ、厄介な世界に来たもんだなあ」

アンはアイスを食べ終わると、フェイトの家に戻って行った

くフェイトの家く

映司は早起きして朝食を作っていた

「まさか、自炊がこんなところで役に立つなんてなあ、よつと！」

映司はホットケーキをうまく引つ繰り返してちよつと嬉しくなった

（何だろう？何かいい匂いがする）

先程まで熟睡していたフェイトは鼻腔をくすぐられ目を覚ました

眼をこすり、ベッドのそばで眠っている狼を揺する

「アルフ、アルフ。朝だよ」

「うん」

狼は起き上がって、伸びをする

狼は起き上がると、少女の姿・アルフに変わった

「おはよう、フェイト。あれ？何かいい匂いがするねえ、何だい？」

「多分、映司だと思う」

「映司が？」

「うん。昨日も晩御飯作ってくれたでしょ？きっと今朝も作ってくれたんだよ」

フェイトはそう言ってパジャマから私服に着替えてリビングに向かった

2人がリビングについていた頃には映司がテーブルに4人分の朝食を置いていた

「おはよう。フェイトちゃん、アルフちゃん」

「おはよう、映司。今朝も作ってくれたの？」

「うん。泊めて貰ったお礼だよ。ほら、座って？アंकもそろそろ戻って来ると思っから」

映司はそう言ってキッチンに残りの朝食を取りに行った

「あんなに気を使わなくてもいいのに・・・」

フェイトは少し申し訳なさそうに言い、席に座る

「まあ、おいしい物が食べれるからいいけどね！」

アルフもフェイトの横に座り、ホットケーキを見て涎を拭っている

そんな事していると、ベランダからアंकがやって来た

「あ、アंक。おはよう」

「おはようー！」

フェイトとアルフはアंकに挨拶をするが・・・

「ああ、お前等か。朝っぱらから元気だな」

挨拶を返さず、アルフの向かいに座った

「おお、アंक。帰って来たのか」

映司がアंकと自分の分のホットケーキを持って来てテーブルに並べる

「よし！じゃあ、食べよっか」

「「「いただきます！」」」

「・・・い・た・だ・き・ま・す」

アंकは何故か変な言い方である

「アंक全然慣れないよな。挨拶とか」

「俺は必要な事しか覚えないんだ」

アंकは頼杖をついてホットケーキにハチミツを掛け、頼張りながら言った

「あ、2人共何掛ける？バターにマーガリン、ハチミツにクリーム、ジャムもあるよ？」

「じゃあ・・・バターとハチミツで」

「あたしはバターとクリームを貰おうかな」

「わかった。はい」

映司は2人に言われた物をそれぞれ渡す

2人はそれを掛けてホットケーキを頼張った

「あ、おいしい・・・」

「うん！おいしいよ！映司！」

映司のホットケーキはフェイトとアルフには好評だった

「口に合ってよかった。アルフちゃん、まだおかわりあるからね」

「うん！」

ガツガツとホットケーキを食らうアルフに映司は笑いながら言った

「おい、映司。おかわりだ」

「はやっ、ちょっと待ってるよ」

映司はアंकから皿を受け取り、キッチンに向かった

「・・・アंकはずっとこんなおいしい物食べてたの？」

「まあ、アイツとは長い付き合いだからな。最初は不味くて食えたもんじゃなかったがなあ」

フェイトに尋ねられ、アंकはメンド臭そうに答える

「良いね、ドックフードよりおいしいよ」

「・・・犬かお前は」

「あたしは狼だ!!」

アングの呟きにアルフは身体を乗り出して言った

「あ、アルフ？落ち着いて？」

「あれ？何喧嘩してるの？」

フェイトがオロオロしていると、ホットケーキを持った映司が戻って来た

「映司！アングが酷いんだよ!!」

「え？どういこと？」

「あたしは狼なのに、アंकが犬だって言っただ！！」

アルフは映司に泣き付いた

「お前がドックフード食ってるからだろうが！！」

「まあまあ、アंकもアルフちゃんも落ち着いて。アंक、アルフちゃんは狼らしいから気をつけるよ。アルフちゃんもドックフードなんて食べてるから勘違いされるんだよ？」

「う、ううゝ・・・」

映司の言う事も尤もな事なのでアルフは反論できなかった

「ほらコレ、おかわり。コレ食べて機嫌直して？」

映司はアルフとアंकにおかわりのホットケーキを渡して言った

「・・・映司がそう言うなら・・・しょうがないね」

アルフは大人しく座ってホットケーキを食べ始める

「・・・映司って、凄いね」

フェイトは映司がアルフとアンの喧嘩を瞬時に終わらせてしまったのを見て呟くのだった

朝食を食べ終わると、映司は洗い物を始めた

フェイトも手伝おうとしたがそれは映司に遮られた

「洗い物は俺がやるから、フェイトちゃんは寛いでいいよ」

映司は言い出すと聞かないと昨日わかったのでフェイトは潔く引き下がりリビングで寛いでいた

アックとアルフは当然のようにソファで思いっきりふんぞり返っていた

洗い物を終えた映司は3人と同じ様にソファに座った

「ねえ、フェイトちゃん。ジュエルシードっていくつ集まってるの？」

「え？えつと・・・映司に貰ったのも合わせると2つだよ。まだ始めたばかりだから全然集まってないんだ・・・」

「そんな事ないよ、もう2つも集まってるんだ。凄いね」

「そ、そうかな？あはは・・・」

映司の言葉に少し照れた様にフェイトは言った

「あ、そうだ。明日、あたしがジュエルシードを見つけた所に行くんだけど、映司達も来るかい？」

「え？」

アルフの発言に映司は首を傾げた

「ちょ、ちよつとアルフ！映司達にも都合が――」

「行くよ？俺達もジュエルシードを集めないとダメだから」

「ええ！？」

映司の発言にフェイトは凄じ驚いた

「で？場所は？」

「海鳴温泉だよ！」

「「海鳴温泉？」」

地名を知らない映司とアंकはリピートするのだった

「その近くにジュエルシードがあるの？」

「うん。アルフが見つけたんだよ」

フェイトがそう言うとアルフが胸を張った

「ところで、オンセンって何だい？」

「……」

映司がフェイトの顔を見ると、フェイトも知らないという顔をしている

「ハッ！傑作だなあ、馬鹿丸出しだ」

「な、何だと！？じゃ、じゃあ、アंकは知ってるって言うのかい！？」

アルフはアंकに馬鹿にされて怒りながら言う

「温泉ってのはな、地中から湯が湧き出す現象や湯となっている状態、またはその場所を示すんだよ。それぐらい知つとけ、犬っころ」

アंकは憎たらしい笑みを浮かべてアルフに言った

「くうー！くーやーしいー！！」

アルフは頭を抱えてアंकに負けた事を嘆き始めた

「自然に沸いたお湯を大きなお風呂にして、みんなで入る場所だよ」

「大きなお風呂？」

「まあ、実際に見た方が早いかな」

そう言って映司は情報誌を取り出す

「なにそれ？」

「情報誌だよ。海鳴市の事ならコレを見たら大体はわかるはずだから。えーつと温泉街は・・・」

昨日の夜、アंकにスマホの使い方を聞いて、この本と情報を照らし合わせていたのだ

旅をするなら下調べが重要だという旅人の常識である

ページを捲る映司をフェイトはじっと見ていた

「ん、何？どうしたの？フェイトちゃん」

フェイトの視線が気になった映司は情報誌から目を離し、フェイトを見た

「えっ！？な、何でもないよ！本当だよ！？」

フェイトはいきなり目が合ってかなり慌てていた

「そ、そう？・・・あ、あった」

映司はフェイトとアルフに見せる

「えーっと、『ここは海鳴温泉街。来て満足！入って極楽！日頃の疲れを全部洗い流そう！』だって」

アルフがフェイトに聞かせるように情報誌を読み上げた

「今から予約取れるのか？そこに電話番号があるだろ、見せてみる」

アंकは映司から情報誌を奪い取り、書いてあった電話番号に電話を掛け始める

「映司、旅館って直に行ったら泊めてくれるんじゃないの？」

「さ、さあ？どうなんだ？アंक」

フェイトと映司の質問にアंकは呆れたように溜息をつく

「予約しなけりゃ泊まれない所も山ほどある。念のためだ」

恐らく、この中で一番常識を持っているのはアंकだろう

まあ、それもクイントに憑依したお陰なのだが・・・

『・・・はい、海鳴温泉、旅館山の宿です』

そうしていると、女性の声アंकの耳に入った

「ああ、宿に泊まりたいんだが、部屋は空いてるか？」

『はい。空いているお部屋もあります。ご予約していただければ確  
実ですよ』

「そうか、明日行く。頼むぞ」

『承知いたしました。来客は何名でしょうか？あと、お客様のお名  
前は？』

「大人1人と子供3人の4名だ。名前は火野だ」

『火野様ですね。ご来館お待ち申し上げております』

そう言うと、通話が切れた

「これで、大丈夫だろ」

そう言ってアंकはテーブルの上に情報誌を投げてソファーに寝転

がっ  
た

「ありがとう、アंक。助かったよ」

「無駄足を踏むのはごめんだからなあ」

映司がアंकにお礼を言うと、アंकはそう言った

「じゃあ、明日の準備しようか」

「うん」

「はい」

映司の一声にフェイトとアルフは各々の返事で返し、明日の準備に取り掛かることにした

次の日

「海鳴温泉街」

バスに乗って4人は海鳴温泉街にやって来ていた

「へえ、こんなに沢山温泉があるんだ」

歩きながら映司はさっき貰ったパンフレットを見て呟いていた

「映司は温泉が好きなの？」

隣でフェイトがパンフレットを覗きながら言う

「特別好きって訳じゃないけど、気持ち良いから好きかな」

どうやら、800年前でも温泉はあったようだ

そして、4人は前日に予約した温泉旅館に着いた

「す、すいません、予約していたひ、火野ですけど・・・」

フロントでアルフがそう言うのと、法被を着た中年男数名と和服を着た妙齢の女性一人が笑顔で迎えた

「ようこそお越しいただきました。お部屋にご案内させていただきます」

女将らしき女性がそう言うのと、中年男が4人の前に寄ってきた

「お荷物をお持ちいたします」

「あ、じゃあこの子達の荷物をお願いします」

映司はフェイトとアルフの荷物を渡した

アंकの荷物は自分の荷物と一緒に映司が持っている

部屋に案内された4人は荷物を受け取り、部屋の端に置くとそれぞれ自由な行動をとった

「綺麗な景色だねえ。フエイト」

「うん、でも、私達は旅行じゃなくてジュエルシードを探しに來た  
って事を忘れちゃダメだよ？」

「わかってるよ」

フエイトとアルフは部屋から景色を眺めている

アंकはパンフレットを見て何かを探している

映司は4人分の茶を淹れていた

「2人とも、お茶淹れたよ。ほら、アंकも」

そう言うと映司は3人の茶をテーブルに置いた

「ありがとう。映司」

「何か食べる物ないのー？」

フェイトは素直に受け取り、アルフは食べ物の催促までしてきた

「この中に入ってるよ」

テーブルの上に来る途中で買ったお菓子をアルフの前に差し出した

「これからどうしようか？まだ日が暮れるまで余裕あるから今から探す？ジュエルシード」

「そうだね。今日は日が暮れるまで探そう。アルフは？」

「あたしは先に温泉に入るよ。フェイト、後で感想聞かせてあげるからねえ」

アルフはバスタオルと浴衣を持って浴場に向かった

「あ、うん。楽しみにしてるよアルフ」

良太郎とフェイトはアルフを見送った

「アंकはどうするんだ？」

「うまそんなアイスが無いか探してくる。映司、財布寄越せ」

「使い過ぎるなよ？」

そう言って映司はアंकに財布を渡した

すると、アंकも部屋を出て行った

旅館から出た映司とフェイトは早速ジュエルシード探しに取り掛かっていた

アルフが浴場に向かいアंकがアイス探しの旅に出た後、フェイトは探索魔法を部屋で使った

しかし、地理がわからない状態だった為、曖昧な結果となってしまう

地理さえ理解すればもっとハッキリとわかるらしい

フェイトにこの辺りの地理を記憶してもらう為、2人は旅館から出たということだ

「ごめんね、映司。もっとハッキリわかればよかったんだけど・・・」

隣に並んで歩いているフェイトが申し訳なさそうに謝った

「大丈夫だよ！フェイトちゃん！」

そう言いながら映司はフェイトの肩に手を置いて、フェイトの前に立った

「え？え、映司？」

「この温泉街の何処かにあるっていうのはわかってるんだから、見つかってるも同然だよ！だから、そんな暗い顔しちゃダメだ。ね？」

「・・・うん。そうだね。そうだよね」

「そうだよ。前向きに考えよう」

「うん！」

フェイトは映司に励ましに応えるように頷いた

映司は笑顔になり、フェイトの頭を撫でた

「え、映司。その・・・恥ずかしいよ」

フェイトは頭を撫でられ、顔を真っ赤にする

「ああ、ごめんね。フェイトちゃん」

映司はフェイトの抗議にあっさりと引き下がり、撫でるのを止めた

「あ・・・」

離れた瞬間、フェイトは残念そうな声を漏らした

「フェイトちゃん？」

「あ、ううん。な、何でもないよ！行こう！映司！」

フェイトは照れを映司に見られたくないのか早足で歩き出した

「フェイトちゃん、どうしたの？」

「な、何でもなかったら！」

「あ、そ、そう・・・」

（何か怒らせるような事したかな？）

映司はフェイトが何故早足に歩き出しのか理解できていなかった

9歳とは思えない早足なので映司は走って追いかけた

アंकはアイス探しの旅から戻って来ていた

「まったく、夏限定なんて聞いてないぞ・・・」

どうやら、目当てのアイスは夏限定のアイスだったようで、今は春なので手に入らなかったようだ

「おまけに、ヤミーの気配が近くからするが、居場所はわからないと来た・・・何の嫌がらせだ？」

アंकはヤミーの気配がするのに居場所がわからない事にイライラしていた

仕方がないので温泉に入る事にして、向かっていたのだった

「チツ・・・。あ？何やってんだ？アイツ」

温泉を目指して通路を歩いていると通路の途中でアルフが、3人の

少女と絡んでいた

アंकはアルフに近付いて行った

「君かね？うちの子をアレしてくれちゃってるのは？」

アルフは3人の中の1人をマジマジと見て言う

「え、え？」

「あんま賢そうでも、強そうでもないし、ただのガキンチョに見えるんだけどねえ」

困惑している少女にアルフは訳のわからない事を言う

すると、金髪少女がアルフの前に立ち睨んだ

「『なのは』、お知り合い？」

「う、ううん」

後ろに下がっている『なのは』と呼ばれた少女は首を横に振る

「この子、あなたを知らないそうですが、どちら様ですか？」

金髪の少女はアルフにキツイ口調で尋ねた

両手に拳を作って精一杯強がっている

「ただの酔っ払いだ」

そう聞こえた瞬間、アルフの脳天に拳骨が繰り出された

「いったーい！！誰だい！？何すんのさ！？」

アルフが頭を押さえて振り返るとそこにいたのは右手をグリード化したアंकだった

「お前こそガキ相手に何やってんだ？」

「あ、アंक！？ち、違うんだよ！」

「言い訳は映司とフェイトがいる場所で聞いてやる」

「そ、そんな〜」

アルフにそう言い放つと、アंकはなのは達3人を見る

「この馬鹿犬が悪かったな。後で躰けておくから許してやってくれ」

「え、あ、はい・・・」

「行くぞ、アルフ」

アंकはアルフの首根っこを掴んで引き摺って行った

《お、覚えておきなよ！おイタが過ぎるとガブツといくからね！！》

アルフは引き摺られながらなのはに念話を飛ばして言うのだった

まあ、ガツンとやられたのはアルフだが・・・

アंकはなのは達から離れた場所に来ると、アルフの首根っこを離した

「ひ、酷いじゃないのさ！アंक！！」

「あのガキ、ジュエルシードを持ってるな」

アルフの講義を無視してアंकは言う

「え、えっ？気付いてたのかい？」

アルフは目をまん丸にして驚いたようにアंकに言った

「奴からジュエルシードの気配を感じた」

アंकは右手を人間体に戻して言う

「しかも、俺達より集めてやがる。気に入らない」

「そ、そこまでわかったのかい？ 凄いね、アंक」

「部屋に戻るぞ、映司と話して対策を立てる」

アंकはそう言って部屋に向かい歩き始めた

「あいよ。．．．それにしても、何で殴ったんだい？」

「イライラしてたんだよ」

「八つ当たり！？」

アंकにビックリするアルフだった

カラスが空を飛ぶ風景がさまになる夕暮れの時

海鳴温泉街は昼間以上に人で溢れていた

映司とフェイトはジュエルシード探しをしていた

「もう夕方だね、そろそろ切り上げようか？」

映司は茜色に染まって来た空を見て言う

「うん、そうだね。ジュエルシードの場所も特定出来て来たし、夜には捕獲出来ると思う」

フェイトも映司の意見に同意した

「じゃあ、ご飯食べてからアंकとアルフちゃんも連れてみんなで探しに来よう」

「うん」

そう話して、2人は旅館に向かって歩き始めた

その時、映司のスマホが鳴った

「あれ？アंकからだ。もしもし？どうしたんだ？アंक」

《映司、厄介な事になった。さっさと戻って来い》

「え？あ、わかった。すぐに戻る」

映司はそう言って通話を切った

「どうしたの？映司」

「何か、厄介な事が起こってるらしい。早く戻ろっ、フェイトちゃん」

「う、うん。わかった」

そう言って、2人は旅館に向かって走り出した

部屋に戻って来た映司とフェイトは既に帰って来ていたアंकとアルフの正面に座った

「で？厄介な事ってなんだよ？アंक」

「ジュエルシードを集めてる子がもう1人、この旅館に泊まってるんだよ」

アルフはちょっと言い難そうに映司に言った

「えっ？じゃあ、衝突するかもしれないって事？」

「そういう事だ」

映司の問いにアंकはアイスを食べながら頷いた

「・・・話せば譲ってくれそうな子じゃないのか？アंक」

「どうだろうなあ？俺も少し顔を合わせただけだ」

「そっか……。フェイトちゃんとアルフちゃんはどっ思っ？」

映司はさっきから黙っているフェイトと俯いてるアルフに尋ねる

「どうだろう……。わからないよ……」

「あたしも……」

フェイトとアルフは俯いて言った

「そっか……。じゃあ、難しい事は考えないで、温泉入って、ご飯食べよっか」

「えっ？」

映司の提案に2人は驚き、アंकは不適な笑みを浮かべている

「わからない事をいくら考えてもわからないよ。そういうのって、なるようにしかならないし。マズイ事になったら俺とアंकが何とかするよ。ジュエルシードの交渉がしたいなら、アंकに頼めばう

まくやってくれる。だから、今はおいしいご飯食べて、戦う準備をしておこう?」

「・・・うん。そうだね」

映司の提案を聞いてフェイトは笑って頷いた

「映司、アンタ、良い奴だね! アンクは知らないけど」

「おい、もう1発喰らつとくか?」

「いや、それは勘弁しておくれよ!」

右手をグリード化させたアンクを見て、アルフは怯えたように言った

その時、部屋の電話が鳴り出したので、映司が受話器を取った

「はい」

《夕食はいつ頃お持ちすればよろしいでしょうか?》

相手は男性従業員だった

部屋の時計の時刻を見る

「・・・えーっと・・・１時間後くらいでお願いします」

《かしこまりました》

お互いに言つべき事を言い終えたので、電話は切れた

受話器を置くと、映司は鞆からバスタオルを出して浴衣を持った

「さてと、温泉行ってくるけど、アंकも行くか？」

「・・・温泉入った後のアイスもうまいかもなあ」

そう言つてアंकも用意していた浴衣とバスタオルを持った

「あ、待つて。私も行く」

フェイトも2人につられ、鞆からバスタオルを出して、浴衣を持った

「あたしももう1回入るーっと」

アルフは昼に入って気に入ったのか入浴する気満々のようで、既にバスタオルも持っている

1人で女湯に入る事に心細さと不安を持っているフェイトへの配慮であろう

結局、4人で温泉に向かった

「それじゃ、俺達より先に上がっても待たずに部屋に戻っていいから」

風呂場の入り口前にフェイトとアルフにそう言つと、映司は男湯の中に入っていった

「うん」

「わかったー」

フェイトとアルフも頷くと、女湯に入っていた

「・・・映司」

「ん？何？シャンプーか？」

頭を洗っていた映司はアंकに声を掛けられてシャンプーを渡す

「違う、しかもそれはボディーソープだ」

「ああ、ごめん。で、何だよ？」

「この温泉街からヤミーの気配がする」

「・・・ホントか？」

映司は頭を洗うのを止めて、アंकに尋ねる

「ああ。気配は感じるんだが、どういふ訳か居場所がわからない。  
しかも、メダルが異常な速度で溜まってやがる」

「・・・ジュエルシードのせいかな？」

「願いを叶える石、か。十分にありえるなあ」

「そうか・・・。とりあえず、フェイトちゃん達から離れないようにしておかないとな」

「ああ、今はそれしかない」

2人は溜息をついて、各々身体を洗い始めた

温泉から上がり、夕食を食べ終えた後、4人は森の中を歩いていた

しかし、決して散歩ではない事は4人の真剣な表情からわかる

フェイトとアルフはバリアジャケットをすでに纏っている

映司は普段と変わらないが腰にドライバーを装着し、アंकは右手をグリード化させている

先ほど探索魔法を用いた結果、海鳴温泉街の森の中にあるということがわかった

だが、森の中といっても何処も似たような風景なのでピンポイントで見つける事は出来なかった

ここからは自分達の目が頼りになる

「森の中っていつでも結構広いし暗いんだねえ」

アルフが草の根を分けたり、木の枝に引っかかっていたりしないかとキョロキョロしている

「みんなで探せばすぐに見つかるよ、フェイトちゃんが頑張ったんだから俺達も頑張らないと。アंक、頼むぞ」

映司は草むらを掻き分けながら言う

「お前も探せ」

小さな炎を出し、照らしながらアंकは探している

「出てこーい！ジュエルシード！」

アルフはジュエルシードを呼びながら茂みを掻き分けながら探す

「呼んでも出てこないって・・・」

映司とアルフがそんなやりとりをしながら探している姿を見てフェイトは小さく笑みを浮かべていた

（ジュエルシードが発動してくれればすぐに見つかるんだけど・・・）

フェイトがそのような希望を内に秘めた時だった

「「「・・・ッ!」」」

フェイトとアルフとアंकの動作が急に停まった

「どうしたの？2人共？アंकまで」

映司は3人の動きが止まったのを見て尋ねる

「映司、見つけたよ」

「遅れないでね!」

そう言うと同時に、フェイトとアルフは森の中に潜って行った

「ま、待ってよ!2人共!アंक!」

「わかってる。行くぞ」

アंकは答え、2人はフェイトとアルフを追い掛けた

森の中でありながら小さな川があり、それを渡れるように小さな橋が架かっていた場所

そこにフェイトとアルフ、そして映司とアंकはいた

4人は川の一部分から発せられていると思われる天上に向かって昇っている1つの光を見ていた

「凄いねえ。これがロストログアのパワーってやつ？」

「随分と不完全で不安定な状態だけだね」

アルフはジュエルシードの発動に素直に感心し、フェイトは対照的に冷静に分析していた

「これがジュエルシードの発動状態なんだ。何か凄いな」

「メダルに比べれば大した事ない」

映司は感心していたが、アंकは大した事ないと言い切った

「アンタのお母さんは何であんな物を欲しがるんだろうね？」

「さあ？わからないけど、理由は関係ないよ。母さんが欲しがってるんだから、手に入れないと」

そう言つてフェイトはバルディッシュを握る

「バルディッシュ、起きて！」

「Yes sir」

フェイトの左手の手袋の甲からスタンバイフォームのバルディッシュが外れ、デバイスフォームになってフェイトの手に握られる

「封印するよアルフ。サポートお願い。映司とアंकは危ないから下がつて」

「へいへい」

「わかった、気をつけてね。フェイトちゃん、アルフちゃん」

「さっさと片付けろ」

フェイトはバルディッシュをシーリングモードにする

周囲に黄金の光が稲妻状に走り、川の水が蛇か竜のような動きを見せた

映司とアंकはフェイトがジュエルシールドを回収するのを見守っていた

「これで、3つ目」

フェイトの手にジュエルシールドが収まった時、肩にフェレットを乗せ、白い服を着た少女・なのはがやって来た

「あゝあらあらあらあら。やっぱり来ちゃったか」

「お前、あらって何回言っただ。白々し過ぎるだろ」

アルフの発言にアंकは小さな声でツツコンだ

「ああ!？」

なのははアルフの事を思い出したらしく、声を漏らした

「子供は良い子でって、言わなかったっけか？」

アルフはなのはに言う

「何処の悪役だ？」

またアंकは小さな声で言った

「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ!？それは、危険な物なんだ!！」

なのはの肩に乗ったフェレットが叫ぶように言う

「・・・フェレットが喋ってる」

映司は喋っているフェレットを見て呟く

「さあね？答える理由が見当たらないよ。それにさあ、あたし親切で言ったよね？良い子でないとガブツと行くよって」

「っ！？」

アルフの言葉になのはは警戒を強めた

次の瞬間、アルフの全身が光りだした

やがてその光は人の姿から別のものになっていく

その姿は大きな狼の様なものになった

「・・・本当に狼だったんだ」

「俺からしたら犬も狼も一緒だ」

小さな声で話している映司とアंक

「アンタ達！さっきから聞こえてるんだよ！！ちょっとは驚いたら  
どうだい！！」

「うわぁ！？ごめんごめん、アルフちゃん！」

「こっち向くな、涎が汚いんだよ！！」

「何だって！？もう怒った！ガブツと言ってやる！！」

アルフはなのはを放置してアंकとじゃれ付き始めた

「やっぱり彼女は使い魔だったか」

狼のアルフを見てユーノが言う

「使い魔？」

なのは聞いた事のない言葉に首を傾げた

「そう。あたしはこの子に造って貰った魔法生命。主の魔力を命とする代わりにその命と力の全てを賭けて護るのさ」

アルフが自分について説明した

「涎でベタベタにしゃがって・・・」

その後ろではアンクが涎に汚れた服を見つめている

「全身グリード化すればいいんじゃないか？」

「ああ、そうか」

そう言ってアンクは全身をメダルで覆い、グリード化した

「「「・・・」」」

それを見たフェイト、アルフ、なのは、フェレットは口をあけて驚

いていた

「あ？何見てんだ？」

アंकは人間体に戻り、服の涎が消えている事を確認してから首を傾げた

「あ、アंक？さっきのは何？変身魔法？」

フェイトはアंकに恐る恐る尋ねる

「あ？言っただろ、俺はグリードだ。さっきのが俺の本当の姿だ」

アंकは何言っただという顔をしてフェイトに言った

「アंकのグリード態、かっこいいよな」

映司は久しぶりに見たアंकのグリード態に感心しながら言った

「・・・あ、そうだ。ジュエルシールドだよ。君も集めてるんだよね？どうして？」

映司はジュエルシードを何故集めているのかなのはに尋ねた

「え？あ、はい。お友達の捜し物だからお手伝いしてるんです。あ、でも、今はそうじゃなくて、私がしたいからって言うか……。と、とにかく！私は私の意志でジュエルシードを集めてます！」

「へえ、そうなんだ。その友達って言うのは、その肩の？」

映司はなのはの肩に乗っているフェレットを見て言った

「え？あ、はい。『ユーノ』君です。ジュエルシードは元々ユーノ君が発掘した物なんです！」

「ああ、そう。でも、フェイトちゃんにも譲れない物があるんだよね？フェイトちゃん」

「う、うん。母さんの為だから……。ジュエルシードは譲れないんだ！」

フェイトは急に振られた為、少し慌てたが答えた

「そうなんだ、教えてくれてありがとう」

「え？」

なのはの急な言葉にフェイトは少し驚く

「この前会った時は教えてくれなかったから……。何もわからな  
いまま戦うのは、やっぱり嫌だもん。あなたにも、やっぱり譲れな  
い物があるんだね」

なのはは自身のデバイス『レイジングハート』を降ろし、優しく笑  
いながら言った

「でも、私にも譲れない物があるんだ。ジュエルシードが暴走した  
ら、たくさんの人に被害がでちゃう。そんなの嫌だから私はジュエ  
ルシードを集めてるんだ」

「・・・そっか。じゃあ、勝負しよう。お互い、ジュエルシードを  
1つずつ賭けて！」

「うん！」

そう言つて2人は自身のデバイスをそれぞれ構えた

「・・・映司、何であんな子にフェイトがジュエルシードを集める理由を教えたんだい？」

そんなフェイトとなのはを見てアルフは映司に言った

「あの子も言つてたけど、何もわからないまま戦うなんてやっぱり嫌でしょ？そんなの機械でも出来るし。俺達には自分の意思もある、話せる口も言葉もある。なら、まずは話し合おうよ。そうすれば、お互い分かり合えるかもしれない。それでも譲れない物があるのなら戦えばいい。でも、それは、敵とかじゃなくて、お互い競い合うライバルみたいになれるんじゃないかな？絶対にそっちの方がいいでしょ」

映司は腕を組んでフェイトとなのはを見て言った

「そつか・・・そうだよな。やっぱり凄いね、映司は」

アルフは映司の顔を見上げてそう言った

なのはとフェイトの対決

先に動いたのはフェイトだった

なのはの後ろに回り込み、バルディッシュを振るう

「くっ！」

「F l i e r   f i n」

なのはは足からフライヤーフィンを展開し、空に舞い上がってフェイトの初撃をかわした

フェイトも、なのはを追って空を飛ぶ

「なのは！」

それを見てユーノはなのはを助けようとした

「ダメだよアンタ！これはあの子達の真剣勝負なんだ！」

それを見てアルフはユーノを止めた

「そうだよ、ユーノ君。あの2人の邪魔をしちゃダメだよ」

そう言いながら映司はユーノを抱き上げた

「でも……」

「ユーノ君はなのはちゃんの友達なんですよ？だったら、信じてあげないと」

「……はい。そうですね」

そう言ってユーノは戦っているなのはを見上げた

（なのは、頑張っ！）

そして、心の中で応援していた

場面は戻ってなのはとフェイトの空中戦

フェイトの足元と前方に魔法陣が展開された

「Thunder smasher」

バルディッシュから金色の閃光が放たれる

「Divine buster」

なのはのレイジングハートからも桜色の閃光が放たれた

2つの閃光が火花を散らせて激しく衝突し合う

「レイジングハート！お願い！！」

「All right」

なのはの一声でレイジングハートは更に威力の高い一撃を放った

桜色の閃光が更に勢いを増して金色の閃光を押ししていく

「ッ!!」

金色の閃光が桜色の閃光に掻き消され、フェイトは少し表情を強張らせた

しかし、冷静に状況を判断しフェイトは次の手を打つ事にした

なのはが放ったデイベインバスターはフェイトが放ったサンダースマッシャーを完全に消し去った

地上で見ていたユーノは驚いた

「なのは・・・強い!」

だがフェイトの使い魔アルフは冷静だった

「でも・・・魔法に関してはまだ素人みたいだね、甘いよ」

アルフは勝負の結末を読んだ

なのはが放ったデivainバスターはフォトンランサーを完全に消したが、そこにはフェイトの姿はなかった

「Scythe Slash」

「なのは!!」

ユーノがフェイトの姿を見つけ叫ぶ

「あっ!?!」

なのはもフェイトの姿を見つけたが既に遅かった

フェイトがバルディッシュのサイズモードにし、なのはの首元に突きつけていた

「・・・にやはは、負けちゃった」

「・・・」めんね

フェイトはなのはに向かって謝った

「どうして謝るの？あなたが強かったただだよ。レイジングハート」

「Pull out」

レイジングハートから女性の電子声が聞こえて、赤いコアからジュエルシールドが1つ出てきた

「はい、コレ」

なのはは潔く、フェイトにジュエルシールドを渡した

「・・・あ、ありがとう」

「うっん、次は負けないからね」

なのはは笑ってそう返した

「・・・うん」

なのはの言葉にフェイトは頷いた

戦いが終わり、2人は完全に緊張の糸が切れ油断してしまっていた

「ジュエルシールドをよこせえ！！！！！！」

緑の身体に鎌を持つ怪物・カマキリヤミの攻撃が少女達を襲った

### 第3話『温泉ともう1人と理由』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第4話『欲望と願いと進化』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第4話『欲望と願いと進化』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、ジュエルシードを求めて、映司達は海鳴温泉にやって来た

2つ、フェイトは同じくジュエルシードを求める少女、なのはに再会する

そして3つ、対決後に油断していた2人にカマキリヤミーの鎌が襲い掛かった

第4話『欲望と願いと進化』

戦う者なら皆、戦闘後に1番油断してしまう

それは、2人の魔法少女も一緒だった

「ジュエルシードをよこせえ！！！！」

フェイトとなのはは不意を突かれ、動く事が出来なかった

相手が人間だったなら話はまた違っただろう

バリアを張り攻撃を防ぐなり、回避行動を取るなり出来た筈だ

しかし、相手は人間ではなくカマキリの怪人だった

油断しているところにいきなり怪人が現れれば、一瞬でも思考は停止してしまうだろう

戦場ではその一瞬が命取りになってしまう

しかし、なのはとフェイトには救いがあった

それは彼女達の傍に、目の前にいる怪人とずっと戦って来た戦士が

いた事だった

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATA!》

「はあっ!」

「ぐああああ!」

カマキリ・ヤミーの鎌は2人には届かなかった

下から飛んで来たエネルギー弾を受け、カマキリヤミーは重力に従い落ちていった

「大丈夫!? フェイトちゃん! なのはちゃん!」

その声に下を向くと、そこにいたのはオーズ・タカジャバだった

時間は少し遡り、なのはとフェイトの対決に決着がついた頃――

「・・・ッ!?おい、映司!ヤミーだ!」

アंकがいきなり現れたヤミーの気配に驚き、映司に伝える

「え!?!ど、何処!?!何で急に!?!」

映司は辺りを見回してヤミーを探す

「知るか!さつさと変身しろ!奴の狙いはジュエルシールドだ!」

そう言つてアंकは映司にメダルを投げ渡す

映司はメダルを受け取り、ドライバーに入れ、スキャナーを滑らせた

「変身!」

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATT!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

そして、映司の胸に紋章が刻まれ、力が宿った

映司はオーズ・タカジャバに変身した

オーズは『鷹の目』でヤミーの姿を探す

「・・・見つけた！」

森からフェイト達に向かって飛び出したのを見つけた

「はっ！」

オーズは『孔雀の翼』を広げ、空に舞い上がった

「映司！飛べたのかい！？」

空に舞い上がったオーズを見てアルフは言った

「オーズが飛べないなんて誰が言った？」

驚いているアルフを見てアंकは不敵に笑っていた

「へ、変身した！？あれは一体！？」

ユーノはオーズを呆然と見ていた

「ジュエルシードをよこせえ！！！！」

カマキリヤミーはフェイトとなのはに鎌を振り下ろそうとしていた

オーズは左腕に装着されたタジャスピナーをカマキリヤミーに向ける

「はあっ！！」

タジャスピナーからエネルギー弾が発射され、カマキリヤミーに直撃した

下から飛んできた攻撃を受け、カマキリヤミーは重力に従い落ちていった

「大丈夫？ フェイトちゃん！なのはちゃん！」

オーズはフェイトとなのはに声を掛けた

声を掛けられたフェイトとなのはは驚いていた

「え、映司！？と、飛べたの！？」

フェイトはアルフと同じく、オーズが空を飛んでいる事に驚いていた

「え、映司さんって、さっきいたあのお兄さん！？」

なのははオーズが存在とさっき襲ってきた怪人に驚いていた

「うん、もう大丈夫だよ。あのカマキリは俺に任せて」

そう言って、オーズはカマキヤミを追って降下して行った

「ぐううう！貴様ア！！よくもオ！！」

カマキリヤミは苦しみながら立ち上がり、着地したオーズに向かって来た

「うわっ！？」

オーズは受身を取って避け、蹴りを見舞い、カマキリヤミと距離を取る

「接近戦なら！」

オーズは『クジャクメダル』を『トラメダル』に変え、スキャンする

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOBA!TA・TO・BA!》

オーズはタカジャバからタトバコンボになりトラクローを構える

「ふっ！はっ！とりやつ！はあっ！！」

「ゲアアアアア！……！」

カマキリヤミーを何度も切り裂き、吹き飛ばした

「アंक！アルフ！映司は？」

地面に降りたフェイトとなのははオーズの戦いを見ているアंकと  
アंकに駆け寄った

「あそこだ」

アंकは視線を外さずにフェイトとなのはに顎で指して言う

「凄い・・・」

アルフはオーズとカマキリヤミーの戦いを驚愕しながら見つめていた

キン！キン！キイインッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

「あ、変わった。初めて戦った時のオーズだ」

アルフがタカジャバからタトバコンボになったオーズを見て言う

「メダルを変えたら姿と力が変わるんだね」

フェイトはメダルを変えていたオーズを見て言った

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！..」

「グアアアアア!!!!!!」

オーズはカマキリヤミーを何度も切り裂き、吹き飛ばした

「す、凄い……」

なのはは初めて見たオーズに驚いていた

「あのメダル。ロストログア並の力を秘めているかもしれない……」

「

ユーノはオーズが使っているコアメダルを見て冷静に力を分析していた

「……アंक、あの虫みたいなのは何なの？」

フェイトはオーズが戦っているカマキリヤミーを見て、アंकに尋ねる

「……あれはヤミー、オーズの敵だ。俺達はいっつらを追ってこ

の世界に来た」

「そうなんだ」

「映司はいつもあんな奴等と戦ってたのかい？ 凄いなえ」

フェイトは視線をオーズに戻し、アルフは感心して見ていた

アंकはヤミーがどういう物か、詳しくは教えなかった

そして、自分達がこの世界に来た理由も誤魔化した

ヤミーもオーズもコアメダルもセルメダルも、元は『人間の欲望』から生まれたのだ

しかし、それを知るにはフェイト達はまだ幼いと映司は考えたのだ

「まあ、余計な事を話さなければ問題ないか」

アंकは余計な思考を止めて、オーズを見た

「セイヤアア!!」

オーズはトラクロード突きを放ち、怯んだカマキリヤミーを横に大きく切り裂いた

「グアアアアア!!!!」

カマキリヤミーは後ろに転がり、切り裂かれた胸を押さえる

そこにはトラに引っ掛かれたような傷が出来ている

その傷からセルメダルが零れた

「お、おのれえ・・・もつと力が・・・力が必要だア!!!!」

カマキリヤミーは立ち上がりそう叫んだ

すると、カマキリヤミーの胸が輝いた

「あの光は！？」

オーズはその光に見覚えがあった

「なに！？」

アंकもその光を見て驚いていた

「あれって・・・フェイト！」

「うん。ジュエルシードの光だ！」

そう、カマキリヤミーから放たれた光は、先程見たジュエルシードの光だった

「な、何なんだ！？」

オーズは光を放ったカマキリヤミーを見つめていた

「映司！」

すると、さっきまで後ろで見ていたアंकが駆け寄って来た

「ジュエルシールドだ！やっぱり持ってやがった！」

アंकはカマキリヤミーを見て言う

「どうしたらいいんだ？攻撃していいのか？」

そう話している内に、カマキリヤミーが放っていたはずの光が徐々に収まっていった

「なんだ？」

アंकが見ると、カマキリヤミーの周りに大量の札束が山積みになっていた

「お金？」

「……あれが宿主の欲望か」

そう見てゐる内に、カマキリヤミミは札束を食べ始めた

「800年、俺達が封印されている間に人間の欲望はさらに強く、大きくなった、か。アंकの言う通りだ」

「一体、どんなヤミーが生まれてくるか、見物だな」

アंकは不適に笑いながらカマキリヤミーを見ていた

そして、大量の札束を食べ終えたカマキリヤミーの身体から這い出すように新たなヤミー

大型の昆虫型ヤミー「オトシブミヤミー」が生み出された

GAAGAAGA!!!  
 !!!!!

産声を上げたオトシブミヤミは更なる欲望を求めて動き出す

手始めに、ユーノとなのはが張っていた結界に喰らいついた

オトシブミヤミーが一部を喰らったせいで、結界は崩壊してしまった

「そんな！？結界を食べた！？」

ユーノはそれを見て驚愕した

「よくもまあ、今まで滅びなかったもんだな。こんな『モノ』抱えて・・・」

生み出されたヤミーの醜悪な外見にアंकは呟いた

「ま、そのおかげでお前等が存在出来てるんだ。感謝しろよ」

アंकの背中をポンと叩き、そう言ってオーズはオトシブミヤミーに向かって行った

「・・・フッ、そうだな」



オトシブミヤミーは巨大な爪を使いオーズを弾き飛ばした

「・・・げ！？・・・やばっ・・・」

オトシブミヤミーは更にオーズに攻撃を仕掛けようとするが、オーズは横に転がり避ける

そんなオーズを見て、アंकはすぐに『カマキリ・コア』を取り出した

「映司！つたく、何やってんだ！ほらよ！」

そう言つて『カマキリ・コア』をオーズに投げ渡した

「ちょっと油断しただけだ！」

オーズは起き上がってメダルを受け取り、『トラ・コア』を『カマキリ・コア』に変えてスキャンした

《TAKA!》《KAMAKIRI!》《BATA!》



フェイトとアルフ、なのはとユーノはその様子を見てオーズを応援していた

「はっ！はっ！・・・セイヤー！！」

オーズが更に力を入れて斬りつけると、オトシブミヤミーはズンツと重い音を立てて倒れた

「やった？」

フェイトがオトシブミヤミーが倒れたのを見て言う

しかし――

GUGAAAAA!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!

「！？・・・つく・・・うわああああ！！！」

倒れていたヤミーがいきなり起き上がり頭でオーズを跳ね飛ばす

「「映司っ！？」」

フェイトとアルフは吹き飛ばされたオーズに向かって走り出した

それになのはとユーノも続く

「くっそ！死んだ振りは卑怯だろ！！」

オーズは身体を起こしながらオトシブミヤミーを見る

「油断したお前が悪いんだよ！さっさと立て！！」

アंकはオーズの頭を叩いて立ち上がらせる

「でも、ちょっと頑丈すぎないか？アイツ」

オーズはさっき斬りつけた傷が既に治っているのを見て言う

「ジュエルシードのせいか、人間の欲望が強くなったのか。どっちなんだろうなあ」

アंकはオトシブミヤミーを見て嘆くように言った

「どっちでもいいよ！今はアイツを何とかしないと！」

そう言つて、オーズは立ち上がる

「・・・1つ手がある。アイツ等の力を使う」

「えっ？」

アंकは駆け寄つてきている4人を見て言った

「ジュエルシードを俺達が引き剥がして、アイツ等が封印する。その後、お前がトドメを刺す」

アंकは考えた作戦をオーズに話す

「・・・それしかないなら、やるしかないか」

オーズは決断した様にオトシブミヤミーを見た

「映司！アंक！アイツ、温泉街の方に向かって行くよ！」

2人が話している間に、駆け寄って来ていたアルフがオトシブミヤミーが温泉街の方に行くのを見て言う

結果が無くなってしまった今、オトシブミヤミーが暴れば、大変な事になってしまう

「うん、わかってる。被害が出る前に片付けるから、みんなの力を貸してくれないかな？」

オーズはフェイト、なのは、アルフ、ユーノを見て言う

「え？ど、どういう事？」

「さっきの光、あれはジュエルシードの光だ。お前等が封印するんだよ」

アंकは首を傾げている3人に言う

「アイツからジュエルシードを剥ぎ取るから、さっきみたいに全力で魔法を撃ってほしいんだ。出来る？」

「うん！出来るよ、映司」

「フェイトのサポートは任せときな！」

「私もお手伝いします！」

「僕も、出来るだけの事はします」

オーズの問いに、4人は強く返事をした

「よし！じゃあ、みんなでやっつけよう！」

キーン！キーン！キイインッ！

《TAKA！》《KUJYAKU！》《BATT A！》

オーズは再びタカジャバになり、アंकと共に空に舞い上がった

それにフェイトとアルフ、肩にユーノを乗せたなのはも続く

「いくよ！フェイトちゃん！なのはちゃん！」

「うん！」「はい！」

オーズが言うと、元気な返事が返って来た

「行くぞ、アंक」

「メダルが山ほど稼げるな」

オーズはタカヘッドでジュエルシードの位置を把握する

「そこだ！」

そして、オーズはタジャスピナーをスキャンした

《GIN！GIN！GIN！GIN！GIN！GIN！GIN！GIN！G

IN!GIN!GIN!GIGASCAN!!》

タジャスピナーの中のセルメダルがギガスキャンされ、セルメダルを模したエネルギーの渦が発生する

「はあああ・・・セイヤアアアア!!」

「おらッ!」

オーズが放ったエネルギー弾にアंकが炎を乗せてオトシブミヤミに叩き込み、大きな傷を生んだ

すると、その傷から1つのジュエルシードが飛び出した

「デイベイインバスターッ!!」

「Divine buster」

「サンダースマッシュァッ!!」

「Thunder smasher」



それを見たオーズはまたメダルを変え、スキャナーを滑らせる

キーン！キーン！キイインッ！

《TAKA！》《TORA！》《BATT A！》

《TA・TO・BA！TATOBA！TA・TO・BA！》

「決める！映司！！」

タトバコンボに戻ったオーズにアंकが言う

「わかった！」

キーン！キーン！キイインッ！

《Scanning Charge！》

「はあああ・・・」

オーズはもう一度メダルをスキャンし、空中で一回転する

すると、オトシブミヤミーに向かって落下するオーズの先に赤、黄、緑の3つのリングが発生した

「セイヤアアアア!!!!!!」

赤を潜ると赤い翼が発生し、黄を潜ると黄の斬撃が加わり、緑を潜ると蹴りの威力が倍増する

タトバコンボの必殺技『タトバキック』がオトシブミヤミーに炸裂した

GUGYAAAAA!!!!!!  
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

後にはオトシブミヤミーの断末魔と爆発、オーズの3色のリングが輝いていた

「本当にメダルで出来てたんだね」

フェイトはオトシブミヤミィが撒き散らしたメダルを拾いながら言う

「ヤミィもグリードも、身体はセルメダルで構成されてる。人間で言う水とタンパク質だ」

アंकは凄い勢いでメダルを身体の中に取り込みながら言った

「グリードは力を使うとセルメダルが減るから、こうして補充しないとダメなんだよ」

映司は拾ったセルメダルをアंकに投げ付けながら言う

「今回は100単位で稼げた。上出来だ」

アंकはメダルを全て取り込み終え言う

「あ、あの、これ・・・」

「え？」

なのはがおずおずとさっき封印したジュエルシードを映司に差し出した

「・・・いいの？」

「さっきのヤミーって言うのを倒したのは映司さんですから」

「そっか、ありがとう。なのはちゃん」

そう言っつて映司は笑い、なのはの頭を撫でて言った

「あ、あの・・・ちょっと、恥ずかしいです・・・」

なのはは顔を赤くして俯き言った

「・・・」

そんなピンクな空気に包まれている映司となのはを見てフェイトか

ら禍々しいオーラが飛び出していた

「・・・ね、ねえ、アंक？何だい？あの禍々しいオーラは？フェイトがあんなオーラを出した事なんて一度も無いよ？」

「・・・人間が持つ厄介な物の1つだな」

そんなフェイトを見てアंकとアルフは少し怖くなったのだった

「え、映司！もういいでしょ！」

「え？なに？フェイトちゃん」

「そ、その子も恥ずかしがってるし！もういいよ！」

フェイトは映司に向かって必死に訴え掛けた

「・・・あ、そうだね。ごめんね？なのはちゃん」

映司はフェイトの抗議を聞いて、なのはを撫でるのを止めた

「あ……」

離れた瞬間、なのはもフェイトと同じ様に残念そうな声を漏らした

「なのはちゃん？」

「え？あ、な、何でもないです！」

なのはは手と首を振って何か焦った様に言った

「……」

それを見たフェイトは黒いオーラを更に大きくした

「じゃあ、そろそろ帰ろうか。もう夜も遅いし」

映司は真っ暗な辺りの森を見て言う

「そうだね。早く帰ろうか」

そう言つて、フェイトは映司の袖を掴んで強引に引つ張り歩き出した

「ちょ、ちょっと？フェイトちゃん？」

映司は物凄い力でフェイトに引つ張られ、よたよた歩き始める

「・・・あつ！ちょっと待って！」

「・・・？」

「ん？」

なのはに大きな声で呼び止められ、映司とフェイトは振り返る

「名前！あなたの名前を教えて？」

「・・・フェイト、フェイト・テストロッサ」

「私はなのは！高町なのはだよ！私立聖祥大付属小学校3年生！」

なのはは何故か自分が通う学校までフェイトに教えた

「・・・覚えておくよ。帰ろう、映司」

そう言っつてフェイトはまた映司を引っ張っつて歩き出す

「あ、うん。じゃあね、なのはちゃん！早く帰らないとダメだよ！」

「はい！さようなら！」

そう言っつて映司はフェイトに連れられて旅館に帰っつて行つた

「・・・俺達も帰るか」

「そうだね、あたしももう眠くなつてきたよ」

アंकはアルフに向かって言い、アルフはそれに頷く

「お前等もさつさと旅館に帰れ」

「あ、はい。帰ろっか、ユーノ君」

「うん。お疲れ様、なのは」

アंकに言われ、なのは達も歩き出した

旅館に戻り、部屋に辿り着くと、フェイトとアルフはすぐに眠ってしまった

ジュエルシードの封印、なのはとの戦闘、ヤミーとの戦闘で疲労が溜まっていた様だ

映司とアंकはソファーに座ってアイスを食べていた

「なあ、アंक。あのヤミーって、コノハが作ってたタイプのヤミーだよな？」

「ああ。宿主の欲望の対象を喰うか、ヤミーの行動で欲望を満たして、成長体・完全体になるタイプだ。今日戦ったのは、宿主の欲望の対象を喰うタイプだな」

アंकはアイスの最後の一口を食べて言う

「コノハが作った・・・とは考えられないよな。一体誰が・・・」

映司は顎に手を当てて考える

「この世界にあの馬鹿がいれば間違えて作ったと考えられるが、いないからな。一体何処の誰が作ったんだかなあ」

アंकは窓の外の夜の闇に包まれた山を見る

「・・・もし、他のタイプのヤミーも相手が作れるなら、『コンボ』も使わないといけなくなるのかな」

「ああ、そうだな。しかも、ジュエルシードも使ってくる。シャルのタイプのヤミーなんか考えたくもないな」

アंकは勘弁してくれと言わんばかりに言う

それもそうだろう、シャルの作る水棲系ヤミ―

ヤミ―の卵が多数寄せ集まった巣を宿主の拠点に形成し、巣はヤミ―が孵化するまで認知できない

今回ヤミ―の気配を見つけられなかったという事は、その巣も見つけられないという事だ

しかも、ヤミ―はジュエルシードの力で、都合の良い様に欲望を叶えることが出来る

そうすると、ヤミ―を見つけるのは極限に難しい事になるのだ

「シャルのヤミ―って、大量に湧いて来る奴だよな。あれに対抗出来るのはやっぱり『コンボ』か」

「そうならないように祈ってる。俺はもう寝る」

そう言ってアंकは立ち上がり、敷いていた布団に寝転がった

「俺も寝よ。おやすみ、アंक」

映司とアंकは眠りにつくのだった

〽海鳴市〽

映司が海鳴温泉でフェイトとジュエルシードの位置を特定していた頃――

海鳴市では、黒いローブを着た男は次のヤミーの宿主を探していた

「ふむ、良い欲望を持った人間はいないものか・・・」

男は人が行き交う交差点を見つめながら良い欲望を探していた

「・・・ほづ、いるではないか」

男は買い物袋を大量に持った女性を見て呟いた

男は女性を追い、彼女が住む高級マンションまでやって来た

そして、周りに誰もいないマンションの廊下に辿り着いた

女性はエレベーターの扉を鏡の代わりにして、自分が着た服を見ていた

その彼女の後ろに、男が現れた

「それは、全てお前が買ったのか？」

「・・・そうだけど、あなた、誰？」

「たくさん買うのが好きなのか？」

女性の問いには答えず、男はまた問う

「・・・たくさん？こればっちで？馬鹿言わないでよ」

女性はもう関らないでおこうと考えそう言って、前を向いた

その答えを聞いた男はニヤリと笑い、セルメダルを取り出した

「その欲望、解放しろ」

男はセルメダルを女性の後頭部に現れたスロットに投げ入れた

女性はその瞬間、気を失い、倒れた

女性が倒れた数秒後、男の手に水色の玉が現れた

「フッフッフ。お前の欲望、ありがたく使わせてもらっぞ」

そう言って、男はその水色の玉・ヤミーの卵にジュエルシードを捻じ込んだ

すると、ヤミーの卵は淡く輝き、消えた

「さあ、『コンボ』の力を見せてくれ。オーズ」

そう言って、男は姿を消した

#### 第4話『欲望と願いと進化』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## PV10000アクセス突破記念（前書き）

今回はタジャスピナーの設定とかそんな感じです



「おらッ！」

オーズが放ったエネルギー弾にアंकが炎を乗せてオトシブミヤミ  
ーに叩き込み、大きな傷を生んだ

映司「……」

アंक「ん？どうした？映司」

映司「ああ、アंक。あのさ、このシーンなんだけどさ」

アंक「あ？……オトシブミヤミーにお前がギガスキャンを叩き  
込んだ場面だな」

映司「うん」

アंक「それがどうかしたか？」

映司「・・・タジャスピナーって入るメダル、7枚じゃなかったっけ？10枚だっけ？それに、7枚入っても音声は6枚しかスキヤン音でないよな？何で10枚全部音声出てるの？」

アंक「・・・ああ、その事か」

映司「作者間違ったのかなあ・・・」

アंक「それは、この小説のオリジナル設定だ。10枚にしとくと何かと都合がいいんだよ」

映司「都合？10だと何か良い事あるのか？」

アंक「10っていう数字を聞いて、何か思い出さないか？」

映司「10？・・・あっ！デイ——」

アंक「それ以上はネタバレだ」

アंक「それに、ドライバーと合わせれば13になるな」

映司「13?・・・13・・・13・・・」

アंक「ヒントは、平成だ」

映司「え?平成?・・・なんだろう・・・?」

アंक「頭の良い読者にはわかっただろうよ」

映司「なあ、アंक」

アंक「あ?何だ?」

映司「これってさ、PV10000突破記念なんだよな?」

アंक「ああ、らしいな」

映司「・・・まだオリジナル設定しか説明してないぞ？」

アंक「・・・じゃあ、今から何かするか？」

映司「そうだなあ・・・ゲスト呼ぼうか！」

アंक「お前・・・当てはあるのか？」

映司「うん。3人いるよ」

アंक「3人？」

アंक「・・・なのはとフェイト、後はまだ登場してないが、はやてか？」

映司「おーい、入って来ていいよ」

アंक「もうスタンバイさせてたのかよ・・・」

ガチャ

アंक「・・・」

映司「さっ！自己紹介して？」

シュテル「どうも、マテリアルS、星光の殲滅者ことシュテル・ザ・デストラクターです」

レヴィ「僕はマテリアルL！雷刃の襲撃者ことレヴィ・ザ・スラッシャーだよ！」

ディアーチエ「我はマテリアルD、闇統べる王ことロード・ディアーチエだ」

アंक「・・・おい、映司」

映司「なに？アंक」

アंक「どういう事だ？」

映司「何が？」

アंक「何でこの3人がいるのかって聞いてんだよ！！」

映司「ちよっ！？痛い！痛いって！アंक！」

シュテル「暴力はいけませんよ。アंक」

アंक「うるさい！お前は黙ってる！！」

レヴィ「何怒ってるんだよアंक」

ディアーチェ「王の前で無礼な奴だ！静かにせんか！塵芥！」

アंक「お前等も黙ってる！！おい！スタッフ！！どうなってんだよ！！おい！！」

映司「ああ！！アंक！落ち着けて！！」

アंकが落ち着くまでしばらくお待ち下さい

アंक「はぁ・・・はぁ・・・」

映司「何か・・・疲れた・・・」

シュテル「大丈夫ですか？映司」

レヴィ「アंकも何かわかんないけど、大丈夫？」

ディアーチェ「まったく、騒がしい奴等だ」

映司「さ、さて。じゃあ、アंकが知りたがってるシュテル達がいる理由を教えようか」

シュテル「しかし、それを話したらネタバレになってしまうのでは？」

映司「大丈夫だよ。一言で説明出来るから」

アंक「一言？」

レヴィ「じゃあ！一言！どうぞ！」

映司「友情の勝利！」

アंक「・・・」

シュテル「まあ、そうですね」

レヴィ「友情！努力！勝利！そう、僕、最強！」

シュテル「関係ありませんよ、レヴィ」

ディアーチェ「ふん、映司にしては的を射ているではないか。褒めて使わそう」

アंक「・・・ツツコム気にもならない」

映司「じゃあ、ここからは何かワイワイ話すんだけど、何か題材ある人ー」

アंक「どんだけ、適当なんだ・・・」

シュテル「まあ、10000アクセス突破なんて言っていますが、実際は10199アクセスですからね」

ディアーチエ「突破にも程があるな」

レヴィ「10000と10119だから・・・20119だ!」

シュテル「何故足したんですか?レヴィ」

レヴィ「あれ?間違ってる?」

アंक「間違いどころの話じゃない。何で足すんだ、引けよ」

レヴィ「10000・・・10119・・・はっ！」

映司「じゃあ、答えをどうぞ！」

レヴィ「救急車！」

シュテル「成長しましたね、レヴィ」

ディアーチエ「我は信じていたぞ、レヴィ」

レヴィ「えっへん！」

アंक「・・・レヴィが何で馬鹿なのかかった。コイツ等が甘やかしてるからだ」

映司「ま、まあ、引き算はちゃんと出来てるからいいんじゃないか？」

アंक「・・・はあ」

映司「じゃ、じゃあ！この小説について何か疑問に思ってる事とかある人ー！」

シュテル「はい」

映司「はい、シュテル！」

シュテル「未来にいるラトさん達はいつ出てくるんですか？」

映司「えーっと・・・いつからだっけ？」

アंक「A・S編からだ」

レヴィ「僕等が出る1個前のお話だね」

ディアーチェ「我のオリジナルが出る物語りだな」

シュテル「何故そんなに遅いのですか？」

映司「俺達が一旦未来に帰らないといけないでしょ？そうすると、

無印編には出せないんだよ」

アंक「まあ、留守番を引き受けたんだ。自業自得だ」

映司「ラト達が聞いたら怒るだろうなあ」

レヴィ「ねえ！ねえ！僕も質問！」

映司「何？レヴィ」

レヴィ「あの黒いローブの男って何者なの？」

シュテル「レヴィ、それは聞いてはいけませんよ」

レヴィ「え？そうなの？」

映司「それは、これからのお話でわかっていく事だから、ね？」

レヴィ「うん！わかった！」

ディアーチエ「では、最後は我だな」

映司「何？ディアーチエ」

ディアーチエ「零次とは何者だ？」

映司「・・・」

シュテル「・・・」

レヴィ「・・・」

アंक「・・・KY王が（ボソツ）」

ディアーチエ「聞こえたぞ！アंकー！！」

シュテル「ディアーチエ、それは私達も気になってはいましたが、聞いてはいけませんよ」

レヴィ「しゃくしゃさん、映司と零次の名前何回も間違ってたもんね」

シュテル「噛みましたね」

レヴィ「噛んでないよ!」

シュテル「噛みましたよ」

映司「2回も指摘が来てたしね。感想って見るだけでビクビクしてたし・・・」

アंक「最初の感想で滅茶苦茶怒られたからなあ。ラト達を作った意味がわからないってな」

映司「ハーレムでも作る気なのか?とも言われたな」

シュテル「ボロクソ言われたんですね」

映司「うん、そうなんだよ。・・・カザリ達もちゃんと出す予定なの・・・」

アंक「・・・」

シュテル「・・・」

レヴィ「・・・」

ディアーチエ「・・・」

映司「・・・あ」

アंक「・・・馬鹿だろ、お前」

シュテル「馬鹿ですね」

レヴィ「アハハハ！お馬鹿だなあ！映司！」

ディアーチエ「我等に言っておきながら、お前がネタバレしてどうする！塵芥が！！」

映司「・・・ごめんなさい」

映司「じゃあ、最後はみんなが好きな仮面ライダーでも発表してもらおうかな」

シュテル「はい。ちゃんと考えてきました。それにナノ八達からもちゃんと聞いてきましたよ」

映司「よし！偉いぞ！シュテル」

シュテル「そ、そんな事はありません。頭を撫でないで下さい／＼／／」

レヴィ「あゝ、シュテルんが照れてる」

シュテル「なっ！？て、照れてなんていません！！」

ディアーチェ「照れるな照れるな。お前は頭を撫でられるのが好きだからなあ」

シュテル「でい、ディアーチェもレヴィもからかわないで下さい！」

アंक「おい、さっさと始めるぞ」

シュテル「は、はい！」

レヴィ・ディアーチェ「チッ」

アंक「映司、お前が好きな仮面ライダーは何だ？」

映司「そうだなあ、俺は仮面ライダークウガかな？誰かの笑顔の為に戦えるのって凄いなと思うんだ」

アंक「俺は仮面ライダー王蛇だな。自分の欲望に素直な奴は好きだ」

映司「そんな事言って、龍騎の映画食い入るように見てたのは誰だよ」

アंक「何か言ったか？」

映司「何も？シュテルは？どんな仮面ライダーが好き？」

シュテル「私は仮面ライダーディケイドですね。世界の破壊者から世界の守護者になったのを見て感動しました。私もあなりたいものです。ナノハは仮面ライダー555だそうです。『私も誰かの夢を護りたい』だそうです」

映司「ありがとう、シュテル。次はレヴィだよ」

レヴィ「僕が好きなのは仮面ライダー電王！イマジン達の決め台詞がすごくカッコイイんだ！」

映司「レヴィは何が一番好きなの？」

レヴィ「俺！参上！！」

映司「モモタロスが好きなんだ。フェイトちゃんにもちゃんと聞いて来てくれた？」

レヴィ「うん！えーっと・・・仮面ライダーアギトだって！『誰かの居場所を護れるようにになりたい』んだって！」

映司「そっか、ありがとう、レヴィ。最後はディアーチエだ」

ディアーチエ「我が好きなのは仮面ライダーキバだ。運命の鎖を解き放ち、運命を変える王に我もなりたい！はやてが好きなのは仮面ライダーカブトらしい。『例え、この世の全てが敵になっても、家族を護れるようにになりたい』とか言っていたな」

映司「みんな好きな仮面ライダーは違うなあ。でも、理由がしっかりとしてるね」

アंक「9歳とは思えない思考してるからな。アイツ等、年齢偽ってるんじゃないか？」

映司「俺もたまに思うよ。ホントに9歳かなって」

シュテル「女の子は背伸びをするものなんですよ」

映司「そうなの？」

シュテル「はい。ね？レヴィ、ディアーチェ」

レヴィ「うん！僕も早く大人になりたい！」

ディアーチェ「私も早く大人になりたいものだ」

映司「・・・でも、大人になったら遊べなくなるよ？」

レヴィ「やっぱり子供が1番だね！」

ディアーチェ「何をやっても保護者のせいに出来るからな！」

シュテル「レヴィ・・・ディアーチェ・・・」

アंक「同意を求める相手を間違えたな、シュテル」

シュテル「・・・はい」

映司「・・・そ、それじゃあ、そろそろ終わるつか」

アंक「そうだな。もう十分だろ」

レヴィ「次はいつやるの？」

映司「そうだなあ・・・次は25000アクセスくらいでやるつか。それか無印編が終わって、A・S編が始まる前くらいかな。予告も含めて」

シュテル「まだまだ先の話ですね」

レヴィ「それまで暇だね」

ディアーチエ「読者次第か、作者次第だな。気長に待とうしよう」

映司「それでは、みなさん！」

「「「また、お会いしましょうー！」」」

アंक「ああ・・・疲れた・・・」

映司「おい、アंक！ちゃんと挨拶しろよ！」

アंक「うるさい！もう疲れたんだよ！」

レヴィ「みんなー！またねー！」

## PV10000アクセス突破記念（後書き）

・・・感想とかがくれば、怖いけど嬉しいです

第5話『喧嘩と心配とヤミの卵』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第5話『喧嘩と心配とヤミーの卵』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回までのハイライト――

何者かの手により、800年の眠りからオーズとグリードが目覚めた

オーズに変身のする火野映司はグリードのアンクと共にクイント・ナカジマを救う

その後、クイントを抹殺しようと奇襲を掛けて来たロボットと戦い、他のグリード4人と合流した

そして、通りすがりの仮面ライダー、門矢士に導かれ、ジュエルシードが散らばったとある世界にやって来た

その世界で映司はジュエルシードを探すフェイト・テストロッサとその使い魔・アルフに出逢った

その後、ジュエルシードを集めるもう一人の少女・高町なのはとユ

ーノ・スクライアとも出逢った

そして、この世界に現れたヤミーと映司達は遭遇する

そのヤミーはジュエルシードで強化されていた

オーズはアंकの作戦とフェイト達の助けにより、これを撃破した

## 第5話『喧嘩と心配とヤミーの卵』

くフェイトの自宅く

海鳴温泉から帰って来てから既に2日が経っていた

今日も今日とて、映司は朝食の用意をしていた

「・・・またドックフード缶、アルフちゃんだな」

映司は冷蔵庫を開けて食材を取り出そうとしたところで、アルフが内緒で買ったドックフード缶を発見した

「内緒で買うならもつと見つからない所に隠せばいいのに・・・」

そう考え、映司は取り合えずアンクに見つからない様に冷蔵庫の奥にしまった

これをアンクが見つけると、またアルフと喧嘩を始めるからだ

映司はドッグフード缶を隠した後、手を洗って調理を始めた

「おい、映司。アイスが無いぞ」

いつの間にかやって来たアンクが冷蔵庫の中にアイスが無いと映司に訴える

「自分で買って来いよ。それに最近食べ過ぎだぞ、アンク」

「俺達の名前はグリード、欲望だ。欲しがらなくてどうする？」

「ドヤ顔で言っても無い物は無いぞ。欲しいなら自分で買って来い」

映司はアंकにそう言っ て調理を続ける

「・・・チツ、飯が出来るまでには帰る」

そう言っ て、アंकは1000円札を持って出て行っ た

「・・・アイツも成長したなあ」

そんなアंकを見て映司は嬉しそうな顔をしていた

その日の朝食の雰囲気はいつもと違っ たものだった

はたから見れば、いつもと変わらない光景かもしれない

アルフが物凄い勢いで朝食を食べ、アंकがメンド臭そうに食べ、フエイトが黙って食べている

しかし、この2日間、映司達は温泉に行く前とは違うところがあることに気付いていた

「・・・はあ」

そう、フエイトに元気が無いのだ

ちゃんとご飯は食べているが、遅く、溜息ばかり付いている

アंकとアルフは既に食べ終え、リビングでゴロゴロしている

「・・・ごちそうさま」

食べ終わるとフエイトは食器を映司に渡し、溜息をつきながらリビングのソファーにもたれた

「・・・」

「「・・・」」

「・・・はあ」

「「・・・」」

アंकとアルフは無言で立ち上がり、食器を片付けている映司の元に向かった

「おい、映司。あれを何とかしろ！見ててイライラするんだよ！」

「何とかしておくれよ、映司！あたしももう限界だよ！」

小さな声で映司に訴えるアंकとアルフ

「・・・まあ、元気が無いのはわかってるけど・・・。じゃあ、聞いてみるよ」

そう言って、映司はキッチンに食器を持って行き、洗い始める

それを見たフェイトもキッチンに向かい、布巾を手にした

映司が洗い終えた食器を拭いて仕舞うのがフェイトの役割になったのだ

アंकとアルフは自称『食べる係り』らしい

「フェイトちゃん、どうしたの？温泉から帰って来てからずっと元氣無いけど、アंकもアルフも心配してるよ？」

そう言うと、向こうから「俺は心配してない！イライラしてんだよ！」という声が聞こえて来たが映司は軽くスルーしてフェイトの返事を待つ

「そ、そうかな？」

「そうだよ。もしかして、なのはちゃんの事が気になってるの？」

フェイトは誤魔化そうとしたが、嘘に向かない人間なのですぐにバレた

「う、うん」

フェイトは食器を拭く手を止めて、正直に頷いた

「そっか」

映司は食器を洗いながら言う

「・・・何であの子は私にあんな事を言ってくれたんだろう？初めて会った時、酷い事したのに・・・」

フェイトは俯きながら映司に訊ねる

「うん・・・。フェイトちゃんと友達になりたいんじゃないかな？」

「えっ!？」

映司の答えに、フェイトは凄く驚いた

「そんなに驚く事かな？自分と同じ様に魔導師で、ジュエルシードを集めてるんだよ？相手の事をもっと知って、友達になりたいと思うのって普通じゃないかな？」

「そ、そうなのかな・・・わからないよ・・・」

「・・・まあ、後悔しないようにしないとね。後悔した時には遅いから」

映司はそう言ってフェイトにリビングに行ってて良いよと伝えてリビングに行かせる

フェイトがリビングに行くと・・・

「・・・ほら」

「え？何？アंक」

アंकがなんと、フェイトにアイスを差し出した！

「食つとけ、何かあった時動けなかったら話にならないからなあ」

そう言っていつもの赤い布を敷いたソファに座る

「珍しいね、アंकが人にアイスを上げるなんて」

アルフがニヤニヤしながらアंकに言う

「うるさい。犬っころは冷蔵庫に隠したドックフード缶でも食ってる」

「な、何でそのことを！？それとあたしは狼だ！！」

内緒で買ったはずだったが、冷蔵庫に堂々と置いていけばバレるであろっ

どうやら、映司が見つける前にアंकが見つけてしまった様だ

「・・・ふふっ、ありがとう。アंक、アルフ」

フェイトは喧嘩を始めた心配してくれていた2人を見て、アイスをかじった

「ねえねえ、アंक。オーズのメダルを見せてよ」

アルフがいきなりオーズのメダルを見せてくれと言い出した

「あ？」

「だって、いろんな種類あるでしょ？見せてよ」

アルフはアंकを揺さぶりながら言う

「・・・はあ、わかった。わかったから揺さぶるな」

アंकはアルフにデコピンをして離れさせ、グリード化させた腕からメダルを出す

「わあゝ、たくさんあるんだね」

アंकが出したメダルを見て、フェイトも興味を持ったのか見に来た

「あつ、タカにトラにバッタだ。いつも映司が使ってる奴だよね」

フェイトがいつも映司が使っている3枚のメダルを見つけて並べる

「・・・あれ？似た色のメダルが3枚あるよ？」

アルフがそう言って、3色ある青と灰のメダルを並べる

「あ、ホントだ。この3枚もそれぞれ入れたら、5組になるね」

さつき並べたタトバコンボのメダルをそれぞれの色の組に並べると

タカ・クジャク・コンドル

クワガタ・カマキリ・バッタ

ライオン・トラ・チーター

サイ・ゴリラ・ゾウ

シャチ・ウナギ・タコ

同じ色のメダルが3枚の5組になった

「グリードのメダルはそれぞれ3種類、3枚だ」

そう言っア Ank は緑色のメダルを3枚持つ

「うん。カマキリとバッタにクワガタだね」

「それがどうかしたのかい？」

アルフが首を傾げて、ア Ank に問う

「オーズが変身に使うのも3種類だよ。2人共」

首を傾げているフェイトとアルフに映司は教える

「・・・そっか！今までバラバラだったけど、同じ種類3枚で変身

出来るんだ！」

メダルを見たフェイトが閃いたように言う

「そういう事だ。『メダルのコンボ』、その意味。メダルの本当の力が見られるかもしれないぞ」

アंकは不適に笑って2人に言った

「本当の力？」

「まあ、とんでもない事になるのは確かだ。これからの戦いの中で、使う事になるかもしれないなあ」

アंकはメダルを仕舞いながら呟く

「と、とんでもない事って……。大丈夫なのかい？映司」

アルフは映司を心配するように言う

「うーん。まあ、凄く疲れるかな？」

映司は笑ってそう答えた

「・・・」

その笑顔を見て、フエイトは言い知れぬ不安に駆られたのだった

時刻は既に3時、おやつの間である

映司はアंकと共に夕食の買い物に来ていた

「・・・映司、また居場所はわからないがヤミーだ」

「えっ？また居場所がわからないのか？」

「ああ、このジメジメした気配は・・・シャルのヤミーだな」

「シャルのヤミー・・・、大量発生の危険ありか・・・」

映司は大根を選びながら苦笑いする

「笑ってる場合か、コンボは800年振りだ。お前、ただじゃ済まないかもしれないぞ」

「まあ、三つ子の魂百までって言うし、過去に出来たんだから大丈夫だって」

そう言って、アंकが持つカゴにどんどん食材を入れていく

「・・・お前が馬鹿でよかった」

そんな映司を見て、アंकは小さく呟いた

「もう買い忘れないよなあ、アंक」

「知るか。俺はアイスがあればそれでいい」

映司は袋の中を確認しながらアンクに言うが、アンクは知った事ではないといった様子だ

「おい、アンク……あれ？あれって……なのはちゃん？」

「何やってんだ？アイツ」

そんな感じで家に帰っていると、公園のベンチに1人、座っているなのはを発見した

「……アンク、先に帰っててくれ。はい、アイスが入った袋」

「ああ、任せろ」

アイスと聞いてアンクは快く袋を受け取り、帰って行った

「さて……。何を黄昏てるのかな？」

映司は公園に入って、なのはに近付いて行った

なのはは公園で何故こんな事になってしまったのかを考えていた

何故友達のアリサ・バニングスと月村すずかと喧嘩してしまったのか・・・

そんな事、考えなくてもわかる事である

フェイトの事とジュエルシードの事を考えていたのだ

結果、何を言われても上の空、アリサ達が怒るのも無理は無い

「・・・」

なのはは膝の上に置いた手をぎゅっと握り締める

「なのはちゃん、どうしたの？」

「えっ？」

声を掛けられ、顔を上げるとそこにいたのは映司だった

「・・・映司さん・・・お久しぶりです・・・」

「久しぶり、元気だった？」

「・・・」

「・・・って聞くのは無理みたいだね。どうしたの？」

映司はなのはの隣に座って訊ねる

「ちょっと・・・友達と喧嘩しちゃって・・・」

「そっなんだ。・・・どうして喧嘩しちゃったの？」

「・・・」

映司が訊ねると、なのはは黙ってしまった

「・・・もしかして、フェイトちゃんとジュエルシードの事？」

「えっ！？な、何でわかるんですか！？」

なのはは映司にピタリと言い当てられた為、凄く驚いた

「あはは、なのはちゃんとフェイトちゃんって似てるんだよね。良い所も、悪い所も」

映司は笑ってなのはに言う

「わ、悪い所って？」

「1人で何でも背負い込む所とか誰かに甘えない所とかかな」

映司は夕陽を見て、笑いながら言う

「わ、私、そんな・・・」

「アंकの言い方で言うと・・・お前、何様のつもりだ？」

「ッ!？」

映司の変貌振りになのはは肩を震わせた

「お前がどれだけ凄い魔導師か知らないがなあ、人間1人が出来る事なんてたかがしれてんだよ」

「・・・」

なのはは映司の物言いにショックを受け、全身の力が抜ける感じがした

「で、結局1人で抱えきれなくなって他人に迷惑掛けてたらザマアないなあ」

何か、態度までアंक化してきている映司

どれだけ長い間に一緒にいたか、わかる瞬間である

「で、でも・・・」

「でももくそもあるか。お前の事情なんて、何も知らない人間には関係ないんだよ」

「あ・・・」

「そうだろう？何も言わずに察して欲しいなんて、これ以上の我が俣が何処にある？」

その『我が俣』という単語に、なのははまた肩を震わせた

「勝手に悩むなら勝手に悩め。だがな、それを周りに勘付かれるな。その悩んでますオーラを出すな。自分が話していないんだからなあ、自業自得だ」

「・・・そ、そうですね」

映司の言葉はなのはの心にグサリと刺さってえぐって来ていた

「・・・まっ、アंकならこう言うかな。でも、俺もそう思うよ。何も話さないで分かり合える事なんて、まず無いから。その様子だと、なのはちゃん、両親にも話してないんじゃない？」

「・・・」

図星だった、なのはは両親や兄姉にジュエルシードの事は話していない

それは、心配を掛けたくない、迷惑を掛けたくないと思ったからだった

「知ってる？親って、何も話してくれない方が心配するんだよ？」

映司は立ち上がって前に歩いて行く

「それに、なのはちゃんには頼れって怒ってくれる友達がいるんですよ？だったら、その子達に頼って上げれば良い。ユーノ君だっているんだから、頼れば良い。なのはちゃんはまだ小学3年生なんですよ？お母さんやお父さんにいっぱい甘えたっていいんだよ？」

そう言う映司が、一瞬だけ自分の兄と同じくらいの身長に見えた

なのは目を擦ってもう一度見ると、映司は元に戻っていた

「・・・映司さんって、お兄ちゃんみたいなの」

「そうかな？あ、ごめんね。アंकがどういふかなって考えながら言ったから、結構酷い事言ったよね」

「ううん。気にしないで下さい。全部当たってますから」

映司の言葉を聞いて、なのは首を横に振って言う

「・・・私、お母さん達に話してみます。信じてもらえるかわからないけど、もう心配掛けたくないから。それに、アリサちゃんやすずかちゃんとも仲直りしたいですから！」

なのははさっきまでとは打って変わって笑顔でそう言った

「そっか、頑張ってるね。なのはちゃん」

「はい！本当にありがとうございました！」

そう言つて、なのはは笑顔で去つて行つた

「・・・あとは、フエイトちゃんだな」

映司はそう呟いて、帰路につくのだつた

夕日が窓に差し込み、眩く感じる頃

映司が家に帰つて来て少し時間が経っていた

獣耳と尻尾をピクピクと動かしながらアルフは小腹空いた為、おやつを食べようとしていた

「アルフちゃん、それ本当に食べるの？」

映司はアルフが食しようとしているソレを見てから確認するかのよ  
うに訊ねる

「ん？映司、アンタも食べたいのかい？」

そう言いながら、ドッグフードをチョコスナックのように差し出し  
てくる

「え、えーっと・・・」

映司は差し出されたドッグフードを見る

チョコスナックのように見えなくはないが、ドッグフードはあくま  
で犬の主食だ

「コレ、結構イケるからさ。映司も食べてみなって！」

そう言って、アルフは映司にドッグフードをずいずいと薦める

「やめとけ、映司。腹壊すぞ」

アंकがドックフードを受け取ろうとした映司の頭を張り倒して止めさせる

「そんなモン食うのは犬っころだけだ。人間が食って良いもんじゃない」

「あたしは狼だ！何回言えばわかるんだい！！」

「何回この話すればお前は自分が犬だと自覚するんだ？」

また、アंकとアルフが喧嘩を始めた

「・・・それにしても、出てこないな。フェイトちゃん」

映司は数十分前から開かずの扉と化しているフェイトの部屋の扉を見て呟く

「そう言えばそうだねえ。映司がご飯持って行った時はどんな感じだった？」

アルフはアंकとの喧嘩を中断して言う

「おおおお・・・」

結果、アंकはアルフが急に手を離れた為、後頭部を床に叩き付けた

「ベッドに寝転がって、何か考え事してたかな？」

映司は顎に手を当てて、思い出すように言う

「考え事？何だい？」

「知らないよ、そんなの。フェイトちゃんに直接聞いてみないと」

「じゃあ、映司！GO！」

アルフがフェイトの部屋を指差し、映司にGOサインを出す

「わかった、食器の回収のついでに聞いて来るよ」

そう言って、映司はフェイトの部屋に向かった

「行つてらっしゃーい」

そう言つて、アルフはソファーに寝転んだ

「人任せもいいところだな」

いつの間にか復活していたアंकがソファーに寝転びながら小さな声で呟いた

ノックをしてから「どうぞ」と声がしたので映司は部屋に入る

「フェイトちゃん、食器を片付けに来ただけど・・・」

映司は差し入れに渡した食事を見る

大した量ではなかったが、食事は殆ど手がつけられていなかった

「・・・殆ど残してる、おいしくなかった？」

映司は溜息を吐いてフェイトに訊ねる

「ううん、そんな事ない、おいしかったよ。少し食べたから大丈夫」

フェイトはゆっくりと起き上がる

バリアジャケット姿ではあるが、マントは羽織っておらず、手袋もグローブはめていない

「アルフちゃんから聞いたよ。広域探索の魔法って、かなり体力を使うんでしょ？」

「・・・うん」

映司の指摘にフェイトは頷いた

「だったら、ちゃんと食べて、力を蓄えておかないと」

映司はベッドに腰を掛けてフェイトに言う

「うん・・・わかってる・・・大丈夫だよ、私は元気だから」

フェイトは俯いてそう言う

「・・・大丈夫に見えないから言ってるんだけどなあ」

映司はそう言っで、フェイトを見る

「フェイトちゃんはこれからもジュエルシードを探すんだよね？」

「うん、母さんが待つてるから・・・」

映司に訊かれ、フェイトは即答する

「だったら、もっと俺達を頼ってよ」

「えっ？」

「俺もアंकもアルフちゃんも、みんなフェイトちゃんの傍にいるよ？もっと頼ってよ」

映司は笑いながらフェイトに言う

しかし、何故かフェイトにはその笑顔が悲しげに見えた

「・・・わかった。でも、もうちょっと頑張らせてくれないかな？」

「・・・うん、わかった。もう少ししたら晩御飯にするから、その後ジュエルシード探しに行こうね」

「うん」

フェイトの返事を聞くと、映司は食器を持って部屋から出た

「映司、どうだった？」

部屋から出てきた映司にアルフが心配そうに近寄ってくる

「大丈夫、何かあったら頼ってくれるって」

「本当かい！？映司！！」

アルフは何故か嬉しそうに飛び跳ねている

「どうしたんだ？お前」

そんなアルフを、アंकは怪しいものを見る目で見る

「だって！フェイトが自分から頼ってくれるって言ったんだよ！！」

「そっか、よかったね、アルフちゃん」

そう言って映司はキッチンに向かう

「あ、そうだ。アルフちゃん、1つ聞いてもいい？」

しかし、途中で思いついた様に立ち止まり、アルフの方を見る

「何だい？映司」

「フェイトちゃんのお母さんって、どんな人？」

「・・・」

アルフが急に顔を伏せた

拳を握るその手はぶるぶると震えている

よく見ると、全身も震えていた

それが『怒り』か『憎しみ』か、それとも『恐怖』なのかは映司と  
アंकにはわからなかった

しかし、あまり良い感情を抱いていないという事だけはわかった

「・・・答えにくかったらいいよ。ごめんね、アルフちゃん」

「あ、ああ。こっちこそごめんよ」

そう言って、アルフはそそくさとリビングに向かった

「・・・アंक」

「ああ、どうも良い人間じゃあないみたいだなあ」

「・・・一度、会ってみる必要があるそうだな」

アंकはそう言っけリビングに向かった

「・・・」

映司もアंकに続いてリビングに向かった

海鳴市を夜の闇が包んだ頃――

とあるビルの屋上に映司達はいた

「大体、この辺りだと思っただけど・・・」

「探すの大変そうだなあ・・・」

映司はビルの屋上から周囲及び主に下を見る

「これだけゴミゴミしてると探すのも一苦労だねえ」

アルフも映司同様に周囲及び下を見回しながら率直な感想を述べる

「フェイト、何か手はあるのか？もう一度探索するのか？」

アंकの言葉にフェイトは首を横に振る

「うっん、多少だけど強引な手を使っただ」

「強引な手？」

映司はフェイトが何をするのかわからず、首を傾げる

「この辺り周辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるんだ」

「ああ、それあたしがやるよ」

自分がやると、アルフが立候補した

「大丈夫？結構疲れるよ」

フェイトがアルフの身を気遣う

「あたしが誰の使い魔だと思ってるんだい？」

アルフは笑いながらそう言った

「じゃあ、お願い」

フェイトは自身の使い魔に任せる事にしたようだ

「アイツは何を始める気だ？」

「説明するより見た方が早いと思うよ」

フェイトはアंकにこれから起こる事を見る様に促した

「そんじゃあ！いくよ！！」

アルフの足下にオレンジ色の魔方陣を展開させる

「はぁああああ！！！！！！！」

そして、一筋の光を夜空に向けて撃ち込んだ

それにジュエルシードが反応して空が暗くなり、海では激しく雷鳴が轟いた

その頃――

なのはとユーノも同じく街に出てジュエルシードを探していた

「い、これは!?!」

別々に探してたユーノが街の異変に驚く

「こんな街中で強制発動!?!」

空を見上げてユーノは叫んだ

「くっ! 広域結界! 間に合え!?!」

ユーノの足下に緑色の魔法陣が展開された

「ッ!？」

一方のなのはも街の異変に気付いていた

満月が出ていたのに、雲が急に出現して隠し始めた

その直後に雷が鳴り始めたが、雨が降る兆候はない

ここにはいないユーノが結界を張ったのだろうとなのはは推測した

「レイジングハート!お願い!!」

「stand by ready set up」

なのはは桜色の光に包まれ、バリアジャケットを纏った

人工的に発生した異常気象は収まり、後には海鳴市に青色の光が天に向かっていくという光景だった

その天に昇る光が何なのかは、なのはにはわかった

そして、この突然の異常気象を引き起こす原因となる魔力を打ち込んだ者にも目星がついていた

「見つけた！」

天に向かって放たれている一筋の青い光

それがジュエルシードだという事をフェイトは確信していた

そもそもこのような状況を起こさせるために、天に向かって魔力を放ったのだ

「けど、あっちも近くにいるみたいだよ」

アルフが言った直後、ユーノの広域結界で世界の色が変わった

「早く片付けよう。バルディッシュ」

「Sealing Form Setup」

バルディッシュをデバイスモードからシーリングモードへと形態を変化し、構えた

一方、なのはは何処か別の場所で結界を展開しているユーノからの念話を受けていた

（なのは、発動したジュエルシードは見える？）

（うん、すぐ近くだよ）

本当に近くなので、なのはは即答した

（あの子達もすぐに近くにいるんだ。あの子達よりも先に封印して！）

（わかった！）

念話の回線はどちらが先というわけでもなく切れた

「Sealing Mode Setup」

なのはの意思を汲み取ったのかレイジングハートがシーリングモードへと形態を変えていく

「リリカルマジカル！」

レイジングハートに桜色の光が集束される

「ジュエルシード、シリアル19！」

バルディッシュにも金色の光が集束される

「・・・ッ！？待て！！」

アंकはジュエルシードを見て何かに気付き、フェイトを止めようとしたが、既に遅かった

「封印!!」

二人の少女が叫ぶと同時に、金色と桜色の光がジュエルシードにぶつかった

ジュエルシードは浮揚してはいるが、それ以上の動きはない

やがて2つの光は消失し、そこに残っていたのは浮揚しているのは  
淡い光を放ったジュエルシード1つだけだった

なのはとフェイトは急いでジュエルシードのある場所に向かった

「映司!今すぐアイツ等を止める!」

そう言って、アंकは映司にメダルを投げる

映司は驚きながらそれを受け取った

「アंक?一体どうしたんだい?」

映司に大きな声で言うアंकにアルフは首を傾げる

「・・・まさか!？」

「早くしろ!」

「うん!」

映司は腰にドライバーを装着し、メダルを入れてスキャナーを滑らせた

「変身!」

キーン!キーン!キイインツ!

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATAA!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

そして、映司の胸に紋章が刻まれ、力が宿った

映司はオーズ・タカジャバに変身し、フェイトを追った

「フェイトちゃん！」

「・・・高町、なのは」

フェイトとなのははジュエルシードの傍で再会していた

「・・・今回も勝負だね」

そう言っただけなのはとフェイトはまた戦闘を始める

「Scythe for me」

フェイトはバルディッシュを鎌の形に変形させた

「！！」

なのはもレイジングハートを構える

電灯から離れ、宙に浮かんで一定の距離をとるようにして下がる

そして、構えてなのはに向かって突っ込んでいった

「Filler Fin」

なのはの両足に桜色の双翼を展開させ、フェイトと同じように宙へと舞台を移した

「Flash Move」

フェイトがバルディッシュを振りかぶって、なのはの背後に回りこむ

「あー!」

なのはより先にレイジングハートが反応して、フェイトの背後に回りこんだ

「!？」

フェイトは一瞬だが、驚愕するがすぐに次の攻撃に転じるための策を頭の中で練った

「Divine Shooter」

レイジングハートからデバインシューターが放たれる

「Photon Lancer」

周囲に生成したフォトンスフィアからフォトンランサーを発射し、デバインシューターを打ち消した

フェイトはその後、すぐにジュエルシードに向かった

「あーズルい！」

なのはもジュエルシードに向かった

そして、ジュエルシードの前で2人の持つデバイスがぶつかり合った

「「あつ!?!」」

そのせいで互いのデバイスにヒビが入ってしまった

しかし、2人にデバイスを気にしている暇は無かった

「「ッ!?!」」

何故なら、ジュエルシードが強烈な光を放ったからだ

先程までの淡い光を大きく上回る光が忽ち広がって行く

「フェイトちゃん!なのはちゃん!」

その光から2人を救い出すようにオーズはジュエルシードから引き離れた

そして、ジュエルシードから遠く離れた場所に2人を降ろした

「大丈夫？2人共、怪我は無い？」

オーズは2人を並ばせて、怪我をしていないか体を調べた

「だ、大丈夫だよ、映司。でも、バルディッシュが・・・」

「私も、大丈夫ですけど、レイジングハートが・・・」

2人は傷付いてしまった自身の相棒を悲しい瞳で見つめる

「戻って、バルディッシュ」

「Yes sir」

「レイジングハートも戻っていいよ」

「All Right」

2人はデバイスをスタンバイモードに戻した

「ねえ、映司。あれは何？」

「いつものジュエルシードと違うよね」

フェイトとなのはいつもと違うジュエルシードを見上げて言う

光は、今も大きく膨らんでいつている

その中には、大量の水色の玉が存在していた

「あれは・・・ヤミーの卵だよ。ジュエルシードの淡い光だと思ってたのはヤミーの卵だったんだ」

オーズは空で輝きを増しているジュエルシードを仰ぎ見て2人に言い放った

第5話『喧嘩と心配とヤミの卵』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第6話『約束と思い出と分身コンボ』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第6話『約束と思い出と分身コンボ』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、アंकと映司はオーズのコンボについて、フェイトとアルフに話す

2つ、映司はなのはとフェイトと話し、2人は似た者同士だと知る

そして3つ、なのはとフェイトの魔力により、ジュエルシードが暴走し、ヤミーの卵が大量発生した

## 第6話『約束と絆と分身コンボ』

ジュエルシードの暴走により、ヤミーの卵が無限に生成されているのを少し離れて見ている者がいた

そう、ヤミーを作り出している黒いローブを着た男である

「ほう。まさか、こんな事になるとは・・・嬉しい誤算だ」

男がそう言っている間にも、ヤミーの卵は次々と増えていつている

「さあ、どうする？欲望の王よ」

そう言い残し、男は闇に消えた

オーズの話を聞いて、なのはとフェイトは驚愕していた

自分達の上空では今、ジュエルシードが輝きを放っている

その光の中には、いくつもの水色の玉が生成されていた

そのせいで、ジュエルシードは卵に隠されて見えなくなってしまう  
ている

「や、ヤミーの卵って・・・あんなに沢山あるよ!？」

「じゃ、じゃあ、この前みたいなのがあんなに生まれるんですか！  
」?

フェイトとなのはは驚愕して空にあるジュエルシードを見つめる

「ジュエルシードを利用してるから、無限に生まれてくるかもしれない・・・」

オーズがそう言った次の瞬間、卵が一齐に孵った

空から大量のピラニアヤミーが降って来る

その光景を見て、なのはとフェイトはどうすればいいのかわからなくなってしまうた

「・・・とにかく、何とかしないと!」

オーズはそう言って空に舞い上がり、ピラニアヤミの波に向かって飛んだ

「はあっ!!」

タジャスピナーからエネルギー弾を放ち、ピラニアヤミの海に穴を開ける

しかし、その穴はすぐに他のヤミによって塞がれる

「やっぱり、元を断たないとダメか」

そう言って、オーズはドライバーからメダルを外し、タジャスピナーに入れた

そして、スキヤナーをタジャスピナーに当て、スキャンした

《TAKA!KUJYAKU!BATT!GIN!GIN!GIN!  
N!GIN!GIN!GIN!GIN!GIGASCAN!!》

タジャスピナーの中のセルメダルがギガスキャンされ、炎の渦が発生する

「はあああ・・・セイヤアアアア！！」

オーズはジュエルシードに向かって3枚それぞれのコアメダルと7枚のセルメダルを模したエネルギー弾を回転させながら放った

しかし、エネルギー弾はジュエルシードに届く前にピラニアヤミーによって止められてしまった

「ヤミーが多過ぎる・・・うわっ!?!」

オーズが空を飛んでいるにも関わらず、ピラニアヤミーはその数を活かして大きな波を作り、オーズに襲い掛かった

「何やってんだ!! 映司!!」

ところが、その波はオーズに届く前に圧倒的な炎によって綺麗に消し去られた

そして、連鎖するように殆どのピラニアヤミーを燃やし尽くす

「アंक！」

炎が飛んで来た方を見ると、翼を広げたアंकがそこにいた

「コアをこいつに変えろ！」

そう叫んでアंकは『クワガタメダル』を投げ渡す

「よし！」

オーズは地面に降り、『タカメダル』を『クワガタメダル』に換え、スキャナーを滑らせた

キーン、キーン、キイインッ！

《KUWAGATA!》《KUJYAKU!》《BATT!》

「はあー!!」

オーズはガタジャバに変わり、クワガタヘッドから雷を放ってピラニアミーを殲滅する

しかし――

「ダメだ、キリがない！うわっ！！」

無数のピラニアミーが一気に消滅するが、それを上回る増殖力でオーズに襲い掛かった

「映司！」

アंकは火炎弾を数発放ち、オーズに襲い掛かろうとしたピラニアミーを消滅させる

「ダメか……。映司！一旦引くぞ！」

アंकは先程消した分がもう生み出されているのを見てオーズに言う

「わかった！」

アंकと策を練る為、一旦フェイト達の所に戻るのだった

オーズがフェイトとなのはを避難させた場所

「なのは！」

「フェイト！」

2人の元に、それぞれの相棒が駆けつけていた

「ユーノ君！」

「アルフ！」

2人は相棒の姿を見て、駆け寄る

「大丈夫かい？」

「うん。でも、映司が・・・」

フェイトは大量のピラニアミーを駆除しているオーズを心配そうに見つめて言う

「あッ！映司！！」

「映司さん！！」

オーズがピラニアミーに吞まれそうになったのを見てフェイトとなのはは声を荒げる

しかし次の瞬間、ピラニアミーの波が巨大な炎によって消し去られたのを見て驚いたが、オーズが無事なのを見て2人は少し安心した

「今の・・・もしかして・・・」

「うん。多分、アंकだと思うよ。いつも炎を使ってたからね」

アルフは巨大な炎を見てアंकが放ったと推測した

「何て強力な炎なんだ・・・」

ユーノはその炎を見て呆然としていた

「・・・あ、戻って来た」

フェイトはピラニアミーの海から離れて来るオーズとアंकを見た  
つけた

4人は近くに降り立った2人を見て駆け寄る

「映司！大丈夫！？」

「怪我とかしてませんか！？」

フェイトとなのはが心配そうにオーズに訊ねる

「え？あ、うん。大丈夫だよ。それより・・・」

オースは振り返ってピラニアヤミの海を見る

「どうしよう、映司・・・バルディッシュはしばらく使えないし・・・あんなに沢山いたら・・・」

「私も、レイジングハートはしばらく使えません・・・」

フェイトとなのはが俯いてオースに言う

「映司・・・」

「映司さん・・・」

アルフとユーノも心配そうな顔をしてオースを見る

「・・・よし、アंक」

映司は何かを決意してアंकを見た

「どうやら、コンボしかないみたいだな」

そう言つて、アंकは『カマキリメダル』を出す

「だがお前、本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃなくても、やるしかないでしょ」

映司はアंकからメダルを受け取り、歩いて行く

そして、なのはとフェイトの前に立った

「映司、何をする気なの？」

「何か手があるんですか？」

「うん。危ないから、みんなさがつてね」

オーズはそう言つてなのはとフェイトの頭を撫でた後、大量のピラニアミミを見た

そして、もう少しみんなから離れてから、『クジャクメダル』を『

カマキリメダル』に換え、オースキャナーを滑らせた

キイン、キイン、キイインッ！

《KUWAGATA!》《KAMAKIRI!》《BATAA!》

《GAITAGATAKIRIBBA!GATAKIRI  
BA!》

いつもと違う歌が流れ、光が収まった時、そこにいたオーズの姿は  
変っていた

胸部の中心にあるサークルに刻まれた『クワガタ鋏形』『カマキリ螳螂』『バッタ飛蝗』

『鋏形の角』が備わった緑の顔

『螳螂の鎌』が装備された緑の腕

『飛蝗の脚』が備わった緑の脚

全身が緑に揃った『ガタキリバコンボ』にオーズは変わったのだった

「うおおおおおおお！！！！！」

緑の衝撃波を放ち、オーズは溢れんばかりの力を解き放つ様に咆哮を上げた

「な、何て力だ・・・！」

「か、身体の震えが止まらないよ、フェイト」

ユーノがオーズの力を感じ取り、驚愕している

そして、アルフはその巨大な力に野生の本能が反応し、震えていた

「す、凄い・・・」

「凄過ぎるよ・・・」

フェイトとなのはも呆然とオーズを見ていた

「何言ってる？とんでもないのはここからだぞ？」

そんな4人に、アंकは不適な笑みを浮かべて言い放った

「おおおお！！ハアアア！！」

オーズは咆哮を止めて思いきり腕を下ろす

そして、ピラニアミーの海に向かって走り出した

オーズは波のようになってくるピラニアミーに向かって走って行く

「はぁぁぁぁぁ！！！！！！」

そして、次の瞬間にオーズが総勢50人に分身した

オースの波とピラニアミーの波がぶつかった

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！でりゃ！はっ！はあ！でりゃあ！！」

「はっ！はああ！はっ！はっ！セイヤー！！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！おりゃ！はっ！やあっ！でりゃあ！！」

「はっ！はああ！せいっ！はっ！セイヤー！！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！でりゃ！はっ！はあ！でりゃあ！！」

「はっ！はああ！はっ！はっ！セイヤー！！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！おりゃ！はっ！やあっ！でりゃあ！！」

「はっ！はあああ！せいっ！はっ！セイヤー！！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！でりゃ！はっ！はあ！でりゃあ！！」

「はっ！はあああ！はっ！はっ！セイヤー！！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！おりゃ！はっ！やあっ！でりゃあ！！」

「はっ！はあああ！せいっ！はっ！セイヤー！！」

「ふっ！はっ！とりゃっ！はあっ！！」

「はあ！でりゃ！はっ！はあ！でりゃあ！！」

オーズはピラニアミーをクワガタヘッドから放った雷で消滅させ、  
カマキリソードで斬り裂き、バッタレッグで蹴り、踏み潰していく

「いたっ！このっ！」

「痛い痛い！！！」

「いだだだだ！？」

「いてっ！このっ！」

「噛むな噛むな！！！」

「いでででで！？」

「いたっ！このっ！」

「痛い痛い！！！」

「いだだだだ!?!」

「いてっ!このっ!」

「噛むな噛むな!!!」

「いでででで!?!」

ピラニアヤミーも負けるものとオーズ達の身体のおっちょこちに  
噛み付く

しかし、力はオーズの方が圧倒的だった

ピラニアヤミーはジュエルシードに集まり、巨大な1匹のピラニア  
ヤミーになり、オーズに光線を放とうとチャージを始める

それを見たオーズは一斉にメダルをもう一度スキャンする

キーン、キーン、キイイーンッ!

《Scanning Charge!》

《Scanning Charge!》

《Scanning Charge!》

《Scanning Charge!》

全員がスキヤニングチャージすると、巨大ピラニアヤミーはオーズ  
に向かって光線を放った

「セイヤアアアアー!!!!!!」

「セイヤアアアアー!!!!!!」

「セイヤアアアアー!!!!!!」

「セイヤアアアアー!!!!!!」

しかし、その爆発をもろともせずに、オーズ達はヤミーに向かって

一斉に蹴りを放った

『ガタキリバコンボ』の必殺技『ガタキリバキック』である

巨大ピラニアヤミーの中に入り込んだオーズ達は内側からもピラニアヤミーを壊していく

そして、ジュエルシードを発見し、掴み取り、体内から飛び出した

すると、ピラニアヤミーは大爆発を起こし、大量のメダルをばら撒く

オーズは1人に戻り、その手にジュエルシードを握って地面に着地した

オーズの戦いをフェイト達は呆然と見ていた

50人に増え、あれだけいたピラニアヤミーを全て倒してしまった

最初は幻術かと誰もが思ったが、その全てが実体を持って戦っていた

もう、この場にいるアंकを除いた全員が理解不能だった

そして、ピラニアミーを倒したオーズが地面に着地する

「はぁ・・・はぁ・・・」

オーズがコンボの反動に膝をついてしまった

そして、変身が解除されて地面に倒れた

「「え、映司!?!」」

「「映司さん!?!」」

「「チツ・・・」」

その光景に驚いた5人は駆け寄った

「おい、映司！しっかりしろ！」

「映司！しっかりして！」

「映司！！」

「映司さん！大丈夫ですか！」

「しっかりして下さい！映司さん！」

アंकは映司の体を抱え、他の4人が側に寄り映司を覗き込む

「あ、あはは・・・ちよつと・・・疲れた・・・」

そう言つて、映司は目を閉じて気絶した

「「映司！！」」

「「映司さん！！」」

4人は映司の名を同時に叫んだ

「フェイト、アルフ、さっさと運ぶぞ」

アंकは映司を抱え、翼を広げて空に舞い上がった

「う、うん！」

「急ごう！」

フェイトとアルフもそれに続こうとする

「ふえ、フェイトちゃん！」

「・・・なに？」

なのはに呼び止められてフェイトは振り返る

「え、映司さん、大丈夫なの？」

「・・・きつと大丈夫。映司は強いから」

フェイトはなのはの心配そうな顔を見て言い、先に行ったアंकとアルフを追い掛けた

（フェイトの自宅）

家に戻った3人は映司をベッドに寝かせ、看病していた

まあ、実質やっているのはフェイトとアルフだが・・・

「これでよしと・・・」

アルフは濡れたタオルを映司のおでこに乗せて小さく呟く

「映司・・・」

フェイトはそつと映司の手に触れた

「……ごめんなさい……私のせいで……」

「フェイト……」

「私が、私が映司を巻き込んだから……」

フェイトは悲しげに顔を俯かせながら映司に何度も謝った

「私が巻き込んだのに、私は何も出来なかった……ごめんね、映司……本当にごめんなさい……」

隣に座ってるアルフは優しくフェイトの肩を抱いてやる

その時――

「……謝る必要なんて……無いよ……フェイトちゃん」

映司の声がした

フェイトは顔を上げて映司を見る

映司はいつの間にか目を覚まし、フェイト達を見ていた

「映司！」

「気がついたのかい！？」

「うん」

ゆつくりと映司は上半身を起こした

「映司・・・本当にごめんね。私のせいで・・・映司を危ない目に  
あわせて・・・」

フェイトはまた悲しそうな表情で顔を俯かせる

「そんな事ないよ、顔上げて？フェイトちゃん」

映司の優しい声を聞いて、フェイトは顔を上げる

「前にも言ったよね？俺達もジュエルシードを集めないといけないって。それに、今回は相手が多かったから疲れただけだよ。ヤミーのせいだから、フェイトちゃんのせいじゃないよ」

「映司……」

フェイトは感極まって涙を流しそうになった

「……あ、でもやっぱりフェイトちゃんのせいかもしれないなあ」

「えっ！？そ、そんな……」

映司の突然の発言にフェイトは驚いた

「フェイトちゃんがいつつも1人で何でも抱え込んで頼ってくれないから、倒れちゃったのかもしれないなあ」

映司は意地の悪い笑みを浮かべながら言う

「・・・ッ！そ、そうだよ！いつつもフェイトがあたし達を頼ってくれないから、こんな事になったんだよ！」

映司の意図に気付き、アルフも乗った

「そ、そうなの！？で、でも・・・」

「そうか、フェイトちゃんはまた俺が倒れてもいいんだ」

「フェイトはそんな事思ってるのかい？」

「ええ！？わ、私、そんな事思っていないよ！？ねえ！！」

フェイトはアタフタしながらそんな事思っていないと必死に言う

「わ、私ホントに思っ——」

フェイトがオロオロしながら必死に2人に弁解していると・・・

「うるさい——」

「ッ!？」

誰かがフェイトの頭に拳骨を叩き込んだ

フェイトは両手で頭を押さえて痛みに耐えている

「お、おい・・・やりすぎだぞ、アंक」

「あ、アंक! アンタ何やってんだい!？」

アルフはアंकに飛び掛ろうとした

「おすわり!!」

「わんっ!・・・ハッ!？」

アंकのあまりの気迫にアルフは思わず、おすわりをしてしまった

「フェイト、お前は今日の映司を見てどう思った？」

「えっ？」

「何でもいい。ぶっ倒れた馬鹿映司を見てどう思ったんだ？」

「・・・一人で・・・無茶しないで欲しいと思った・・・」

フェイトは顔を俯かせてアंकに答えた

その答えを聞いて映司とアルフは優しい表情を浮かべてフェイトを見る

「それは、俺達がいつも思ってる事だとコイツ等は言いたいらしいぞ」

アंकの話を聞いて、フェイトは映司とアルフを見る

「夕方に言ったよね？もっと頼って欲しいって」

「・・・っん」

「フェイトちゃんはまだ子供なんだよ？もつと周りを頼って、甘えて良いんだよ」

「・・・」

フェイトは映司の話を聞いてアルフとアンクの顔を見る

「うん」

「ふん」

アルフは頷き、アンクは顔を逸らしたが頷いた

「ね？」

「・・・うん。ありがとう、映司、アルフ、アンク」

フェイトは目を潤ませながら3人にお礼を言った

「それじゃあ、もう寝ようか。もう随分遅い時間だし」

映司は部屋に掛けられた時計を見て言う

「どっかの誰かさんがぶつ倒れたからなあ。いい迷惑だ」

そう言っつて、アंकは部屋から出て行った

「あんな言い方しなくてもいいのにね、アंक」

フェイトは出て行ったアंकを見て言う

「素直じゃないんだよ、アंकは。でも、心配掛けたみたいだな」

映司はアंकが出て行った扉を見て言う

「え？どういう事だい？いつものアंकと変わらなかったけど？」

映司の発言にアルフは首を傾げた

「アイス、食べてなかったでしょ？」

「・・・あ、ホントだ。いつもなら食べてるのに、さっきは食べてなかった」

フェイトは確かにアंकがアイスを食べていなかった事に気付いた

「アंकはアंकなりに心配してくれてたんだよ」

開けっ放しにされた部屋のドアを見て、映司は呟いた

「そっかそっか。アंकも素直じゃないねえ」

アルフは面白い事がわかったという笑みを浮かべている

「それじゃあフェイト、あたし達も寝よう。明日はアンタのお母さんに報告に行くんだし」

「うん、そっだね。おやすみ、映司」

「おやすみ、フェイトちゃん、アルフちゃん」

映司の返事を聞いてフェイトとアルフは部屋を出て行った

「……フェイトちゃんのお母さん、か」

映司はさっきまでとは打って変わって深刻な表情を浮かべる

「……会えば『あの傷』について、ちゃんと説明してくれるのかな？」

その言葉にはあからさまに怒りが籠っていた

映司は寝巻きに着替えて、寝る準備をしていた

コンボのせいで、未だに身体はダルイが、初めて使った時まではなかったようだ

「初めて使った時は、1日中寝てたからなあ」

そう呟いて、映司はベッドに倒れ込む

「・・・明日は大変だろうな」

映司が明日に想いを馳せながら寝ようとした時、部屋のドアを誰かがノックした

「ん？どうぞ」

映司がそう言うとドアが開き、フェイトとアルフが入って来た

フェイトは大きな枕を抱き締めるように持っていて、アルフは何かブツブツ呟いている

「・・・映司」

「あれ？どうしたの？2人共。眠れないの？」

「あの・・・その・・・」

フェイトは顔を赤くしながら、胸の前で手をモジモジさせてる

映司はそんなフェイトを見て、首を傾げた

「えっと・・・今日は一緒に・・・寝てくれないかな？」

「・・・え？」

「え、映司1人で寝るのは・・・寂しいかなって思ってた・・・えー  
っと・・・アルフも何か言ってたよ」

フェイトは顔を真っ赤にし、視線を泳がせながらアルフに助けを求めた

「・・・ちよつとからかっただけなのに・・・あんなに怒らなくて  
もいいじゃないか・・・」

しかし、フェイトの声はアルフには届かなかった

「・・・えっと・・・ダメ、かな・・・？」

フェイトはアルフに助けを求めるのを諦めて映司に言った

「・・・うん、わかった。今日は一緒に寝ようか」

映司がそう言った瞬間、フェイトは笑顔になった

「アンクに布団貰ってくるから、2人はベストポジションでも探してて?」

そう言っただけ映司は部屋を出て、アンクの部屋に向かった

「アンク、余ってる布団って何処にある?」

「あ?その辺にあるだろ。適当に持ってけ」

アンクはスマホを弄りながら映司に答える

布団が余っているのは、以前アンクが布団をネットで買った時、アルフが邪魔して数を間違えたからだ

「・・・なあ、アンク。アルフちゃんと何かあった?」

「・・・」

「あつたんだな。何したんだ？」

映司は黙ったアंकに溜息をつきながら訊ねる

「あの犬ところが余計な事を言うからだ」

アंकは寝返りをうって、映司に背を向ける

「・・・まあ、喧嘩もほどにしとけよ？」

「・・・」

「・・・はあ、おやすみ、アंक」

そう言って、映司はアंकの部屋を出て部屋に戻った

部屋に戻ると、既にアルフはベッドのすぐ傍で狼形態になって丸ま  
って眠っていた

映司はベッドの横に布団を敷いて、そこに寝転がる

「・・・映司」

すると、まだ起きていたフェイトが映司に話し掛けて来た

「なに？フェイトちゃん」

「・・・約束して欲しい事があるの」

「約束？」

フェイトの突然の発言に映司は首を傾げる

「もう、絶対に1人で無茶しないで・・・」

「えっ？」

その言葉に、映司はフェイトを見る

フェイトは真剣な表情で映司を見つめていた

「今日は仕方なかったかもしれない。でも、今度からは絶対に1人であんな事しないで」

「・・・ありがとう、フェイトちゃん」

映司は自分の事を本気で心配してくれているフェイトに微笑みながらお礼を言う

しかし――

「でも、俺は大丈夫だから。それに、フェイトちゃんの方がいっつも無茶してるよ？」

「そ、それは・・・」

映司にそう言われ、フェイトは言い返せなかった

しかし、表情からは納得できていないという事がハッキリと伝わって来る

「・・・じゃあ、どうしようか」

「えっ？」

「もし、俺がピンチになったら、フェイトちゃんが助けてよ。その代わり、フェイトちゃんがピンチの時は、必ず助けに行くから。ね！そうしよう？」

「・・・」

映司の提案を聞いて、フェイトは少し考えた

「・・・わかった。じゃあ、映司がピンチになったら、私とアルフが必ず助けに行くよ」

「うん。頼りにしてるよ、フェイトちゃん」

映司は笑ってフェイトにそう言った

「じゃあ、もう寝よう。明日はお母さんの所に帰るんでしょ？」

「うん、そうだね。今度こそおやすみ、映司」

フェイトはそう言って目を閉じた

「おやすみ、フェイトちゃん」

映司はそう言って、布団に預ける

（・・・本当、ありがとう。フェイトちゃん）

映司はもう一度心の中でフェイトへのお礼を呟いた

深夜3：00

映司はフェイトが寝たのを確認して、部屋から出てリビングに来ていた

「・・・1人で無茶しないで、か」

映司はフェイトから言われた言葉を思い出し呟く

「お前には難しい注文だなあ、映司」

「アंक・・・起きてたのか・・・」

ソファーに座ってボーっとしながら呟いていると、いつの間にかアंकがリビングの入り口に立っていた

「無茶はお前の癖みたいなもんだ。今更治る訳が無い」

アंकは赤いシートを敷いたソファーにドカッと座り、映司の顔を見る

「・・・思い出したのか？」

「・・・うん、ちょっとね」

アंकに真剣な表情で問われ、映司は苦笑いし答えた

「俺の事を本当に心配してくれたのなんて、お前やグリードのみんな以外に、あの子だけだったから・・・」

映司は自分の右手を見つめて呟く

その右手は小刻みに震えていた

「・・・あの子を失って、もう後悔しないように生きようって決めたけど、結局は後悔だらけの人生だった」

「映司・・・」

映司の悲しげな表情にアंकも顔を顰める

『・・・アंक達との絆を・・・大切にしたい?・・・私には、出来なかったから・・・ね?』

映司の頭に、過去に大切に思っていた人から贈られた言葉が響く

「でも、今更何を言っても過去は変わらない。今は・・・目の前で確かに輝いてる小さな光を護るしかないんだよな。お前とラトやコノハ、シャルにリクとの絆があるんだから。あつ、今はフェイトちゃんともか」

映司は右手を強く握り締めて言った

「・・・フツ、お前が馬鹿で良かった」

そう言う映司にアंकは鼻で笑いながら言った

「おい、アंक。それは酷いぞ」

「本当の事だろうが。変に感傷に浸ってないで、さっさと寝ろ」

そう言って、アंकは部屋に戻って行った

「・・・ありがとう、アंक」

映司もそう呟くと、部屋に戻って行った

「・・・緊急事態発生、どうしよう・・・」

午前6：30

映司を未曾有の事態が襲っていた

「す～・・・す～・・・」

「・・・何で、フェイトちゃんの顔が目の前に？」

そう、フェイトがベッドから落ちて、映司の布団に入り込んで来ていたのだ

フェイトは映司の腕を枕にして気持ち良さそうに眠っている

「……どうしたらいいんだ……」

昨夜とは違う悩みを、目覚めた直後に抱える映司だった

因みに……

「お肉だ……」

「……いであで……!?!?」

アंकはいつの間にか部屋にいたアルフに肉と間違えられて腕を噛まれていた

「いい加減にしろ!この犬っころ!!俺は肉じゃない!!」

「うん……まずい……」

「……」

プチッ――

アंकの中の大事な何かが切れる音がした

アルフをアंकが叩き起こしたのは言うまでもない

## 第6話『約束と思い出と分身コンボ』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第7話『母と怒りと秘密』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第7話『母と怒りと秘密』

魔法少女リリカルなのは

〈欲望の王〉

前回までのハイライト――

何者かの手により、800年の眠りからオーズとグリードが目覚めた

オーズに変身のする火野映司はグリードのアンクと共にクイント・ナカジマを救う

その後、クイントを抹殺しようと奇襲を掛けて来たロボットと戦い、他のグリード4人と合流した

そして、通りすがりの仮面ライダー、門矢士に導かれ、ジュエルシードが散らばったとある世界にやって来た

その世界で映司はジュエルシードを探すフェイト・テストロッサとその使い魔・アルフに出逢った

その後、ジュエルシードを集めるもう一人の少女・高町なのはとユニ・スクライアとも出逢った

そして、この世界に現れたヤミーと映司達は遭遇する

そのヤミーはジュエルシードで強化されていた

オーズはアंकの作戦とフェイト達の助けにより、これを撃破した

そして、次にフェイトとなのはが合間見えた時、ジュエルシードが暴走した

映司はジュエルシードの暴走で無限に生まれていたピラニアヤミーをオーズ『ガタキリバコンボ』に変身し、殲滅した

## 第7話『母と怒りと秘密』

午前10:00

映司は翠屋という喫茶店にやって来ていた

フェイトの母親へのお土産を買いに来たのだ

「いらっしやいませー」

店に入ると、カウンターにいる若い男性の店員が笑顔で迎えてくれた

映司は陳列されている様々なケーキを見てどれが良いか選び始める

しかし、どれがいいのかまったくわからなかった

（何で・・・俺が来たんだろう？）

映司は何故自分が来たのかわからなかった

「何にしますか？」

映司がなかなか決められずにいると、男性店員が声を掛けてくれた

「あの、お母さん方が好んで食べるケーキってどれですか？」

映司はどれが母親に好まれるのか男性店員に訊ねた

下手な素人が選ぶよりはベテランに任せたほうがいいと思ったのだ

悪く言うと、他人任せである

「主婦層が好んで食べるとしたら大体この辺りだよ」

男性店員はそう言いながら、スイーツを教えてくれる

種類にして十種類ある中で『当たり』を選ぶのは不可能だろう

「じゃあ、この中で人気のあるのを3種類ください」

映司がそう言うと、男性店員はトングを持ってスイーツを3種類掴み、紙箱に収めていく

そして、紙箱に蓋をして、映司に渡して代金を請求する

映司は小銭でちょうどのお金を払った

「それ、誰かに渡すのかい？」

「ああ、はい。知り合いのお母さんのお土産なんです」

男性店員の質問に映司は笑いながら言い頭を軽く下げて、映司は翠屋を後にした

映司がケーキを買って帰ると、4人はマンションの屋上にやって来ていた

「映司がケーキを買って来てくれたから、お土産はコレでよし」

フェイトは映司に渡されたケーキが入っている箱を見て呟く

「ありがとう、映司」

「ううん、気にしないでいいよ」

お礼を言われた映司は笑ってそう言う

アंकはフェイトとアルフの表情を見ていた

「・・・ふん」

（喜んで行く様には見えないなあ）

そう思い、映司を見ると、映司も2人表情を見つめていた

「甘いお菓子か。こんなモンで、あの人は喜ぶのかねえ？」

アルフはフェイトが両手で抱えているように持っている紙箱を持ち上げて、眺めていた

「わからないけど、こういうのは気持ちだから・・・」

フェイトは箱に目を落として言う

「・・・伝わるといいね、フェイトちゃん」

「うん」

映司が笑って言うと、フェイトも笑って頷いた

「それじゃあ、行くよ」

フェイトはそう言うと、真剣な表情になり、唇を動かし始める

「次元転移。次元座標876C4419・・・」

映司は何を言っているんだろうとアंकに訊ねたが「黙ってる」と言われ黙った

「3312D699・・・」

フェイトを中心に、映司、アंक、アルフを囲うように魔法陣が出

現する

（何処かに移動するための魔法、なのかな？）

そんなことを思いながらも、フェイトの行動をじっと見ている映司

「3583A1460、779F3125」

次元座標を一通り言い終わると、フェイトは一拍置いてから魔法を発動させるための言葉を告げ始める

「開け、誘いの扉。時の庭園、テストロッサの主の元へ！」

言い終わると同時に、黄金の光が天に向かって昇っていく

光が消えると、そこには誰もいなかった

雷が常に鳴り、黒い雲が螺旋を描く運動を一向にやめない高次元空間

その高次元空間内に『時の庭園』は存在していた

元々、この空間に最初から存在していたわけではない

所有者がとある場所から切り離して、ここまで移動したものだ

そこに一瞬だが3つの金の光が『時の庭園』のそれぞれ違う箇所に  
落ち、消えた

「いたた・・・」

1つの光が落ちた場所に、着地に失敗し、地面に思いつきり顔面を  
ぶつけた映司がいた

「・・・あれ？みんな何処？」

映司は周りを見回して、フェイト達がない事に気付いた

「・・・もしかして、迷子？」

大丈夫、今の映司は子供だから恥ずかしくない

「・・・とりあえず、フェイトちゃん達を探すかな」

映司はそう言って歩き始めた

「それにしても、何か不気味だなあ・・・。『アイツ』の城を思い出す・・・」

映司は昔行つた城を思い出し、気分が悪くなる

（長居はしたくない・・・）

そう思いながら、映司は城の中を歩いて行く

すると、映司の耳に何かの音と奇妙な声が聞こえ始めた

「い」の音・・・何処かで・・・」

その音を映司は聴いた事があった

「・・・まさか」

映司は嫌な予感がし、音がする方へと走り出す

少し走るとアルフの姿を見つけた

しかし、見つけたアルフの様子はおかしかった

扉の傍で頭を抱えてうずくまっている

「アルフちゃんッ!」

映司はアルフに駆け寄り、腰を落とした

「映司・・・映司ッ!」

アルフは映司の顔を見ると映司に抱き付いた

「フェイトちゃんは!？」

映司はアルフを受け止めて、周りにフェイトの姿を探す

「え、映司！お願いだよ！フェイトをフェイトを・・・」

アルフは涙目になりながら映司に何かを伝えようとしている

「フェイトを助けて！！このままじゃ、フェイトが殺されちゃうよ  
！！」

映司はそれを聞いて、アルフの肩に手を置いて、離れさせる

「ここにいて」

映司は扉を睨みながらアルフに言って、立ち上がり、ドライバーを装着する

「セイヤツ！！」

映司は叫び、扉を蹴り破った

扉は部屋の中に吹き飛び、それに続いて映司も部屋に入った

「ッ!!?」

部屋の中に入った映司は目を大きく見開いた

映司の瞳に映ったのは2つ――

1つはバリアジャケットを引き裂かれ、体中に傷が出来たフェイトの倒れている姿だった

そしてもう1つは、黒髪の長髪に全身黒ずくめの服を着ている女性、フェイトをボロボロにした張本人の姿だった

「フェイトちゃん!!」

映司は駆け寄ってフェイトを抱き起こした

「フェイトちゃん！すっかりして！！フェイトちゃん！！」

「・・・あ・・・え・・・い・・・じ・・・？」

フェイトは薄っすらと目を開けて映司を見た

「いきなり扉を破って入って来て・・・あなた、何者？」

映司は前から聞こえる声に顔を上げる

そこには、まるで虫けらを見るような眼で映司を見る黒髪の女性が立っていた

「・・・人に名前を訊ねる時は、まずは自分からって知りませんか？」

映司は女性を強く睨みつけ、言う

「私はプレシア。大魔導師プレシア・テストロッサよ」

「・・・映司、火野映司」

これが、映司とプレシアが初めて出逢った瞬間だった

「アルフちゃん」

映司が大きな声で呼ぶと、アルフが部屋の外から入って来て、フェイトに駆け寄る

「フェイト!!」

「フェイトちゃんを頼める？俺はこの人に用があるから」

そう言つて映司はアルフにフェイトを預ける

「う、うん。わかった。気をつけなよ、映司・・・」

アルフはフェイトを抱えて部屋から出て行つた

「・・・フェイトちゃんの背中傷は、こついつ事だったんですね」

映司はプレシアを睨みながら言う

「あなた、フェイトちゃんの母親なんですよ？どうしてあんな仕打ちをするんですか？」

「何故？あの子はこの大魔導師プレシア・テストロッサの娘なのよ？それなのに、回収してきたジュエルシードはたったの5つ。この程度の成果しか上げられなかったから躑躅をしただけよ」

「ジュエルシードを5つ集めたのが失敗だって言いたいんですか？」

「21つの内、5つを回収した事を成功といえるかしら？」

プレシアは娘の結果に失望するだけだった

その結果に生じた過程を認めようとはしない

プレシアの言葉に、映司の中の何かが激しく燃え始める

「・・・フェイトちゃんがどれだけ頑張ったか・・・どれだけ危険な目にあっただか、わかってるんですか？」

映司は拳を強く握り締め、怒りを込めた視線をプレシアに向け、言う

「さあ？そんな私の知った事じゃないわ」

「・・・もう、いいです」

そう言っ、映司はポケットからメダルを取り出した

「・・・目障りだわ。消えなさい！！」

プレシアから紫の雷が映司に向かって放たれる

「はっ！」

映司は横に転がり、雷をかわした

（私の魔法を避けた！？）

プレシアが映司の動きに驚いている中、映司はドライバーにメダルを入れる

プレシアは再び、映司に向かって雷を放つ

「変身！」

キーン！キーン！キイイーンッ！

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

円形の様々な色の力の紋章が映司の周りを踊る

その紋章が、プレシアの放った雷を弾いた

《TA・TO・BA!TATOB!TA・TO・BA!》

オーズ・タトバコンボに変身した映司はプレシアに向かって構えを取った

映司が顔面を地面にぶつけていた頃――

アंकは別の所に着地していた

「ああ？はぐれたのか？」

アंकは周りを見て映司達がないのを確認して呟く

「面倒だな……」

そう呟いて、アंकは歩き出す

「それにしても、似てるな……」

アंकは昔自分達がいた城を思い出す

「チツ……胸糞悪い……」

アंकがそう舌打ちした次の瞬間、アंकの前を水色の服を着た金

髪の少女が通り過ぎた

「・・・フェイトか？」

アंकはフェイト？の後を追ひ、部屋に入る

「・・・何だ？」

その部屋の中にあつたのは無数の機械と培養液で満たされた生体ポッド

「・・・」

アंकはクイントの記憶の中にあつた知識を頼りに機械を操作する

「使い魔を超える人造生命の作成と死者蘇生の研究『プロジェクト F・A・T・E』・・・人造の命だ？」

アंकは更に手を動かしていく

そして、ある『真実』を発見した

「……『アリシア・テストロッサ』？」

アंकは、聞いた事が無い名前と知ってしまった真実に驚愕した

『ねえ、私が見えるの？』

「ッ!？」

アंकは後ろから聞こえた声に振り返る

そこにいたのは、先程見たフェイトと瓜二つの少女だった

「お前……アリシアか……？」

『うん、そうだよ。お兄さんは誰？』

アリシアは無邪気な笑顔を浮かべ、アंकに訊ねる

「……俺はアंक。フェイトの知り合いだ」

『そうなんだ！フェイト、お友達出来たんだ！』

アリシアは嬉しそうな顔をしてアंकに言う

「・・・お前、『死んでるだろ』？」

アंकはアリシアに向かって言った

『うん、死んじゃってるよ。お兄さんには何でかわからないけど私が見えるんだね』

アリシアは何故か笑いながらアंकに言う

「・・・ハッ！大したガキだな。自分が死んでる事を自覚してるとはなあ」

アंकはそう言って機械操作に戻る

『・・・ねえ、お兄さん』

「何だ？」

『・・・ママを・・・止めてくれないかな・・・？』

アリシアは先程までとは打って変わり、悲しげな声で言う

「あ？」

その声にアंकは機械を操作しながら訊く

『このままじゃ・・・ママもフェイトも・・・大変な事になっちゃ  
うよ・・・！』

アリシアは泣きそうな声を上げてアंकに言った

「・・・悪いな。俺には関係ない」

アंकはそう言い放ち、機械操作に集中する

『・・・』

アंकにそう言われ、アリシアは俯いてしまった

「・・・そういつのは、アイツの担当だ」

『えっ？アイツ？』

アंकの言葉を聞いてアリシアは顔を上げる

「俺が動かなくても、アイツが何とかする」

そう言って、アंकは機械を操作し、何かを探していた

『・・・さっきから何してるの？』

アリシアはちょこちょことアंकに近寄って、機械のモニターを見る

「時空管理局とか言ったな。奴等が隠蔽している真実を探してんだ  
よ」

そう、アंकは時空管理局の本局にハッキングを仕掛けていたのだ

「お前が死ぬ切欠になった事件は管理局の上層部と関った形跡がある」

『えっ？』

「当時魔導工学の研究開発者だったお前の母親、プレシア・テストロツサはあるプロジェクト『新型の大型魔力駆動炉・ヒュードラ』の開発の設計主任に任命された。だが、問題の多い前任者からの引継ぎ、上の馬鹿共の勝手な都合で厳しくなるスケジュール、馬鹿共に嫌気が差しやめていくスタッフ達の事後処理。まるで、拷問だな。更には、プレシアの進言にも拘らず上層部が自分達の都合で出した決定の末に実験を行い「駆動炉の暴走・エネルギー漏れ」が起こった。ここまではお前も知ってるだろ？」

『・・・うん。ママ、泣いてたから・・・』

自分が死んでから嘆いていたプレシアを思い出して、アリシアは表情を暗くする

「プレシアはこの事件について会社を告訴するが裁判では勝ち目はなかった。まあ、当然だなあ。管理局の上層部が絡んでるんだ、勝てる訳が無い」

『・・・』

「そして、告訴を取り下げることと条件にアリシアの賠償金を払うと言う会社の意志をプレシアは受け入れた。結果、『プレシア・テストロツサが違法手段・違法エネルギーを用い、安全確認よりもプロジェクト達成を優先させた』という形で記録に残った訳だ」

『そんな・・・』

アंकはハッキングで調べた事を全てアリシアに話していく

「だがなあ、どんだけ嘘で固めようと真実は消えないんだよ」

アंकがニヤリと笑い、コンソールを叩く

すると、物凄い勢いで表示が出たり消えたりする

そして、物凄いスピードで英数列が流れ始める

「管理局の闇、引き摺り出してやる」

アंकは悪い笑みを浮かべながらモニターを見つめていた

そんなアंकをアリシアは頼もしいと思ってしまっていた

アंकが管理局にハッキングを仕掛けている頃――

オーズとプレシアは対峙していた

「・・・下手なバリアジャケットよりは性能がよさそうね、その姿」

プレシアは冷静にオーズを見ている

オーズはプレシアを睨んでいる

「・・・フェイトちゃん・・・頑張ってたんですよ・・・」

フェイトが命がけでジュエルシードを探し、封印している姿を思い出す

ヤミーと対峙した時も、本当は怖かった筈だ

なのにジュエルシード探しを止めなかった

「あんな・・・優しい子に・・・」

フェイトと共に生活した数日間が思い出される

たった数日一緒に過ごしただけなのに、フェイトは自分の事を心配してくれた

こんな仕打ちを受けるような落ち度がある少女では決してない

そう、映司は断言出来た

オーズの腕にトラクローがセットされる

「よくもこんな・・・酷い事が出来たな!!」

そう言ってオーズはトラクローをプレシアに向かって振り落とした

プレシアはトラクローをバリアを張って防いだ

「そんなものじゃ、私には届かないわよ？」

「それはどうかね!」

オーズは一度後ろに飛び、バッタレッグの跳躍力を使って思いっきりプレシアに向かって跳んだ

そして、勢いがついたトラクローの斬撃にプレシアが張ったバリアは無残に碎け散った

「ッ!？」

プレシアは魔力で肉体強化を行い、後ろに跳ぶ

そして、またオーズに向かって紫の雷を放った

オーズはそれを横に転がり避ける

しかし、プレシアはオーズを近付けまいと何度も雷を放った

「・・・あ、しまっ・・・！？」

オーズが後ろに下がって雷を避けようとしたが、すぐ後ろは壁だった

ぶつかると思い、衝撃が来るのを覚悟したオーズだったが、壁には  
激突しなかった

当たる直前に壁は横にスライドして道が開かれたのだ

「ッ！？」

それを見たプレシアは焦りの色を見せた

オーズは床を転がりすぐに立ち上がった

「何だここ？隠し通路？」

オーズはそう言いながら、隠し通路を見渡す

少し狭い通路の先に何かを見つけた

「なっ！？」

それを見てオーズは驚愕した

通路の先には生体ポッドがあり、その中に1人の少女が全裸で入っていた

「・・・フェイト、ちゃん・・・！？」

その少女は、フェイトに瓜二つだった

オーズは生体ポッドに近付いて行く

その時――

「アリシアに近付かないで!!」

「!？」

プレシアの怒声と共に雷がオーズを襲った

オーズはそれをトラクロードで防ぎ、プレシアを見る

プレシアも通路に入って来ていた

「・・・これは、どういう事ですか？」

オーズは目の前にいるプレシアを睨みつけながら言う

「どうして、フェイトちゃんがもう1人いるんですか？」

「フェイトがもう1人？ふん、笑わせないで」

オーズの言葉をプレシアは鼻で笑った

「私の可愛い『アリシア』をあんな人形と一緒にしないでほしいわ」

「人形・・・？」

プレシアの言葉に、オーズは目を細めた

「フェイト・テストロッサは、私がアリシアの代わりに造った生命体よ。『フェイト』の名前はその当時のプロジェクトの名残よ」

「なッ!？」

オーズは目を見開いて驚愕した

「けど姿形は同じでも、あの子はアリシアではなかった。アリシアの記憶をあげても無意味だった」

プレシアの話をオーズは黙って聞いている

「アリシアはもっと素直で明るくて、いい子だった・・・いつも私に笑顔を見せてくれた」

プレシアは遠い目をしていた

「だから私は、あんな出来損ないを捨ててアリシアを蘇らせる事を決意したのよ！」

プレシアの目がカツと見開かれた

「ジュエルシードを使って、失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』へ向かい、アリシアを蘇らせるのよ!!」

プレシアは両手を高らかに挙げて言い放った

オーズはジッとプレシアを見つめた

「・・・あなた、何言ってるんですか？」

「・・・何ですって？」

「アリシアちゃんの代わりにフェイトちゃんを造った？寝言は寝て言っして下さいよ」

オーズはプレシアを哀れなものである眼で見る

「世の中には1人しかない。クローンを造って、どれだけ似せても、記憶が同じでも、生まれた人間はオリジナルとは違う人間になる。クローンがオリジナルの代わりになんてなれる訳が無い」

「・・・」

「アリシアちゃんの為に生き返らせるって言ってますけど、結局は自分の為でしょう？」

「ッ!？」

プレシアの目が大きく見開かれる

「あなたは自分の寂しさを埋める為に、フェイトちゃんとアリシアちゃんの命を弄んだんだ」

プレシアの顔が怒りで歪んでいく

「そして、拳句の果てにはアリシアちゃんの代わりを造った？アリ

シアちゃんって、代わりが利く子だったんですか？」

「・・・黙りなさい」

「あなたは本当に、アリシアちゃんを愛していたんですか？」

「・・・黙れ」

オーズの言葉がプレシアの胸に突き刺さって行く

「もしアリシアちゃんが生き返ったとして、今のあなたは胸を張って自分が母親だって言えるんですか？」

「黙れと言っているのよ!!」

プレシアから巨大な雷がオーズに放たれる

キーン！キーン！キイイーンッ！

《KUWAGATA!》《TORA!》《BATT!》

「はあ！！」

オーズは素早くタトバコンボからガトラバに変わり、『鍬形の角』から雷を放ち、相殺させる

「私はアリシアを愛していたわ！あの幸せな日々を取り戻したかった！！」

「・・・」

「大切な物に『必死に手を伸ばす』事がいけない事だと言うの！？」

プレシアはオーズに向かって怒鳴り、言う

「ああ、いけないなあ」

声のした方にプレシアとオーズは向く

「アंक・・・」

そこにいたのはアंकだった

「まさか、クローン技術に手を出して娘を生き返らせようとする母親がいるとはなあ」

アंकはゆつくりと通路を進んで来る

「お前、『死んだ娘の代わり』なんて、本気で作れると思ってたのか？」

「・・・どういう事？」

怒りを抑えた声で、プレシアが聞き返した

「さっきそこにいるバカも言ったが、この世に人間は1人しかいない。アンタの娘『アリシア・テストロッサ』は、この世に1人しかない。物じゃないんだ、代わりなんて用意できる訳ないだろうが」

アंकは呆れた様にプレシアに言う

「お前はアリシアの生きた人生を否定したんだよ」

「なッ！？黙りなさい！私はアリシアの人生を否定などしていない  
！！」

「いや、否定した。現にお前は娘の死に耐えられずにクローン技術  
を用いて蘇えらせようとした」

「その何が――」

「だがそれはお前の娘じゃない、娘のクローンだ。つまり、お前は  
娘じゃなく別の誰かに縋り付いたんだよ」

「ッ！？」

アंकは不適な笑みを浮かべてプレシアに言った

「違う・・・違う！違う！違う！私は・・・私はあ！！」

プレシアは首を振り、必死に否定する

「私はただ、もう一度アリシアの笑顔を・・・」

「今のあなたはアリシアちゃんと一緒に笑えるんですか？」

「えっ・・・？」

映司が何を言っているのかプレシアにはわからなかった

「アリシアちゃんの顔を見る度に、フェイトちゃんの顔がチラつくんじゃないか？」

「ッ!!」

プレシアはやっと映司の言葉の意味を理解した

「お前に鞭打たれ、涙を浮かべるフェイトの顔がチラつく。それでも笑えるならお前はもう人間でも母親でもないなあ」

アंकはグリード化させた右手首を回しながらプレシアを鼻で笑い言った

「くっ・・・！減らず口を——うっ・・・ごほっ！」

突然プレシアは手で口を押さえ、その場に膝をついて咳込んだ

「ん？」

「あ？」

オーズとアंकは不思議そうな顔をしてプレシアを見つめる

「ごほっ！ごほっ！」

口を押さえた手の隙間から血が溢れ出し、床に滴る

「ッ！？大丈夫ですか！？」

オーズは変身を解除して、プレシアに駆け寄る

「・・・なに！？」

アंकはまるで誰かの話を聞いたかのような行動を見せた後、プレシアに駆け寄る

「おい、お前！何か病を患ってんのか！？」

アंकは映司に背中を擦ってもらっているプレシアに訊ねる

「・・・ふふふ。いくら大魔導師と呼ばれる力を持っても・・・  
不治の病は治せないのよ・・・」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべて2人に言った

「・・・私を殺すなら、今がチャンスよ」

背中を擦っている映司を押して離れさせ、睨み言う

「そんな事どうでもいいですよ！！何処か、休める場所は！？」

そう言って、映司はプレシアに肩を貸して立ち上がらせる

「・・・どうして？」

「あなたが死んだら、フェイトちゃんが悲しむじゃないですか！」

その映司の言葉にプレシアは顔を俯かせる

「映司、さっきここに来る途中、ベッドがある部屋を見つけた。着いて来い」

「わかった」

そう言って、アंकを先頭に、映司はプレシアを助けながら歩き出す

「・・・映司」

「何ですか？」

「あなた、あの姿で本気を出せば、私なんて簡単に殺せたでしょう？何故そうしなかったの？」

「あなたを殺したらフェイトちゃんが悲しむからです」

映司は何の迷いもなく、即答する

「・・・」

そんな、真っ直ぐな映司の言葉を聞いたプレシアは顔を俯かせる

「映司・・・」

「今度は何ですか？」

「・・・私のやって来た事は・・・間違っていたのかしら・・・？」

「・・・」

俯いたままプレシアは映司に訊ねた

しかし、その問いに映司は答えなかった

「もし、間違っていたのなら・・・これから私は・・・どうすればいいの・・・？」

「・・・さあ？そんなの、わかりませんよ。あたなが答えを見つけない限りね」

映司はゆっくりと優しい口調で答えた

部屋に辿り着いたアंकと映司はプレシアをベッドに寝かせる

「行くぞ、映司」

そう言って、アंकは部屋をさっさと出て行った

「・・・プレシアさん」

しかし、映司は扉の前で振り向き、プレシアを見た

「・・・なに？」

「これからどうすればいいとか、未来の事なんて誰にもわかりません」

「・・・」

「明日はいつだって白紙フランクなんです。自分の事は自分自身で決めるしかないんですよ」

「・・・この世に確かなものなんて無いと言いたいのか？」

プレシアは皮肉な笑みを浮かべて映司の顔を見る

「いいえ、この世に確かなものはありますよ」

「・・・それは、何？」

「あなたが、フェイトちゃんとアリシアちゃんのお母さんだって事です」

「ッ!?!」

「それじゃ」

それだけ言っで、映司は部屋から出て行つた

「……アリシア……私は……間違っていたの……？」

プレシアの手が目から零れた涙で濡れる

そして、プレシアの口から1人の少女の名前が零れた

「……フェイト……」

その声には、確かに『愛情』が込められていた

映司とアंकは廊下を歩いてフェイト達がいる部屋に向かっていた

「アंक、お前この建物に詳しいよな。そんなに迷ったのか？」

「そんな訳あるか。案内人がいたんだよ」

そう言つて、アंकはセルメダルでもコアメダルでもないメダルを  
映司に見せた

「何だそのメダル？初めて見るけど」

それは黒で、人が描かれたメダルだった

「コイツは『ソウルメダル』。こういうモノかは、時期にわかる」

そう言つて、アंकはメダルを仕舞う

「ふゝん。じゃあ、楽しみにしてるよ」

それから、しばらく歩き、2人はフェイト達がいる部屋に入った

「映司！アंक！」

入つて来た2人に気付き、アルフが駆け寄つて来る

「大丈夫だったかい！？怪我は！？何処か痛い所はないかい！？」

アルフは映司の身体をぺたぺたと触り、傷がないか調べながら訊ねた

「うん、大丈夫だよ。ありがとう、アルフちゃん」

心配してくれたアルフに映司は笑ってお礼を言った

「それより、フェイトちゃんは？」

映司はベッドで眠っているフェイトを見る

「怪我は治癒魔法で治したから、もう大丈夫。落ち着いて眠ってるよ」

アルフはフェイトの寝顔を見ながら映司に教える

「映司が来てくれてなかったら、もつと酷い事になってたよ」

「そつか・・・」

映司はベッドに近付いて眠っているフェイトの手に優しく触れた

「ん・・・」

すると、眠っていたフェイトが目を覚ました

「フェイト!」

アルフが目尻に涙を溜めて、フェイトの名前を呼んだ

「・・・アルフ・・・映司・・・アंकも・・・」

フェイトは部屋の中を見渡して、3人の姿を確認した

「大丈夫。俺達が傍にいるから、もう少し眠っても大丈夫だよ」

「・・・うん」

映司の言葉に頷くと、フェイトはもう一度目を閉じた

「・・・今度は、もっと早く駆け付けるから。約束する」

映司は眠るフェイトの手を握り締めて約束するのだった

『時の庭園』とは違う次元空間にその艦は航行していた

次元空間航行艦船『アースラ』

時空管理局御用達の艦である

艦長であり、時空管理局提督である『リンディ・ハラウン』はモニタールームへと向かっていた

「みんな、どう？今回の航行は順調？」

モニタールームに入ったリンディは任務中の数名のスタッフに近況を訊ねた

スタッフは皆、リンディに視線を向ける

「はい。現在第3船足にて航行中です」

「目標次元到達には今から凡そ160ペクサ後に到達予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが2組の探索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

「欲望の王、オーズだったかしら？彼はどう？」

リンディはオーズについて訊ねる

「オーズについても、特に目立った動きはありません。恐らく、探索者と共に動いていると思われます」

「そう、わかったわ」

艦長席に座りながらリンディはオペレーター達の報告を聞き、今後の対策を練ろうとする

「失礼します。リンディ艦長」

少女が紅茶を淹れたカップを持って、リンディの前に置いた

「ありがとね、エイミィ。小規模とはいえ次元震の発生は・・・ちよっと厄介ね」

リンディは紅茶を眺めながらも真剣な表情で今後を語る

「それに、正確なデータは取れなかったけど、強大な力を持つ男までいる・・・」

オーズの『ガタキリバコンボ』を使った時のエネルギーを思い出しながらリンディは呟く

「危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと・・・ね？クロノ」

リンディは全身黒づくめの少年に声をかける

クロノと呼ばれた少年は自信に満ちた瞳を持って艦長席へと振り向く

「大丈夫。わかってますよ、艦長」

1枚の銀色のカードを持って、自信を持って答えた

「僕はそのためにいるのですから」

そうクロノはリンディに力強く言った

アースラのとある一室

そこには、様々な精密機械があり、沢山の『缶』が並べられ、何故かセルメダルまであった

そして、その部屋にはメガネを掛け、人形を肩に乗せた男がいた

彼の名は『真木清人』

管理局からは疎まれているが魔法生体工学の天才科学者である

「オーズ、君はどんな素晴らしい終末を齎してくれるのですか？」

男はモニターに映っているオーズを見て呟いた

「ドクター！ちょっと！ドクター！いるんでしょ！ドクター！！」

そんなシリアスな空気を壊すように、扉が強く叩かれる

「そんなに強く叩かなくても開いていますよ、『伊達君』」

真木がそう言うと、1人の男が部屋に入ってきた

彼の名は『伊達明』

アースラの医務室にいる『戦う医者』である

その手には、何故かコンロとお鍋がある

「それで、何の用ですか？伊達君」

真木は伊達を見ずに、まるで人形と話しているかの様に話す

「決まってるじゃない、アレだよアレ」

伊達は机の上にお鍋を置いて、コンロに火を付け、中であつたおでんを煮込みながら真木に催促する

「・・・アレですか、バスターの方はもう完成して使用も可能ですが、ドライバーの方はまだ調整が必要です。『Cannon・Leg・Arm・Wing・System』の起動時間を縮めなければ戦闘に不備が生じるでしょう」

そう言つて、真木は緑のラインが入った銃を見せ、まだ機械に繋がれているベルトを指差して言った

「おお！流石ドクター！これだけでも十分だよ！『CLAWS』の調整も頼んだよ。ドクター」

伊達は銃を受け取り、掲げるようにして見て、真木に言った

「でも、エネルギーの問題はどうやって解決したわけ？」

「メダルです」

「え？なに？メダル？てか、話す時はこっち見ようよ、ね？」

そう言つて、伊達は真木の頭を回させようとする

「メダルはメダルでも、ただのメダルでは・・・離しなさい！」

「嫌つつつの！」

「離しなさい！」

伊達に頭を捕まれながらも抵抗する真木

「こっち見ろつての！てかこの人形さ、何でこんなに怖いのか？ちょ

つとー!」

そう言っつて、伊達は人形『キヨちゃん』に触ろうとした

「やあーめえーろおー!はあーなあーせえー!」

真木は伊達に触らせまいと抵抗するが、伊達も触ろうとする

そつもみやつている内に、キヨちゃんが空を舞った

そして、向かう先は――

バシャーン!

「NO――!――!――!」

キヨちゃんはグツグツと煮え滾るおでんの中にダイブしてしまった

「あつっ!あつっ!あつ、あつっ!」

真木は懸命にキヨちゃんを助けようとするが、おでんが熱過ぎて、助ける事が出来ない

「あーあー、もったいない・・・卵卵」

「やあーめえーろおー!!」

伊達はキヨちゃんの頭を卵と間違えて摘まもうとするが、真木によつて阻まれた

そこに、1人の女性が入って来た

「・・・はあ、またですか・・・」

女性は呆れた様に伊達と真木を見て溜息をついた

こんな、頼りになる凸凹コンビがアースラに乗っていた

## 第7話『母と怒りと秘密』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第8話『管理局とトラと灼熱コンボ』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第8話『管理局とトラと灼熱コンボ』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、映司とアंकはフェイト達に連れられて、時の庭園にやって来た

2つ、映司とアंकはプレシアと記録からフェイトの出生の秘密を知る

そして3つ、ジュエルシードがばら撒かれた世界に時空管理局が向かって来ていた

第8話『トラと管理局と灼熱コンボ』

映司達が時の庭園から帰って来て3日後

午後4：10

映司達4人はマンションの屋上に立っていた

「バルディツシュ、どう？」

フェイトは左手の手袋の甲にあるスタンバイフォームのバルディツシュに体調を訊ねる

「Recovery Complete」

「そう、頑張ったね。偉いよ」

フェイトは相棒に褒めの言葉を与えてから、小さく微笑む

「それで、フェイトちゃんは大丈夫なの？無理しない方がいいんじゃない？」

「ううん、3日も休んだから。もう大丈夫だよ」

フェイトは映司に大丈夫だと笑って言った

「感じるな、ジュエルシードだ。それにヤミーの気配もする」

アंकは夕陽に照らされた街を見て言う

「ヤミーはどうかしらないけど、ジュエルシードはあたしにもわかるよ」

「・・・もうすぐ発動するジュエルシードが、近くにある」

フェイトは夕陽の染まった街を見て呟いた

「ヤミーは・・・またシャルだ・・・」

「・・・またか」

映司はアंकの話を聞いて溜息をついた

午後5：05

市バスを降りた高町なのはは1人で家路へと向かおうとしていた

「なのは！」

その時、首にスタンバイモードのレイジングハートを巻きつけたユニノがなのはに駆け寄って来た

「レイジングハート、治ったんだね？よかったぁ・・・」

「Condition Green」

安堵の声を漏らすと、レイジングハートは自身を輝かして返事をした

「・・・また、一緒にがんばってくれる？」

なのははレイジングハートに確認するように訊ねる

「All right, My master」

なのはの問いに、レイジングハートは力強く答えた

「ありがとう。レイジングハート」

なのはは返答を聞いて、レイジングハートを両手で優しく包み込んだ

午後6：24

海鳴臨海公園

その林の中に、ジュエルシードはあった

ジュエルシードは激しく光り輝き始める

その光は最大限に輝き、光の柱を発生させた

ジュエルシードは宙に浮き出し、近辺の一本の木に埋まっていた

「ジュエルシード、発動したようだな」

それを一部始終見ている者がいた

「今回も欲望の王の力が見たいのだからあ・・・」

そう、黒いローブを着た男だ

「まあ、魔導師の小娘共が封印した後でもいいか」

男はそう言つと、一旦姿を消した

海鳴臨海公園に先に着いたのはなのはとユーノだった

「封時結界、展開！」

ユーノは現れた木の怪物を見て、結界の中に閉じ込めた

なのははバリアジャケットを展開し、レイジングハートを木の怪物に向けていた

枝がカマキリの手のようになっていて、木なのか蟪蛄なのかハツキリして欲しいところである

見方によってはブロッコリーにも見える、本当にコイツは何なのだろうか？

なのはが魔法を発動させようとした時、背後から無数の金の魔力弾が木の怪物に向かって行った

しかし、木の怪物はそれを全て障壁のようなものを展開して、すべて防いだ

「わぁお、生意気にバリアまで張るのかい」

獣姿のアルフが怪木の予想外の能力の高さに驚いた

「うん。今までのより強いね」

海鳴臨海公園にはなのは達だけでなく、フェイト達もいた

木の怪物に向かって無数の魔力弾を放ったのはフェイトだった

バルディッシュを木の怪物に向けており、電灯の上に立っていた

「それに、あの子もいる」

フェイトはなのはの姿を確認して呟いた

「・・・なあ、アंक。あれってブロッコリー？」

フェイト達の傍にいた映司はアंकに木の怪物を見て訊ねた

「・・・木だろ」

「いやでも、手が螳螂みたいだぞ？螳螂なのか？木なのか？ブロッコリーなのか？」

「俺が知るか！ブロッコリーでない事は確かだ！！」

映司とアंकは木の怪物を見て、何なのかわからなかった

木の怪物はコンクリートの地面を抉って根を鞭のようにしならせ、  
なのは達を襲った

「ユーノ君、逃げて！」

近くにいたユーノにこの場から離れるように促す

ユーノはなのはの指示に従い、茂みの中へと避難した

「レイジングハート！」

[ F l i e r   F i n ]

なのはは根を避ける為に、空に舞い上がった

「飛んで！レイジングハート！もっと高く！！」

「All Right」

なのはは木の怪物の攻撃が届かない所まで飛び上がる

フェイトはバルディッシュを天に掲げてから振り下ろす

空中に場を移したなのはは怪木にレイジングハートを向ける

「Shooting Mode」

レイジングハートをデバイスモードからシューティングモードへと変形させた

「行くよ！レイジングハート！」

そう言って、なのははレイジングハートを木の怪物に向けた

「アークセイバー、いくよバルディッシュ！」

「Arc saber」

バルディッシュから金の鎌刃が出現した

「はあ！！！」

フェイトは大きく振りかぶり、軽く跳躍して、サイズフォームのバルディッシュを振り下ろした

先端に形成した、金の魔力斬撃用の圧縮魔力の光刃を木の怪物に向かって発射する

光刃はクルクルと回転しながら木の怪物の根を斬り裂いて行く

そして、中枢に辿り着き、バリアに衝突したが打ち破って木の怪物にダメージを与えた

バリアを破られ、木の怪物が初めて怯んだ

それを空中にいるのはは見逃さなかった

レイジングハートの先端に桜色の光が集束されていく

そして、レイジングハートの先端と後尾には桜色の円が展開される

「撃ち抜いて！ディバイン！！」

「buster」

集束された魔力をレイジングハートは一気に撃ち出した

桜色の閃光は一直線に、木の怪物を覆っているバリアに衝突する

ディバインバスターの重圧に耐え切れなくなったのか木の怪物が態勢を低くし、苦しみだす

アークセイバーを放ったフェイトは空中には場所を移さずに、地上にいた

左手を前に出し、右、左、下、前と手を動かして小さな黄金の魔法陣を展開させる

「貫け！轟雷！！」

そう言つてフェイトは前に展開されている魔法陣をバルディッシュで突く

「Thunder Smasher」

バルディッシュが言うと、木の怪物に向かって金の閃光が一直線に向かって行つた

そして、木の怪物の正面に直撃し、木の怪物は懸命にバリアで防ごうとした

上からのディバインバスターと正面からのサンダースマッシャー

等々バリアは耐えられなくなり、ガラスのように砕け散り、木の怪物は押し潰される様にして消滅した

「・・・死因、圧死」

アंकがボソツと呟いた

一筋の光が走り、そこからジュエルシールドが出現し、宙に浮いていた

「Sealing Mode set up」

「Sealing Form set up」

レイジングハートとバルディッシュがそれぞれ形態を変える

「ジュエルシールドシリアル?!?!」

なのはとフェイトが同じタイミングで叫ぶ

「封印!?!」

両デバイスも同タイミングで実行する

だが、辺り一面にまばゆいまでの光が発生した

光が収まり、その場にいた者たちの視界が回復するとそこにはジュエルシールドがまだ宙に浮いていた

フェイトはゆっくりとなのはがいる空中へと場を移す

「ジュエルシールドには衝撃を与えてはいけないみたいだ」

フェイトは独り言のように言った

「うん、この前みたいなことになったら、私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも可哀想だもんね。それに、暴走したら映司さんに迷惑が掛かっちゃう」

なのはの言葉にフェイトの心は少し揺れた

「だけど、譲れないんだ。母さんの為にも・・・」

決意を表すようにバルディッシュを構える

「Device Form」

バルディッシュはデバイスフォームに変形する

「じゃあ、今回も勝負だね」

「Device Mode」

レイジングハートもデバイスモードに変形する

「行くよ！フェイトちゃん！」

「負けない！」

二人の魔導師が一気に加速して、間合いを詰めて互いのデバイスを振りかぶり、振り下ろそうとした

絶対にぶつかり、何かしらの衝撃が起こると互いと思った

しかし、その衝撃は来ず、2人は突然の事に驚いた

2人の目の前には全身黒くめの少年がいた

なのはのレイジングハートを素手で受け止め、フェイトのバルディッシュを黒一色の杖『U2S』で受けている

「ストップだ！」

少年はそう叫ぶ

「ここでの戦闘は危険すぎる。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

クロノはなのはとフェイトを一瞥してから事情を聴取すると言った

「・・・何だ？あの空気が読めない奴は？」

クロノを見てアंकはイラついた顔をして言う

「俺知ってる。KYって言うんだよな」

映司は起きた事を呆然と見ていた

そして、次の瞬間誰もが予想しなかった事が起こった

「貰うぞ、ジュエルシード」

そう言ってジュエルシードを奪った者がいたのだ

「え？」

「なに？」

「何だ？」

3人はジュエルシードが消えたのを見て奪った者を目で追う

犯人は映司とアングの前に降り立った

それは、黒いローブを着た男だった

「お前！何者だ！！」

アंकは男を見て右手をグリード化させて訊ねる

「ふん、満足したグリードか。それは、グリードと呼べるのか？」

「お前、俺達の事を知ってるのか！？」

男が鼻で笑い言々と映司が驚いた様に言う

「いいや、全ては知らないさ。だから、これから教えてくれ」

男はそう言つて、水色の玉を取り出す

「ヤミーの卵！？」

「さあ、お前の力を見せてくれ！」

男はヤミーの卵にジュエルシードをねじ込んだ

そして、輝くヤミの卵を空高く放り投げた

すると、ヤミの卵は瞬く間に、その数を増やしていった

「暴走した時程ではないが、十分ヤミは造り出せる」

男はヤミの卵が生まれるのを見て、満足したように言い、姿を消した

「待て!!」

アंकは男を追おうとしたが、既に男は何処にもいなかった

「チツ、逃げられたか・・・」

アंकは舌打ちをして、空に浮かんでいるヤミの卵を見た

次の瞬間、卵が孵り、大量のサメヤミが生まれた

「前のより大きい!?!」

フェイトはサメヤミーを見て驚く

「また怪物が生まれた!？」

クロノもヤミーの事は知っていたようだが、その数に驚いていた

「映司!片付けろ!!」

「うん!」

アंकからメダルを受け取るとドライバーを装着し、メダルを入れてスキャナーを滑らせた

「変身!」

キーン!キーン!キイインッ!

《TAKA!》《TORA!》《BATT!》

《TA・TO・BA!TATOBA!TA・TO・BA!》

「はぁ！！」

映司はオーズ・タトバコンボになるとサメヤミーに向かって走り出した

サメヤミーもオーズに気付くと襲い掛かっていく

「セイヤッ！！」

オーズはトラクローを展開させて、サメヤミーを切り裂く

「はっ！でやっ！セイヤッ！！」

すると、他のサメヤミーもオーズに気付き、襲い掛かって来る

「はっ！よっ！うわっ！はぁっ！セイヤッ！！」

オーズはトラクローを巧みに使い、サメヤミーの放つ水弾を避け、攻撃して行く

「・・・私も戦わなきゃ・・・約束したんだ」

空でその様子を見ていたフェイトはそう呟いてバルディッシュを構える

「フェイトちゃん、私も手伝っていい？」

そんなフェイトを見て、なのはは訊ねる

「・・・うん」

フェイトは頷くと、オーズが戦っている場所に接近した

なのはもフェイトに続いた

「・・・何が何だかわからないが、倒さないといけないのはわかるな」

クロノもフェイトとなのはに続いた

「レイジングハート、やるよ!」

「All Right・Shooting mode」

なのはに答え、レイジングハートはシューティングモードに変形する

「デイバイインバスター!」

「Divine buster」

なのははサメヤミーに向かってデイバイインバスターを放った

「キシャー! ! ! ! !」

サメヤミーはデイバイインバスターを受け、呆気なくセルメダルをばら撒いて爆発した

「やった!」

なのははサメヤミーを1体倒して油断してしまった

「キシャー！ー！！」

「ッ！？」

なのは後ろに地面から飛び出したサメヤミーが現れ、口から水弾を吐き出そうとする

「どいてー！」

「Thunder Rage」

なのはに襲い掛かろうとしたサメヤミーは金の閃光に吹き飛ばされた

「フェイトちゃん！」

なのはをサメヤミーから救ったのはフェイトだった

「Scythe Form」

バルディッシュはサイズフォームに変形する

「アークセイバー！いくよ、バルディッシュ！」

「A r c s a b e r」

フェイトはサイズフォームの先端に形成した、魔力斬撃用の圧縮魔力の光刃を発射する

サメヤミーは回転しながら飛んで来たアークセイバーに真っ二つに切り裂かれ、爆発した

「ありがとう！フェイトちゃん！」

「・・・油断しないで」

フェイトはお礼を言うのはに冷静に言う

「フェイトちゃんもだよ」

「え？」

目の前にオーズが現れたかと思うと、後ろで爆発が起きた

どうやら、フェイトの後ろにサメヤミーが迫っていて、オーズがそれを倒したようだ

「ヤミーの攻撃は痛いから気をつけてね」

「うん」「はい」

「お前もだ、この馬鹿映司！」

「油断するんじゃないよ！」

声が聞こえたかと思うと、オーズの後ろ水蒸気が発生し、サメヤミーが1体爆発した

アंकがサメヤミーの放った水弾を火炎弾で蒸発させて、アルフと一緒にサメヤミーに攻撃を加え、倒したのだ

「おお、アंक！アルフちゃん！ありがとう」

「話してる暇があったら身体動かせ！」

アंकはオーズにアルフはフェイトにそれぞれサメヤミーを殴り飛ばしながら言う

「わ、わかってる！行くよ、2人共！」

「うん！」「はい！」

そう言って、オーズが目の前にいるサメヤミーに向かおうとした時

「ステインガーレイ！」

「Stinger Ray」

青い光がサメヤミーを貫き、爆発させた

「君は・・・黒田君だっけ？」

「クロノだ！ちゃんと覚えてくれ！」

「あ、ごめんなさい」

オーズは怒ったクロノに頭を下げた

「・・・まあいい。コイツ等を倒さない限り、ジュエルシードは回収出来ないんだな？」

「え？あ、うん。そうだよ」

「じゃあ、僕も手を貸そう」

クロノはそう言ってデバイスを構えた

「いや、別にいい。もう十分手は足りて——」

「ああ！ああ！ありがとう！助かるよ！」

アंकがクロノにいらないうとしようとしたが、オーズがそれを遮った

「ユーノ君！結界の維持とサポート、頼りにしてるよ！」

オーズはクロノに話を戻さないようにユーノに手を振って言った

「はい！任せて下さい！」

ユーノはオーズの言葉に強く答えた

「じゃあ、そろそろ片付けようか」

オーズはそう言ってサメヤミーに向かって走り出した

オーズとアंक、なのは、フェイト、アルフ、クロノが力を合わせてサメヤミーを倒し終えるのにそう時間は掛からないはずだった

しかし、サメヤミーにはまだ能力があった

周囲の空間を一時的に液状化させる能力で地中も水中と同様に潜水して高速移動することが可能だったのだ

「くっそ！ウロチヨロしやがって！！」

アंकは火炎弾を放つがごとく外してしまっている

それは、他の魔導師達も同じだった

「チツ、映司！コアをコイツに変えろ！」

アंकはオーズにメダルを投げ渡す

「え？あ、うん！わかった！よっ」

オーズは向かって来ていたサメヤミーを蹴り飛ばしてメダルを受け取る

『タカメダル』を『クワガタメダル』に交換し、スキヤナーを滑らせた

キーン！キーン！キイーンッ！

《KUWAGATA!》《TORA!》《BATT!》

ガトラバに変わったオーズはクワガタヘッドから雷を放ち、サメヤミーを3体倒した

「次！」

オーズは他にもいるサメヤミーを見る

サメヤミーは敵わないと判断したのか地面に潜り、一斉に逃げ出した

「えっ！？ちよっ！逃げるな！！」

オーズは追おうとするが、サメヤミーは高い起動性能を持っていた

バッタレッグのオーズでは追いつけないほどの速さで移動していた

「映司！追え！！」

そう言って、アंकはまたオーズにメダルを投げた

「おお！チーター！」

オーズは『バツタメダル』を『チーターメダル』に変えてスキヤナ  
ーを滑らせた

キン！キン！キイインッ！

《KUWAGATA!》《TORA!》《CHEETAH!》

オーズはガトラバからガトラーターに変わり、猛スピードでサ  
メヤミーを追った

「オーズってあんなに速く動けたのかい!？」

「凄い、私より速いかも・・・」

「初めてみる形態だ」

「他にも沢山メダルってあるのかな？」

サメヤミーを追うオーズを見てアルフとフェイトは驚いた

ユーノとなのは他にもあるのではと考えていた

「はあああ……!!」

オーズはチーターレグで走りながら、クワガタヘッドで雷を地面に放つ

しかし、サメヤミーは機動力を活かして雷を避けて逃げる

「くっそ……!! 待て!!」

オーズは懸命にサメヤミーを追った

その時、オーズの横をバイクが追い越した

オーズを通り越してしまった事に気付いたドライバーはスピードを緩めてオーズの横につける

「おい！お前がオーズだな？」

「え？あ、はい！どちら様ですか！？」

走りながら質問を返すオーズという、ちょっとシニールな絵が生まれている

「俺は伊達明！よろしく！」

「あ、火野映司です！初めまして！」

伊達が名前を名乗ったので、オーズも名前を名乗った

「これ！ドクターからプレゼント！これでアイツ等追ってくれてってさー！」

伊達はバイクを指差して言い、黄色い缶を取り出す

《TORA CAN》

「ガウッ！」

「おお！トラだ！トラ！」

伊達がタブレットを引くと缶が変形しトラに変わった

「じゃあ！後は頼んだぞ！火野！」

「はい！ありがとうございます！」

オーズがそう言つと伊達は転送魔法で海鳴臨海公園に戻った

「よっと！それじゃあ、行くか！」

「ガウッ！」

オーズがスロットルを捻るとバイク『ライドベンドァー』はスピードを上げた

サメヤミーとの距離をどんどん詰めて行く

サメヤミーは来ると言わんばかりに水弾を放ちオーズの邪魔をする

「うわっ！？危なっ！！」

オーズはそれを何とか避けながら追いかけて行く

「おい！映司！何だそのバイク！！」

「お！アंक！いいだろ？貰ったんだ！！」

後ろから飛んで来たアंकにそう言ってスピードを上げる

しかし、それがいけなかった

サメヤミーはそれを見て急に方向転換し、オーズの下を通り過ぎて行ってしまった

「ええ！？嘘だろ！？」

オーズは慌ててブレーキし、一旦止まってから方向転換する

「ガウッ！」

「ん？どうしたんだ？トラ君」

トラカンドロイドがライドベンダーの前に降り、缶に戻って巨大化した

すると、ライドベンダーの前輪が左右に展開し、後輪と一体化することです輪で後輪部を構成する

スペースの空いたフロント部にトラカンドロイドが合体して前輪となり、鋭い爪状のフレームが伸びる

そして、左右に分割したフロントカウルの間にはトラカンドロイドの前足部分が詰め込まれ、虎の顔を模した形状となった

ライドベンダーはトラカンドロイドと合体し、『トライドベンダー』  
に変わった

「おおっ！！凄い！！」

「ガオオ！！！！」

トライドベンダーは咆哮を上げて暴れだす

「うおわっ！？」

オーズはいきなりの事に驚きながらも振り落とされてなるものかと  
しがみ付く

「おい、映司！大丈夫なのか！？」

「え、あ、うん。大丈夫だ。でも、どうしたんだ急に！？」

オーズは暴れるトライドベンダーを必死に宥め様とする

《・・・聞こえますか？火野君》

その時、トライドベンダーの通信機に誰かの声が聞こえて来た

「えっ？あ、はい！聞こえてます！誰ですか？」

《伊達君の説明不足で申し訳ない。『ラトラーターコンボ』ならば、トライドベンダーを操れるでしょう》

「えっ！？でも、コンボはちょっとおおお！！」

オーズはブンブンと振り落とされそうになりながら誰かもわからな  
い相手に言う

《心配ありません。コンボの余剰エネルギーを吸収し自らの動力へ  
と変換することで、機体は爆発的な走行能力・パワーを発揮します。  
そして、安定したコンボ形態の運用を可能とします》

「そ、そうですか！アंक！ら、ライオンのメダルだ！！」

「あ？」

「いいから！早く！！」

「お、おう」

アंकは『ライオンメダル』をオーズに投げる

オーズはそれを受け取り、『クワガタメダル』と『ライオンメダル』に変え、スキヤナーを滑らせた

キーン！キーン！キイインツ！

《LION！》《TORA！》《CHEETAH！》

《L・TA・L・TA！LTORA-TAH！！》

いつもと違う歌が流れ、光が収まった時、そこにいたオーズの姿は変っていた

胸部の中心にあるサークルに刻まれた『<sup>ライオン</sup>獅子』『<sup>トラ</sup>虎』『<sup>チーター</sup>獵豹』

『獅子の鬣』が備わった黄の顔

『虎の爪』が装備された黄の腕

『獵豹の脚』が備わった黄の脚

全身が黄に揃った『ラトラーターコンボ』にオーズは変わった

オーズが『ラトラーターコンボ』になったと同時にトライドベンダーも大人しくなる

「行くぞ！トラ君！」

「ガオオ！！！！！」

トライドベンダーは咆哮を上げると脅威的なスピードで走り出した

「おおっ！！速いい！！！」

「待て！映司！速過ぎだ！！！」

オーズとアंकはただただ驚いていた

場所は戻って海鳴臨海公園

オーズが取り逃がしてしまったサメヤミーが戻って来てしまっていた

「あれって、映司さんが追っていったヤミーじゃ!？」

「そんな、映司は!？」

「フェイト! あんた! 油断しちゃダメだよ!!」

戻って来たサメヤミーを見てフェイトとなのはは気を逸らしてしまった  
った

アルフが叫んだが、既に後から生まれた数匹のサメヤミーの攻撃を  
仕掛けていた

「ちょっと待ったあ！！」

しかし、何処からかメダル状のエネルギー弾が飛んで来て途中でサメヤミーは撃ち落された

「えっ？な、何？」

「あなたは・・・」

フェイトとなのははエネルギー弾を撃った主を見る

そこに立っていたのは、タンクを肩から担いで、白衣を着た男性だった

「さあて、火野が戻って来るまで時間稼ぎますか」

そう言って、男性・伊達明はタンクを置いて『バースバスター』を構えた

そして、地面から出ているサメヤミーを撃ち抜いていく

「伊達さん！」

伊達の姿を見つけたクロノが名を呼ぶ

「おお！黒坊！大丈夫か？」

伊達はサメヤミを撃ちながらクロノを黒坊と呼ぶ

「クロノです！いい加減覚えてください！！」

「わかってるって！危ないぞ！黒坊！！」

「キシヤアア！！」

そう言つて、クロノの後ろに迫っていたサメヤミを撃ち抜く

「あ、ありがとうございます・・・」

クロノは何か納得出来なさそうな顔をして伊達にお礼を言った

「気にすんな！よつと」

伊達は後ろから来ていたサメヤミーの攻撃を避けてバースバスターで撃つ

「キシヤア！？」

そして、爆発したサメヤミーから出たメダルで補充し、またサメヤミーを撃つて行く

その時、何か獣のような咆哮が聞こえた

「おつ、来たな」

伊達は咆哮を聞いて笑い、そう言うバースバスターの銃口を上げた

「じゃあ、俺帰るから。あとよろしく！」

伊達はクロノにそう言うと言つと転移魔法でアースラに戻った

「な、何が来るんだ？」

クロノは咆哮が聞こえた方を見た

そこには、『ラトラーターコンボ』になったオーズがトラのようなバイクに乗って走って来ていた

上空には翼を広げたアंकもいる

「え、映司！無事だったんだ！！」

「映司さん！！」

オーズの姿を見てフェイトとなのはは安心する

キーン！キーン！キイインツ！

《Scanning Charge！》

「はあああ・・・」

オーズはもう一度メダルをスキャンし、そのまま大量のサメヤミーに向かって行く

すると、サメヤミーに向かって突進するトライドベンダーとオーズの先に黄の3つのリングが発生した

「セイヤアアアア！！！！」

地上に出ていたサメヤミーに全身からライオディアスを放って動きを封じ、トライドベンダーの前輪から伸びた鋭い爪状のフレームとオーズの強化されたトラクローの計4つの爪でX字に轢き裂きサメヤミーを数十匹倒した

ラトラーターの必殺技『ガツシユクロス（トライドベンダーver）』である

「おらっ！！！」

そして、後ろから攻撃しようとしていた数匹のサメヤミーをアंकは火炎弾で撃ち抜き倒した

「決めるぞ！トラ君！！！」

「ガオオ！」

逃げようとするサメヤミーを追い抜き、方向転換して止まる

「ガオオオオオ！！！！！」

トライドベンダーが咆哮と共にエネルギー波を放ち、地面の中を泳いでいたサメヤミーを全て引き摺り出した

「はぁぁぁ！！！」

サメヤミーと後ろに浮かんでいるヤミーの卵に向かって前輪を上げ、そこからメダル状の巨大なエネルギー弾を放ち、全て撃ち抜いた

サメヤミーとヤミーの卵は空中で爆発し、大量のセルメダルをばら撒いた

「よっしや！！よおっし！！よしよし！！！」

オーズはガッツポーズをした後、トライドベンダーを撫でた

オーズはトライドベンダーをライドベンダーに戻した後、変身を解除した

「ふう・・・もう暴れるなよ？」

「ガウウ！」

小さな姿に戻ったトラカンに映司は一息つきながら言った

「映司！」

そんな映司にフェイトが慌てた様子で駆け寄って来た

「あ、フェイトちゃん。大丈夫？怪我は無い？」

映司は駆け寄って来たフェイトに笑いながら言う

「そんな事より！今のってコンボだよね！？」

「え？あ、うん。『ラトラーターコンボ』だよ」

「か、身体は大丈夫なの！？」

フェイトは映司の身体を擦り調べながら訊く

「トラ君のお陰で全然疲れなかったよ。ありがとね、トラ君」

「ガウウ！！」

手の平の上でトラカンが嬉しそうに吠えた

そんな映司とフェイトを見てなのは、ユーノ、クロノは近付こうとしたその時だった

突如、3人に向かってオレンジ色の魔力弾と火炎弾が飛んで来た

火炎弾は正確にクロノを捉えていた

クロノはそれをバリアを張って火炎弾を防いだ

「フェイト！映司！退却するよ！！」

「早くしろ！！」

アルフの一声でその場にいた面々は今この場で何をすべきなのかを  
思い出す

アルフはもう数発、魔力光を放つ

フェイトはタイミングを見計らって、宙に浮いているジュエルシードを回収するために浮揚した

アルフの放った魔力光が地に激突して、砂煙が立ち始める

砂煙を回避するために、なのは、ユーノ、クロノはその場から離れた

フェイトはそのまま左手を伸ばしてジュエルシードを取ろうとした

その時、青色の数発の魔力弾が砂煙を切り裂き、フェイトに向かっていった

しかし、その魔力弾はアंकが放った火炎弾と衝突し爆発した

「きゃっ！」

フェイトは魔力弾と火炎弾が衝突した衝撃波を受け、地面へ落ちていく

「フェイト！」

急いでアルフはフェイトの元へ向かう

地面にぶつかる前に、アルフはフェイトを背中で受け止めた

クロノは意識をフェイト達から火炎弾を放ったアंकとその隣に立つ映司に向けた

「何の真似だ！？」

2人に向かって叫びながらS2Uを構える

しかし、2人はクロノに何も答えない

「抵抗するなら対応の対応をするぞ！」

そう言いながらクロノは数発の魔力弾を銀時に向かって放った

アंकは魔力弾を避けながら一気にクロノに近づく

「あ、おい！アंक！？」

映司は止めようとしたが既に遅かった

アंकとクロノの距離はどんどん縮まってい

（こいつ！魔法を使っていないのに、なんて速さだ！？）

面には出さないが、クロノはアंकの身体能力に内心驚いていた

そもそもアंकは人間ではなく、グリードだ

普通の人間の身体能力など赤子同然である

クロノは再び魔力弾を放った

アंकは魔力弾を火炎弾で掻き消しながらクロノに近付いた

「なっ!？」

クロノは身を引こうとしたが、既にアंकが目の前まで来ていた

アंकはクロノが握っているS2Uを叩き落とし、首を掴んで持ち上げた

「ぐっ……は、離せ……」

クロノは苦しそうに首を掴んでいるアंकの手を振り解こうとしたが、無駄だった

その光景を見てその場にいる全員が驚いた

特に管理局や魔導師の事をよく知っているフェイトやアルフ、ユーノは驚愕を隠せなかった

「か、勝っちゃった・・・」

アルフは驚きのあまり、開いた口が塞がらなかった

（か、管理局の魔導師相手にアッサリ勝った！？）

アंकの実力は文字通り痛い程知っていたが、それでも驚いていた

「凄い・・・」

フェイトも驚いて、目を大きく見開いている

「・・・フェイト！アルフ！ジュエルシードを持って逃げろ！」

アंकはクロノの首を掴んだまま、フェイトとアルフに言った

その言葉を聞いて、2人は映司の顔を見る

2人の視線に気付くと、映司は笑って頷いた

それを見て、フェイトとアルフは迷いながらもその場を逃げ去った

「お、お前達は、どれだけ危険な事をやっているか・・・わかって  
いるのか!？」

クロノは苦しそうにしながらも、アंकや映司に向かって言う

「お前こそ誰に向かって口をきいてるか、わかってるのか?ああ?」

「ぐあっ!?!」

アंकが少し手に力を入れると、クロノは悲鳴を上げた

「アंक!その辺にしとけて!」

映司はクロノの悲鳴を聞いてアंकを止めに入る

「ふん」

アंकはクロノを地面に投げ捨てた

「ぐっ・・・げほっげほっ・・・」

クロノはむせながらも何とか立ち上がった

時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』

リンディは戦闘を全てモニターで把握していた

「戦闘行動は迅速に停止。ロストログアの回収は失敗。でも、よしとしましょう。火野映司君からいろいろと事情は聞けそうだしね」

そう言って、リンディは脇にあった機械を操作した

場所は戻って海鳴臨海公園

「なのはちゃん、ユーノ君、大丈夫？怪我は無い？」

映司はなのはとユーノに近付いて訊ねていた

「はい、大丈夫です！フェイトちゃんが助けてくれましたから！」

「僕も怪我はありません」

「そっか。怪我が無くて安心したよ」

映司は笑って2人に言うのだった

「おい、映司。奴等、時空管理局だ」

そんな和やかな雰囲気を出していると、アंकが映司に言った

「時空管理局？確かアंकが言ってた・・・警察みたいな感じの組織だっけ？」

映司は以前アंकが言っていた事を思い出すように言う

「ああ、似たようなもんだ。だが、奴等は気に入らない。気を許すなよ」

「・・・わかった」

映司がそう言ったと同時に4人の前にリンディが映った映像が現れた

《クロノ。お疲れ様》

「すみません。ロストログアを奪われ、片方を逃がしてしまいました」

《ううん・・・。まあ、大丈夫よ》

リンディは視線を映司達に向けた

《貴方達にはこれから私達の艦『アースラ』へ来てもらいます。色々聞きたいことがあるし、ね?》

口調は柔らかだったが、任意ではなく強制だと映司とアंकは感じた

「ハッ！悪いが俺達はお前等に聞きたい事なんて何一つ無い。行く気にはなれないなあ」

アंकは鼻で笑ってリンディに言った

「貴様ツ！艦長が下手に出ていれば!！」

《止めなさい、クロノ》

掴み掛かろうとしたクロノにリンディが制止する

「……すみません、艦長」

クロノは納得いかないといった顔をしていたが引き下がった

《申し訳ないけど、これは任意ではなく、強制なの。わかってくれるかしら?》

「おい、なのは。警察呼べ、誘拐犯がいますってな」

アंकはなのはにリンディを無視して言う

「・・・はあ、もういいよ、アंक。来いって言ってるんだし、行ってみればいいよ」

アंकとリンディのやり取りを見ていた映司は溜息をついてアंकに言った

「それに、伊達さんとあのメガネを掛けた人にもお礼を言わないと」

「・・・チツ、まあ、いいがな」

《話は決まったようね。クロノ、彼らを案内してくれるかしら?》

「了解しました。すぐに戻ります」

クロノが返事をする映像は消えた

そして、映司、アंक、なのは、ユーノ、クロノはアースラに転送された

第8話『管理局とトラと灼熱コンボ』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

**PV30000アクセス突破記念（前書き）**

いつの間にか30000アクセス越えていた

25000アクセスでやるって言ったのに・・・

## PV30000アクセス突破記念

映司「・・・」

アंक「・・・」

映司「・・・早かったな」

アंक「・・・ああ、予想外にな」

映司「25000アクセスでやるって言ってたのにな」

アंक「気付かない内に30000アクセス突破してたらしいな」

映司「・・・何する？」

アंक「・・・とりあえず・・・あの3人呼ぶぞ」

映司「・・・わかった」

レヴィ「P V 3 0 0 0 0 アクセス突破記念〜!!」

ディアーチエ「わあ〜!!」

シュテル「テンション高いですね、2人共」

レヴィ「だって凄い事なんでしょ? 3 0 0 0 0 0 0 !」

シュテル「レヴィ、0 が1個増えています」

レヴィ「あれ?」

ディアーチエ「3 0 0 0 0 アクセスだ、馬鹿者が」

レヴィ「あ〜! バカって言った! バカって言った方がバカなんだよ  
」

ディアーチェ「何だと！？掛け算の九の段も出来ない分際で！！」

レヴィ「映司とシュテるんに教えて貰ったからちゃんと言えるもん！」

ディアーチェ「ならば言ってみるがいい！」

レヴィ「くいちがく！くにじゅうはち！くさんにじゅうしち！くしさんじゅうろく！くしじゅう！くろく！じゅうし！くしちろくじゅうさん！くはしちじゅうに！くくはちじゅういち！！」

ディアーチェ「な、なん・・・だと・・・！？」

シュテル「お見事です、レヴィ」

レヴィ「えへへ」

ディアーチェ「くっ・・・今回は私の負けのようだ・・・」

シュテル「・・・ところで、映司とアंकは何処に行ったのですか？」

ディアーチエ「ん？そういえば、見ておらんな」

ガチャツ（扉が開く音）

3人「???」

映司「アंकくそっちちゃんと持てよ」

アंक「お前こそちゃんと舵を取れ！何回壁に激突したと思ってる  
！」

映司「待てって言うてるのにアंकがどんどん押すからだろ！」

シュテル「・・・え、映司？何をやっているんですか？」

レヴィ「何？そのホワイトボード？」

ディアーチエ「また何を始めるつもりだ？」

映司「ああ、3人共。ちょっと待ってね」

アंक「映司ッ！さっさと進め！！」

映司「では！早速始めたいと思います！」

シュテル「何をですか？」

映司「今回は、この小説の編ごとのキャッチコピーとコンボのランク付けをしたいと思います！」

バンッ！（机を叩く音）

レヴィ「キャッチコピー？」

アंक「例えば、原作の無印編なら『魔法少女、はじめました』だ」

シュテル「A・S編は確か『魔法少女、続けてます』でしたね」

ディアーチェ「StrikerS編は『魔法少女、育てます』だったな」

レヴィ「・・・誰か赤ちゃん産んだの？」

映司「違う違う。StrikerS編はなのはちゃん達が19歳になって教導官になったんだよ」

レヴィ「・・・なのは、先生になったの！？」

シュテル「未熟な教導官ですけどね」

ディアーチェ「巷では魔王と恐れられているな」

アंक「話を戻すぞ。この小説でもそういう宣伝文句みたいなのを考える」

レヴィ「はいはいはい！」

アंक「却下」

レヴィ「まだ何も言っていないよ!？」

アंक「どうせ碌な案じゃない」

レヴィ「聞くだけ聞いてみてよ!」

アंक「・・・言ってみろ」

レヴィ「『戦わなければ生き残れない!』」

アंक「却下。パクってんじゃないよ」

シュテル「バトルロイヤル・・・良いかもしれません・・・」

ディアーチェ「しゅ、シュテル？」

映司「まあ、無印編は簡単に『出逢いの物語り』でいいんじゃない?」

アंक「じゃあ、A・S編はどうする？」

映司「うーん・・・ちよつと小説のシナリオ見てみようか」

シュテル「いいのですか？ネタバレになるのでは・・・」

映司「大丈夫大丈夫！俺達が見るだけだから」

レヴィ「これだね！」

ディアーチェ「見てみるとしよう」

（A・S編のシナリオを視察中）

シュテル「・・・『犯した罪を忘れない』でいいのではないですか？」

レヴィ「『犯した罪を忘れない』？」

ディアーチエ「これを見る限り、A・S編は映司が過去に犯した罪が描かれているからな」

アंक「じゃあ、A・S編は『犯した罪を忘れない』で決まりだ」

映司「じゃあ次は、BATTLE OF ACES編だね。はいこれ、シナリオ」

〔BATTLE OF ACES編シナリオ視察中〕

ディアーチエ「我等が登場する物語りだな。ここは王である我に任せてみよ」

アंक「構わないが・・・大丈夫か？」

ディアーチエ「王である我に不可能はない！」

映司「じゃあ、どうぞー！」

ディアーチエ「BATTLE OF ACES編は『闇が齎す奇跡』

だ  
」

レヴィ「おおー！カッコイイー！！」

ディアーチェ「ふん！王である我としては当然の結果だ」

アंक「中二病みたいだな」

ディアーチェ「何だと！？」

映司「まあまあ！次はStrikers編！この物語りにはア  
イツが登場するね」

シュテル「アイツ？」

映司「はいこれ、Strikers編のシナリオ」

（Strikers編のシナリオ視察中）

レヴィ「……ッ！はい！はいはい！」

映司「じゃあ、今回はレヴィに聞いてみようか」

アंक「パクるなよ」

レヴィ「わかってるよ！」

シュテル「レヴィ、何ですか？教えてください」

レヴィ「うん！Strikers編は『本当の英雄と優しい悪魔』  
！」

映司「……」

アंक「……」

シュテル「……」

ディアーチェ「……」

レヴィ「あ、あれ？どうしたの？みんな」

アंक「いや、もっと幼稚な事言つと思つてたんでな。驚いただけだ」

シュテル「ディアーチエ・・・」

ディアーチエ「きよ、今日は調子が悪いだけだ！わ、我だってあれくらい・・・」

映司「大丈夫だよ、ディアーチエ。いつも頼りにしてる」

ディアーチエ「・・・うん」

シュテル「では、次はサウンドステージ<sup>イクス</sup>編です。これがシナリオですね」

「サウンドステージ<sup>イクス</sup>編視察中」

映司「これは彼が主役の物語りだね」

アंक「アイツは主役をやってもおかしくないからな」

シュテル「じゃあ、映司が決めて下さい」

映司「そうだなあ・・・『生きる意味を知る』かな？」

シュテル「彼がイクスヴェリアに贈った言葉が心に残りました」

レヴィ「やっぱり、似てるよね」

ディアーチエ「そうだな」

映司「え？なに？」

アंक「何でもない。次はGEARS OF DESTINY編だ」

〈GEARS OF DESTINY編視察中〉

レヴィ「・・・やっぱり、仮面ライダーはカッコイイなあ」

シュテル「もうこれは決まっていますね」

アंक「ああ、そうだな」

ディアーチェ「うむ、私もそう思うぞ」

映司「じゃあ、シュテル。発表して？」

シュテル「GEARS OF DESTINY編は『時でも運命でも変えられない絆』です」

レヴィ「オーズのファイナルフォームライドも登場！」

映司「ああ！？レヴィ！！」

映司「さて、次はオーズのコンボのランク付けだね」

シュテル「コンボというと『タトバ』『ガタキリバ』『ラトラータ  
ー』『サゴーズ』『シャウタ』」

ディアーチェ「それと、これから登場予定の『タジャドル』『ブラ  
カワニ』『???』『タマシー』『プトティラ』『タトバリング』  
か？」

レヴィ「あと、MOVIE大戦MEGA MAXに出た『スーパ  
ー  
タトバコンボ』だね？」

映司「うん。オーズがどれくらい強いのか魔導師ランクで表してみ  
ようと思うんだ」

レヴィ「こうして見ると、オーズってたくさんコンボがあるよね」

アंक「どれもこれも強力でとんでもない力だなあ」

映司「まあね。じゃあパッと決めちゃおう！」

くシンキングタイム開始く

映司「これがこうだから・・・」

アंक「いや、そっちはこうだろう」

シュテル「え？でも、それでは・・・」

映司「一番強いのはこれで確定なんだよな？」

アंक「ああ、予告で頂点とかほざいてたからな」

シュテル「アंक、作者さんに失礼なのは・・・」

アंक「いいんだよ、どうせ大した奴じゃない」

映司「おいおい・・・」

アंक「話を戻すぞ。このコンボは暴走しない事を前提に考えるか？」

映司「そつだな。完全に使いこなせる体で話を進めよう」

レヴィ「僕はタジャドルが好きー！」

ディアーチエ「誰も聞いておらん！」

レヴィ「ぶー！王様の意地悪！意地悪王！！」

ディアーチエ「なんだと！？もう一度言ってみろー！」

映司「2人共、喧嘩はそれくらいにして。ほら、一緒に考えよう？」

ディアーチエ「・・・え、映司がそう言うなら・・・」

レヴィ「・・・僕も・・・」

シュテル「アंकはどう思いますか？」

アंक「やっぱり、これが一番だろう」

シュテル「ですよ。私もそう思います」

アंक「だが、問題はコイツ等だ。場所によっては……」

シュテル「戦う場所も考えなくてはいけませんね。難しいです」

映司「……何か、シュテルとアंकが凄い考えてる……」

レヴィ「僕達が入ったら怒られそう……」

ディアーチェ「もうあの2人に任せておいていいのではないか？」

映司「そうだね。邪魔しちや悪いし黙ってようか」

レヴィ「2人共怒ると怖いもんね」

「シンキングタイム終了」

映司「では！発表して下さい！」

シュテル「はい、こうなりました」

『タトバコンボ』

リンクSS+

『ガタキリバコンボ』

リンクSSS+

『ラトラーターコンボ』

リンクSSS

『サゴーズコンボ』

ランクSSS

『シャウタコンボ』

ランクSSS

『???コンボ』

ランクSSS-

『ブラカワニコンボ』

ランクSSS-

『タマシーコンボ』

SSS+

『タジャドルコンボ』

ランクEX -

『プティラコンボ』

ランクEX

『スーパータトバコンボ』

ランクEX

『アルティメット真・タジャドルコンボ』

ランクEX +

『タトバリングコンボ』

ランク測定不能

アंक「やっぱり、タトバリングはこうなったか・・・」

映司「欲望は無限って事を体現したコンボだもんなあ」

レヴィ「この、真・タジャドルアルティメットってなに？」

シュテル「これはStrikerS編に登場するコンボですね」

ディアーチエ「暴走した奴を止めるにはこれしかないだろう」

映司「はい。ネタバレはそれくらいにしてね」

3人「はい」

映司「因みに、ランクを順番に並べるところです」

SS+『タトバ』

SSS-『ブラカワニ』『???』

SSS『ラトラーター』『シャウタ』『サゴーズ』

SSS+『ガタキリバ』『タマシー』

EX-『タジャドル』

EX『プトティラ』『スーパータトバコンボ』

EX+『アルティメット真・タジャドル』

測定不能『タトバリング』

映司「順番に並べると凄いなあ」

アंक「まあ、状況と相性を考えると、また変わってくるがなあ」

映司「コンボにも色々特性があるからな」

レヴィ「僕はやっぱりタジャドルが好きだな」

ディアーチエ「我はプトティラが好きだ。あの暴走するまでに強大な力が堪らない」

映司「使う俺の身にもなってほしいなあ……。シュテルはどのコンボが好き？」

シュテル「私はあの人が私達の中に残してくれた???コンボが好きです」

映司「そつか。アंकはタジャドルコンボだろ？」

アंक「まあ、俺のメダルが使われてるからな。お前はどんなんだ？」

映司「俺？俺はやっぱリタトバリングかな。みんなと繋がってるって思えるコンボだから」

アंक「そうか……」

レヴィ「……何嬉しそうな顔してるの？」

アंक「ッ！？するか！いい加減な事を言っな！！」

レヴィ「してるよ、ねえ？シユテるん」

シユテル「ええ、してますね。ディアーチェもそう思いますよね？」

ディアーチェ「うむ。嬉しいなら嬉しいと言ったらどうだ？アंक」

アंक「お前等あ・・・ぶっ殺す！！」

映司「うわぁ！！止めろ！アंक！！」

アंक「止めるな！！アイツ等には一度わからせてやる必要がある！！」

シユテル「逃げますよ、2人共」

レヴィ「きゃあゝ逃げる逃げる」

ディアーチェ「捕まえられるものなら捕まえてみるがい」

アंक「待てゴラァ!!」

映司「お、おい!!アंक!?みんな!?ああもう!!」

映司「じゃ、じゃあ!今回はここまでです!ありがとうございます  
た!!」

映司「ちょっと!みんな自由過ぎるだろ!おい!!」

???「・・・ふんっ、未来も過去も、アイツ等は変わらないな」

???「それが映司の良いところなのでは?」

???「さあ?どうだか」

???「相変わらず、素直ではありませんね」

???「うるせえ。バカな事言つてつと、飯抜きにするぞ」

???「それは勘弁してもらえないでしょうか？飢え死にしています」

???「人間は3日食わなくても死なない。大丈夫だ」

???「・・・クイントさんとギンガさんに言いつけます」

???「・・・」

???「ティアナさんとスバルさんにも言いつけます」

???「はぁ・・・わかったわかった。帰るぞ、???」

???「はい、???」

## PV30000アクセス突破記念（後書き）

映司が犯した罪とは？

闇が齎す奇跡とは？

本当の英雄とは何なのか？

映司が言う『彼』とは誰なのか？

そして、生きる意味とは？

GEARS OF DESTINY編までいけるのか？

作者は途中で飽きたりしないのか？

大学受験は大丈夫なのか？

作者は誰に聞いているのか？

GEARS OF DESTINY編まで書けたらいいなあ

感想貰えると嬉しいです

柔らかい感じをお願いします

最後に登場した2人組は一体・・・

## 第9話『釣りと説明と凸凹コンビ』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第9話『釣りと言明と凸凹コンビ』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、映司達4人は3日の休みを経て、ジュエルシード探しを再開した

2つ、ジュエルシードを賭け、なのはとフェイトが戦おうとしたその時、管理局執務官クロノ・ハラウンが介入した

そして3つ、ローブの男が現れ、サメヤミーを作り出したがトライドベンダーと『ラトラーターコンボ』を使い、映司達はこれを撃破した

第9話『説明と釣りと言明と凸凹コンビ』

アースラに転送された映司、アंक、なのは、ユーノはクロノの案内されてアースラ内を歩いていた

映司とアंकは歩きながら周囲を見回している

なのははまだ、バリアジャケットのままである

ユーノはなのはの肩には乗らず、ててと四本足で歩いてた

「いつまでもその格好じゃ、窮屈だろう？バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

クロノは歩む足を止めて後ろを向き、なのはに言う

「あつ、そうですね」

なのはその言葉に従いバリアジャケットを解除し、服装を聖祥学園の制服姿へと戻した

それからクロノはユーノを見る

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

「ああ、そういえばそうですね。すっかり忘れてました」

クロノに言われて、ユーノは何かを思い出したかのような顔をしていた

「えっ？」

なのはは訳がわからず首を傾げている

その直後、ユーノは身体全身を輝かせた

やがて姿がハッキリすると、ユーノの体は、フェレットから人間の姿に変わっていた

見た目は、なのはとそう歳が変わらないくらいの少年である

「えっ!？」

ユーノの姿を見て、なのはは驚いた

「ふう。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？」

ユーノは顔を、なのはに向けた

なのはは、驚きながらユーノを指差している

「ふええええ!!?」

アースラに、なのはの声が響いた

「な、なのは？」

ユーノは首を傾げた

「ユーノ君って・・・ユーノ君って・・・！ちよつ、ふえええええ！？」

なのははユーノを完全にフェレットだと思っていたようだ

「えっと・・・なのは、僕達が初めて会った時、僕はこの姿じゃ？」

「違う違う！最初からフェレットだったよ！」

なのはは、首を横に振りながら答えた

言われてユーノは額に指を当てて最初に会った時の事を思い出そうとする

「ああっ！」

そして、思い出した

「そ、そういえば、この姿まだ見せてなかった」

「だ、だよね？ビックリした〜！」

なのはは大きく息を吐いた

「あなた達は驚かないのか？」

驚かない映司とアंकにクロノは訊ねてきた

「まあ、コレより異常なことはいくらでもあったからね」

映司は過去の体験を思い出しながら苦笑いを浮かべて答える

「でも、この世界はフェレットが人間に進化するんだね」

映司がユーノに笑って「大きく育ててよかったね」と言いながら肩を叩く

「ち、違いますよ！僕は元々人間です！これが僕の本当の姿です！」

映司の間違った解釈に、ユーノは必死に弁解するのだった

「ああ、そうだったんだ。ごめんね」

「・・・わかってくれれば、別に・・・」

そう言ってユーノは今度はなのはに説明しに行った

「艦長に会う前に僕個人として訊きたい事がある。あなた達と逃亡した2人の関係は？」

「友達だよ。あと、家主と居候で・・・あと何だっけ？」

映司は何も隠さず即答し、あとは何だっけつとアंकに訊ねる

「犬はキャンキャン五月蠅いペットだろ」

「おいおい・・・」

アंकはアルフの事をボロクソ言うのだった

「・・・まあ、艦長を待たせているから、行こうか」

クロノはそう言って4人を連れてまた歩き出した

「艦長。来てもらいました」

映司達は艦長がいる部屋に到着した

部屋に入った瞬間、アंक以外の3人は少し驚いた

部屋の中には、盆栽やお茶の道具、畳や獅子脅しが置かれていたのだ

畳の上には、艦長のリンディが正座していた

「お疲れ様。まあ、4人共どうぞどうぞ、楽にして？」

笑顔でリンディが映司達に言った

とりあえず、4人は畳の上に座った

「どうぞ」

4人の前に、お茶と羊羹が差し出された

「あ、ありがとうございます」

これまたアंक以外はお礼を言った

アंकはさつさと手に取って食べてしまった

「私は時空管理局提督『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです」

それから互いに自己紹介をしてユーノ達は、これまでの事をリンディ達に話した

「なるほど、そうでしたか。あのロストログア、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

話を聞き終えたリンディが言った

「それで僕が回収しようと・・・」

「立派だわ」

「けど同時に無謀でもある！」

クロノの言葉に、ユーノは顔を俯いてしまう

ここで、映司とアंकの中にある疑問が生まれたが今は黙っている事にした

「あの、『ロストロギア』って何ですか？」

なのはが小声で隣に座っていたアंकに訊ねた

「・・・次元空間の中にはいくつもの世界がある。それぞれに生まれて育っていく世界、その中に極稀だが進化しすぎる世界がある。技術や科学、進化しすぎたそれらをコントロール出来なくなり、自分達の世界を滅ぼした。その後に取り残された『失われた世界の危険な技術の遺産』。それをコイツ等は総称してロストロギアと呼んでるらしいな」

アंकはメンド臭そうになのはに教えた

「使用法は不明だが、使い方次第で世界どこるか次元空間さえ滅ぼすほどの力を持つ事もある危険な技術だよ」

アंकの説明にクロノが少し付け足す

「しかるべき手続きをもって、しかるべき場所に保管しなければならぬ品物。あなたが捜しているロストログア『ジュエルシード』は次元干渉型のエネルギー結晶体。いくつか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を引き起こし、最悪の場合になると次元断層さえ引き起こす危険物なの」

リンディが真剣な顔をして4人に教えた

「君と黒衣の魔導師がぶつかった際に発生した震動と爆発。あれが次元震だよ」

クロノはなのはを見てから身近で起こったことで説明してくれた

なのははジュエルシードを挟んでレイジングハートとバルディッシュが衝突した時に起こったことを思い出した

体験した事なので理解は早かった

「たったひとつのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもアレだけの威力があるんだ。複数個集まって動かしたときの影響は計り知れない」

クロノは腕を組んで言った

「聞いた事があります。旧暦の426年、次元断層が起こった時の事」

ユーノがリンディとクロノの話を聞いて思い出したように言った

「ああ、あれは酷いものだった」

「隣接する平行世界がいくつも崩壊した、歴史に残る悲劇。繰り返してはいけないわ」

リンディは事件の惨劇を思い出して言う

昔話が終わると、リンディは角砂糖を抹茶の中に入れてから一口飲んで、映司達を見回す

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「えっ!？」

リンディの言葉に、なのはとユーノは戸惑った

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

「でも・・・そんな・・・」

「次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない」

クロノはそうなのはとユーノに言うのだった

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて2人で話し合って、それから改めてお話をしましょう」

リンディがなのはにそう言うと、アंकが突然笑い始めた

「・・・何がそんなに可笑しいのかしら？」

リンディがアंकを見て言った

「ああ、最初からわかってはいたが、碌な組織じゃないと思ってなあ  
」

アंकは皮肉な笑みを浮かべて言った

「どついう意味だ？」

「お前、コイツ等のお人好し加減に漬け込んで、利用するつもりだろっ」

アंकはぐいっとリンディの顔を近づけて言う

そんなアंकを見て、なのはとユーノは不安そうな顔をするが、映司が「大丈夫だよ」と小さな声で笑いながら言つと、安心した様に頷いた

「な、何を根拠に言っているんだ!!」

クロノはアंकの肩を掴み、リンディから離れさせる

「ハッ！お前、気付かなかったのか？この女の話に矛盾がある事に」

「なに？」

「『これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます』とか何とか言ってたなあ」

アंकは先ほどリンディが言った事を復唱した

「その後に、クロノ君は『次元干渉に関わる事件だ。これ以上民間人を巻き込むわけにはいかない』って言ったよね？」

「あ、ああ」

映司がクロノに確かめるように言うと、クロノは戸惑いながら頷いた

「問題はその後なんだよ。リンディさん、あなた『でも、急に言わ

れても気持ちの整理がつかないでしょう？一度戻って、三人でゆっくり考えて。後日、改めてお話ししよう？』って言いましたよね？」

映司が訊ねるが、リンディは答えなかった

「ロストロギアは世界を崩壊させる危険物だと言ったよなあ。なら、関わっている民間人の気持ちなんて関係ないだろ？お前の話は矛盾しているんだよ」

そう言いながら、アंकは右手をグリード化させ、リンディの首を掴んだ

「貴様ッ！！何をしている！！」

「動くな。動けばこの女、殺すぞ」

アंकは目を細めて、アंकを取り押さえようとしたクロノに言う

アंकの身体能力を痛いほど知っているクロノは動けなかった

「流石、その若さで艦長になっただけはあるなあ、人の上に立つ能

力がある。そして、詐欺の才能もなあ」

「・・・」

リンディの顔が若干青ざめている

アंकから発せられる殺気は本物だったからだ

「どうしたんだよ？俺は褒めているんだぞ？もう少し喜んだらどうだ？」

「あ、アंकさん！管理局の人にそんな事をしてはいけません！」

ユーノがアंकに止めるように言うが、アंकが聞くはずも無い

「黙ってる。コイツの化けの皮を剥ぐところだ」

「化けの皮って・・・」

アंकの豹変振りに、ユーノはそれ以上何も言えなかった

「さあ、質問に答えて貰おうか？今回の件、何で単独で戦える魔導師がこのガキだけなんだ？」

アंकはクロノを見てリンディに問う

「そ、それは緊急で・・・他の局員は別の任務で――」

「俺が聞いた話じゃあ、ロストギアの回収は最優先だったはずだがなあ？」

「くっ・・・」

アंकの尤もな意見にリンディは言い返せなかった

「世界が崩壊なんて言っておきながら、その次はゆっくり考えろだとかおかしなこと言うな。そんな事してる暇があるなら、俺達と手を組んでさっさと片付けようとは考えられなかったのか？」

「・・・」

アंकは少し握力を緩めてリンディに答えさせようとする

しかし、リンディは答えなかった

「どうした？答えられないのか？だったら俺が代わりに答えてやる。危機感を煽って、俺達に協力させるように仕向け、使い勝手がいい道具にするつもりだったんだろ？」

「ッ！？」

リンディは凶星を突かれて目を大きく見開いた

アंकは大げさに言っているが、利用しようとした事は本当だったのだ

「艦長！何故黙っているんですか！？このままじゃ我々管理局が誤解されてしまいます！」

「言い返せないんだよ、誤解だったら直ぐに否定出来るはずだ。素直に協力して欲しいと言えば、手を貸してやったのになぁ・・・」

そう言って、アंकは手を離して、リンディを突き飛ばした

「・・・さて、クロノ君の言った通り俺達は民間人だ。もうジュエルシードとは一切関係無くなっちゃったから、帰ろうか？なのはちゃん、ユーノ君」

映司はなのはとユーノの方を見て2人に言う

「え？え！？」

「ちよっ、ちよっと待って下さいよ！映司さん！」

「こういうのは警察に任せておけばいいんだよ。それに、なのはちゃん達が道具にされるなんて、我慢出来ないからね」

映司は首を押さえて蹲っているリンディを見て言った

そして、2人にしか聞こえないくらいの小さな声で『心配しないで大丈夫だよ。もうすぐ釣れるから』と言った

「さあ、帰ろう。アंकもそんな人に構う必要無いよ」

映司はなのはとユーノを先に部屋から出して、アंकを呼ぶ

「ん？ああ、そうだな」

映司に言われ、アंकも扉に向かって行く

「・・・ま、待ってください！」

「あ？」

部屋を出ようとする4人をリンディは引き止めた

（（釣れた））

そう思いながらなのはとユーノを部屋に入れ、4人はリンディを見る

「ごめんなさい。あなた達の言う通り、私の立場上協力の要請は出来ない。だからこんな形で協力させようとしたのは事実です。本当にごめんなさい」

リンディが頭を下げる

「本当ですか艦長！？何故そんな事を！？」

「お前みたいなガキが働かされてるんだ。管理局は随分と人手不足なようだなあ」

クロノの疑問にアंकが答えるとリンディが頷いた

「ええ、そんな時に観測された強力な魔力値。それも管理局にほんの僅かしかないA A Aランクの魔導師が2人、なのはさんとあの黒衣の魔導師の子の事です。そして、Sランクをも超える力を持つあなた達2人、映司君とアंक君。正直に言って、喉から手が出るほどあなた達が欲しいんです」

「で？だから、何だ？」

「お願いします！事件解決の為に私達に協力して下さい！」

リンディは4人に向かって頭を下げて言った

「・・・どうする？映司」

「俺達はヤミーが出れば戦わなきゃいけないけど、なのはちゃんとユーノ君はどうしたい？」

アंकに聞かれた映司はなのはとユーノに訊ねた

「・・・私、お手伝いしたいです！私にやらせてください！！」

映司に訊ねられたなのはは真っ直ぐにリンディを見て言った

「し、しかし・・・」

なのはの言葉にクロノは戸惑う

「きっと、リンディさんに言われなくても私、自分から言ってます！お願いします！」

なのはは立ち上がってリンディに頭を下げた

「僕も、お願いします！」

なのはに続いてユーノもリンディに頭を下げた

「だそうです。ジュエルシード回収作業の協力、お願い出来ますか？リンディさん」

「・・・はい。みなさんの乗艦を許可させていただきます」

「艦長！？本気ですか!？」

「2人の善意を利用しようとした私に、この頼みを断る事は出来ません」

リンディは静かにクロノに言った

「高町なのはさん。ユーノ・スクライアさん。先ほどは、あなた達を利用しようとして申し訳ありませんでした」

リンディは2人に頭を下げた

「い、いえ、そんな・・・」

頭を下げられて、なのははあたふたする

リンディは頭を上げた

「ご協力に感謝します。それと改めて、2人共よろしく願いします」

「は、はい！よろしく願いします！」

「お願いします！」

こうして、なのは達は管理局に協力する事になった

「では、なのはさんは一度ご家族とお話をして、また明日、公園に来てください」

「はい！」

「クロノ、2人を元の世界へお送りして？」

「・・・はい、わかりました」

クロノはまだ納得していないようだったが、渋々了解した

なのはとユーノ、クロノが部屋から出て行った

「・・・映司君、アंक君、本当にごめんなさいね」

リンディは映司とアंकにも頭を下げる

「いえ、もういいですよ。でも、2度としないで下さいね？」

笑ってはいるが、今度したら絶対に許さないという脅しが映司から  
滲み出ていた

「じゃあ、ここからはなのはちゃん達には聞かせられない話をしま  
しょうか」

映司は畳の上に座り、リンディに言う

アंकも嫌そうな顔をしながらも映司の隣に座った

「なのはさん達に聞かせられない話？」

「ヤミーの事ですょ」

首を傾げたリンディに映司は真剣な表情で言う

「ヤミーの元はセルメダルです」

映司はリンディにセルメダルを1枚渡して言う

「何か・・・凄い力を感じるわね・・・」

リンディはセルメダルを見つめて言う

「そして、メダルの元は、『人間の欲望』だ」

そんなリンディにアंकは言った

「・・・どういう事かしら？」

映司とアंकはヤミーの事を詳しくリンディに話していくのだった

「・・・あなたが話してくれた事が本当なら、人間の価値って、何なんでしょうね」

映司からヤミーやグリードの事を聞いて、リンディはショックを受けていた

「そんなの、俺達が決める事じゃありません。人の価値はその人自身が決めるものです」

映司はリンディの言葉を聞いて言う

「・・・そうね。貴重は話をありがとうね、映司君、アंक君」

リンディはヤミーについて話してくれた映司とアंकにお礼を言った

「この話はくれぐれもなのはちゃん達には秘密にしておいて下さい

ね  
」

「ええ、わかってるわ。この話を聞くには、彼女達はまだ幼過ぎるわね」

映司の意見にリンディは賛同した

「じゃあ、今日はもう休んでもらって構わないわ。部屋も用意します」

リンディはそう言って通信端末を操作する

「あ、聞きたい事があるんですけど。伊達さんって人とメガネを掛けた人って何処にいますか？さっき助けてもらったんで、お礼が言いたいんですけど」

映司は伊達と真木の事をリンディに訊ねた

「伊達さんと真木博士の事ね、少し待ってね」

そう言って、リンディは真木に通信を繋いだ

すると、メガネを掛けた男性がモニターに映し出された

「真木博士、映司君が会いたいと言っていますが、案内してもいいですか？」

《ええ、構いませんよ。火野君、トラカンをもう一度起動してもらえますか？》

「え？あ、はい」

映司は真木に言われ通り、トラカンのタブレットを引く

《TORA CAN》

「ガウウ！」

トラカンが起動し、映司の手の平に乗る

《火野君とアंक君を案内して来てもらえますか？》

「ガウウ！」

トラカンは答える様に鳴くと映司の手の平から飛び降り、走り出す

《トラカんに案内させます。 追いつけて下さい》

そう言っていると、真木は通信を切ってしまった

「ガウウ！」

ついて来いと言わんばかりにトラカンは鳴く

「じゃあ、行つてきますね」

映司はリンディにそう言っていると、トラカンを追いつけて部屋を出て行った

「おい！映司！」

アंकも映司の後を追って部屋を出て行った

「・・・ふう。映司君とアंक君、幼いのに凄いやり手ね。敵に回したくないわ」

リンディは少しお茶を飲んでから静かに呟いた

トラカンに案内されて映司とアंकはある部屋の前までやって来た

「失礼しまゝす・・・」

映司は恐る恐る扉を潜って中に入った

アंकも少し怪しみながら部屋の中に入る

部屋の中には精密機械が並び、研究室のようになっていた

しかし、何故かおでんの具の空き缶が沢山転がっていた

「待っていましたよ。火野君、アंक君」

奥に進むと、肩に人形を乗せた先程の男が椅子に座っていた

その隣では何故かおでんを煮込んでいる伊達もいた

「初めましてですね。火野君」

真木は椅子に座らせたキヨちゃんを見ながら映司に言う

「あ、はい。初めまして。あなたが真木博士ですよね？」

「ええ、私が真木清人です。先程は伊達君の説明不足で危険な目に合わせてしまい申し訳ありませんでした」

トライドベンダーの件を真木はもう一度謝罪した

「いえ、気にしないで下さい。あれがあったお陰ですごく助かりましたし」

「そうだよドクター、いつまでもネチネチネチネチ。しつこいっただけじゃない」

伊達はそう言いながらお玉で鍋をかき混ぜている

「君が反省していないからでしょう。まったく困ったものです」

そう言いながら真木は走ってきたトラカンを手の平に乗せた

「しかし、ライドベンダーが役に立ってよかった。何せ実戦投与は初めてでしたからね」

そう言いながら、真木は映司の方に視線を向けずキーボードを叩く

しかし、モニターを見ている訳ではなく、視線の先にはキヨちゃんがいた

「お前、何故オースの事を知ってる？」

アंकは真木を怪しみながら訊ねた

「我々の世界で語り継がれる伝説の中に『欲望の王』という王がいます。私はその王について長い間研究を重ねて来ました。そして、見つけたんですよ、オーメダルとオーズが存在していたという事実をね」

真木は今まで集めて来た様々な資料を映司とアंकに見せる

『欲望の王の伝説』

『欲望から生まれるメダル』

『〇〇〇の存在』

『グリードと和解した青年』

『2人の〇〇〇の激突』

そこに書かれてあったのは間違っている事もあったが、その殆どが映司達が経験した事だった

「そして、君達を見つけました。オーズとグリードをね」

真木は一瞬だけ映司とアंकを見て言った

「でもさあ、オーズは800年前に封印されたって、ドクター言うてなかったっけ？」

伊達はおでんをかき混ぜながら思い出した様に言う

「それです。何故君達は目覚めたのですか？」

伊達の意見を聞いて、真木が映司に訊ねる

「それが、俺にもわからないんですよ。でも、俺達は未来で目覚めたから、今この時間ではまだ眠っていると思います」

「・・・未来で目覚め、過去にやって来たという事ですか？」

「はい。この世界のこの時間でジュエルシードを集めろって言われたんです。でも、そう俺達に言った人は俺達の封印を解いた人ではないと思います」

映司は士の事を思い出しながら真木に教える

「そうですか。管理局でも時を越える技術は持っていないませんが……  
まあ、私は君達の力が知りたいだけですから、深くは聞きません」

真木はそう言ってまたパソコンに向かってしまった

しかし、視線はキヨちゃんに向いている

「じゃ、火野。出会いを祝しておでんでもどうだ？」

話が終わると、伊達が映司と肩を組んでおでんが入った鍋を指差して言った

「じゃ、じゃあ、いただきます」

「おう！アンコもどうだ？」

「あ？俺はアンクだ、アンコじゃない」

「え？そうだったけ？まあ、何でもいいや。ドクターもどう？」

伊達は少し怒っているアंकをスルーして真木に言う

「伊達君。前にも言いましたが、ここは研究室ですよ?」

「うん。知ってる」

「・・・どうやら、言っても無意味な様ですね」

真木はそう言っ、またパソコンに向かった

しかし、視線はキヨちゃんである

「まあ、ドクターはほっというて、食べようか。味が染みてておいしいぞ〜」

そう言っ、伊達は取り分け始めた

その皿の数『4つ』である

「・・・あー! すみません。ちょっと」

「おう。早く帰って来いよ。でないと、俺とアンコと『リニス』で全部食っちゃうぞ」

「だから、俺はアンクだ！それに、リニスって誰だ！」

「俺が拾った猫ちゃんの使い魔だけど、もうすぐ来るんじゃないか？」

そんな話を聞きながら映司は部屋から抜けた

その時、少し落ち込んでいるような感じの猫とすれ違ったが、映司は気付かなかった

そして、猫も俯いて考え事をしていた為、映司には気付かなかった

くフェイト自宅く

フェイトはソファアに座って、アルフはフェイトの前に座ってる

「フェイト・・・映司とアंकは大丈夫かな・・・？」

アルフは今にも泣きそうな顔をしていた

2人に逃げろと言われたとはいえ、映司とアंकを置いてきた事は辛かったようだ

「大丈夫だよアルフ。映司とアंकは強いんだから、管理局もそう簡単には手を出せないよ」

安心させるようにフェイトが言う

「・・・ねえ、フェイト・・・もう止めようよ・・・」

アルフはフェイトに詰め寄った

「本気で捜査されたら・・・ここだっていずれはバレちゃうよ」

「・・・でも私、母さんの願いを叶えてあげたいの」

「あたしは・・・!!」

アルフが声を荒げる

「フェイトには幸せになってほしいんだよ！フェイトが泣いたり悲しんだりすると、あたしの胸も苦しくなるんだよ！」

アルフは床に伏せて、必死にフェイトを説得した

「アルフと私は精神がリンクしてるから、私の感情が流れちゃっているんだね・・・ごめんね。私、もう泣かないよ」

しかし、フェイトの決意は固かった

アルフの説得もフェイトには届かなかった

「なら・・・約束して・・・。あの女の為じゃなくて、フェイトは自分の為に頑張るって！そしたら、あたしは、全力でフェイトを護るよ！」

「うん。ありがとうアルフ・・・」

フェイトは、優しくアルフの頭を撫でた

（映司、アंक・・・）

フェイトの表情が少し暗くなった

（ごめんね、映司・・・無理しないって約束・・・破るかもしれない・・・）

そう考えると、フェイトの脳裏に映司とアंकと過ごした数日が浮かんだ

いつもいつも自分達の事を心配し、優しくしてくれた映司

無愛想だけど、何かと自分達の事を気に掛けてくれたアंक

フェイトの目から一筋の涙が流れた

（あれ・・・？もう泣かないって、決めたばかりなのに・・・）

アルフは顔を俯いていて、フェイトが泣いている事に気付いていない

（映司・・・）

映司の事を考えると、何故か胸が苦しくなった

（・・・会いたいよ・・・映司・・・）

フェイトは、アルフに気付かれないように、そつと涙を拭いた

その時、家の電話が鳴った

フェイトの家に掛けて来る人物は2人しかいない

「・・・映司！？アंक！？」

フェイトとアルフは慌てて電話の元に走り、フェイトが受話器を取った

《あ、もしもし？フェイトちゃん？》

「映司！？無事なの！？今何処！？アंकは！？」

映司の声を聞いてフェイトは一気に質問をした

《ちょっと、待って。落ち着いて？そんなに聞かれても答えられないよ》

「あ……ごめん……」

《……まあ、でも、無事でよかった。元気が無かったらどうしようかと思ったんだよ？》

「……映司、それはこっちの台詞だよ？無事なの？」

《そうだね。うん、俺もアंकも無事だよ。フェイトちゃん、元気なら晩御飯は食べれそう？》

「う、うん。でも、帰って来れないでしょ？」

《こんな事もあるつかと、冷蔵庫の中に冷凍してあるハンバーグがあるから。レンジでチンすれば食べられるよ。それを教える為に電話したんだ》

「冷蔵庫の中？・・・何処の引き出し？」

フエイトは冷蔵庫を見て、何処にハンバーグが入っているかわからなかった

《えーっと、一番下だよ。いつもアंकがアイスを入れてる所》

「一番下・・・」

フエイトの言葉を聞いてアルフが冷蔵庫の一番下の引き出しを開ける

「ハンバーグ・・・ハンバーグ・・・あっ！あつたよ！」

そして、沢山ある冷凍された料理の中からハンバーグを見つけ出した

《見つかったみたいだね。じゃあ、レンジでチンしてね。解凍してから、40秒くらいかな》

「ちょ、ちょっと待ってね？」

フェイトはメモを取り出して、解凍してから40秒と書いた

《・・・メモは書けた？》

「えっ！？あ、うん」

《じゃあ、次はご飯。ご飯は炊飯器の中にあるから。保温で温かいままだから。そのままで大丈夫だよ》

「そのままで、大丈夫つと・・・」

フェイトは映司に言われた事をメモしていく

《お味噌汁はお鍋にあるから。中火くらいでかき混ぜながら温めてね》

「中火でかき混ぜながら温める・・・」

《それで全部だよ。ちゃんと出来る?》

「うん、大丈夫だよ。アルフと一緒に頑張るから」

映司の問いに、フェイトは頷いて早速解凍を始めているアルフを見て言う

《それじゃあ、次にジュエルシードが発動した現場で会った時に一緒に帰るから。それまでご飯の事は電話するからね》

「うん。ありがとう、映司」

フェイトは目を閉じて、嬉しそうに微笑み頷いた

《それじゃ、もう切るよ。くれぐれも無茶しないように、ね?》

「うん、わかってるよ、映司。じゃあね」

そう言ってフェイトは電話を切った

「……本当に、ありがとう。映司」

フェイトはそう呟いてから、アルフの手伝いをする為、キッチンに向かった

いつの間にか、悲しい気持ちは何処かに行ってしまっていた

## 第9話『釣りと説明と凸凹コンビ』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

第10話『先生と否定と海のコンボ』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バッタメダル』×1

『ウナギメダル』×1

## 第10話『先生と否定と海のコンボ』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、クロノに案内され、アースラにやって来た映司とアंकはリンディの真意に気付き、それを暴いた

2つ、映司とアंकはリンディにヤミーの事について詳しく説明する

そして3つ、真木清人と伊達明に再会し、使い魔の猫とすれ違うが映司は気付かず、フェイトに電話し元気付けた

第10話『先生と否定と海のコンボ』

映司達がアースラにやって来て10日が経過していた

なのはとユーノは管理局と協力し、ジュエルシードを3つ回収していた

フェイトとアルフは管理局に気付かれないように探している為、2つしか回収出来ていなかった

これで、21個あるジュエルシードは残り5つになっていた

一方、映司とアंकはヤミーが現れない為、出番が無かった

実際は、リンディに出動してくれと頼まれたのだが映司は拒否した

オーズの力に頼り過ぎるのはダメだと言ったのだ

映司はオーズの力が無くともなのは達は大丈夫だと信じていた

そして、出番が無い映司とアंकは伊達と同じく、真木の研究室に入り浸っていた

「・・・この研究室も、賑やかになったものです」

真木は後ろで卓袱台を囲んでいる映司達を見て、キヨちゃんに言う

卓袱台を囲んでいるメンバーは映司、アंक、伊達、『リニス』だ

「リニスさんって、プレシアさんの使い魔だったんですね」

映司はリニスの話を聞いて言う

「はい。2年程前でしょうか、私はプレシア・テストロッサの使い魔でした」

リニスはお茶を飲んで、映司とアंकに話す

「私はフェイトに魔法を教えていました。所謂、先生という奴ですね」

「そうだったんですか・・・」

「フェイトが私の出した課題を全てクリアし、フェイトを助ける為のデバイス『バルディッシュ』が完成したことで、私とプレシアの間に結ばれた契約が完了し、私は役目を終えました」

リニスは悲しそうな顔をして映司とアंकに話す

「去り際に別れを言えば、きっとあの子達は悲しんでしまう。だから、私はあの子達には何も言わずに去りました。でも、それは違ってたんです」

「どういう事ですか？」

「結局私は、消える事が怖かったんです。あの子達が悲しむからとか、そんなの建前でした。本当は、私自身があの子達と別れるのが辛かったんです」

「・・・」

その話を聞いて、映司は顔を顰めた

アंकも何やら複雑そうな顔をしている

「私は転移魔法を使って、フェイト達が住む世界から去りました。会ってしまえば、私は泣いていたと思います。あるいは、消えたくないとか叫んだかもしれませんね」

リニスは苦笑いを浮かべて話して行く

「そして、とある世界で消えかけていた私を見つけ、救ってくれたのが、伊達さんでした」

リニスは伊達を見て言う

「ん？なに？」

伊達は大根にかぶりついている途中だった

「そして、教えてくれたんです。人の役目は決して終わらないと。1つの役目が終われば、また新しい役目が始まる。それを命尽きるまで繰り返ししていくのが、生きるという事なんだと」

リニスは優しい笑みを浮かべて伊達を見て言う

「あの子達は元気でしたか？」

「・・・はい。フェイトちゃんも、アルフちゃんも、凄く元気です

よ  
」

リニスにフェイト達の事を訊ねられ、映司は強く頷いて答えた

映司はリニスに話を聞く前に伊達から聞いた話を思い出した

映司がアースラにやって来てまだ数日経った頃――

「リニスさんって、最初は伊達さんの使い魔じゃなかったんですか？」

「うん。拾ったんだよねえ」

伊達はそう言いながら、おでんをお玉でかき混ぜている

「拾ったって……使い魔って、犬や猫じゃないですよね？」

「うん。だから、余計にほっとけなかったんだよ」

伊達は手を止めて、思い出すように言った

〈2年前〉

アースラに医務官として所属する前、伊達は『戦う医者』と呼ばれ、様々な世界で活動を行う医療チームに所属していた

そんな伊達がとある世界に行った時の事だった

辺境の森に魔力反応が現れ、魔導師、あるいは時空漂流者かと考えた伊達はそこに向かった

そして、そこで見つけたのが契約が切れ、魔力供給が無くなった為に消えかけていたリニスだった

「おい！おい、しっかりしろ！おい！」

伊達は駆け寄り、リニスを助け起こした

「……すみません……ご迷惑をお掛けして……」

リニスは消え掛けていて、喋り辛そうに伊達に言った

「気にすんな。バース、バイタルチェックだ」

「All right・Vital Scan」

伊達は自分のデバイス『バース』をリニスに翳す

すると、バースから緑色の光が発せられ、リニスに降り注いだ

「マスター、彼女は使い魔のようです。しかし、契約が切られています」

「……以前居た場所で消えるのは忍びなかったので……転移魔法を使っただんです……」

「……そっか。いい使い魔だ」

伊達は微笑み、リニスを励ますように言う

「あの、私はこのまま消え――」

「それは却下だ」

リニスの言葉の途中で伊達は遮った

「俺は医者だ。命を救うことが仕事なんだよね」

「そ、そんな……どうして……折角、消えようと……あの子達との思い出を……断ち切ろうと……」

リニスは涙を流しながら伊達に言う

「……何とでも言え。生きてりゃそれもいつかは笑い話になる」

それでも伊達は、涙を流すリニスに生きろと言った

「待つてろよ、今助けてやるからな。確か、契約を繋ぎなおせばい

いんだな」

「・・・はい」

「消えるな、生きる。それだけだ」

その契約内容にリニスはフェイトとアルフの契約を思い出した

思い出し——しまった、と思った時には遅かった

フェイトとアルフの純粋で優しい笑顔を思い出してしまった

未練を断つ為に違う世界へとランダム転移を行ったのに、思い出してしまったのだ

途端に消える事が怖くなり、消えたくないという思いが大きくなってしまった

フェイトとアルフにもう一度会いたいという思いが大きくなってしまった

そして、リニスは伊達と契約を結び、生きながらえた

「私がどうやって伊達さんと出会って救われたかは聞いていますよね？」

「え？あ、はい、以前聞きました」

リニスの問いに映司は頷く

「本当に、情けない話ですよ……。使い魔が消えるのは当然の事なのに……。怖いなんて……」

リニスは苦笑いしながら映司とアंकに言う

「……そんな事ないですよ」

「えっ？」

「死ぬのが怖くない生き物なんて、この世にいません。病院も医者も薬も医療技術も、人間が長く生き永らえたいと思ったから生まれたんです。死ぬのが怖くないなんて言っている人も、最後はもつと生きていたいと思うはずですよ」

映司が真剣な表情を浮かべて静かにリニスに言った

「・・・何故、死が怖いかわかるか？」

今まで黙っていたアंकがリニスに訊ねた

「・・・何故死ぬのが怖いか、ですか・・・？」

「そうだ」

リニスは考えるが、わからなかった

死ぬのが何故怖いのかなんて、考えた事もなかったからだ

「・・・命はこの世に1つしかない。そのたった1つの命を最初から与えられているお前等は、命がどれだけ貴重なモノかわかってな

い。会いたい奴にも会えなくなれば、うまい物も食えなくなる。死ぬってのはな、そんなある間は気付けない大切なモノを全部失うって事だ」

アंकはグリード化させた自分の右手を見て言う

「大切なモノを失うのが怖いのは当たり前だ」

アंकは視線をリニスに向けて言った

「だから、死ぬのが怖い事が情けないなんて、絶っつつ対にありません」

そう映司は断言した

「・・・わかってるじゃない。ほら、大根食え、大根！」

その話を聞いた伊達は笑いながら映司とアंकの皿に大根を入れる

「今時珍しいなあ、命の重さがわかってる」

伊達は嬉しそうに笑いながら映司とアंकに言う

「リニスもコイツ等見習って、もっと命の大切さを学んでちょうだい」

伊達はそう言って卵にかぶりついた

くアースラブリッジく

伊達の話聞き終えてのんびりしていた映司とアंकはリンディに呼び出され、エイミィの現状報告を聞いていた

伊達は難しい事はわからないからいいと言い、リニスは伊達がサボっている仕事を片付けなければならず、真木は基本研究室から出ないので2人で来ていた

「あの子達を何とか捜せないの？」

リンディは難しい顔をしてエイミィに訊ねる

「それが・・・余程高性能なジャマー結界を使っているらしく、今の所は無理です・・・」

管理局は未だにフェイトとアルフを見つけられずにいた

「ハッ！管理局も大した事ないなあ」

アंकは馬鹿にしたように笑ってリンディ達に言う

見つからないのは事実だった為、アंकの言葉には誰も言い返せなかった

「あの子の正体については何か分かった？」

エイミィの報告を聞いたリンディは続けて聞く

それには今まで黙って聞いていたクロノが答える

「テストロッサ、かつての大魔導師『プレシア・テストロッサ』と

同じファミリネームです」

「プレシア・テストロッサ！」

リンディにも覚えがあったらしく驚いている

「プレシア・テストロッサ？」

映司は心当たりがありすぎるほどあるが、とりあえず惚けておくことにした

「だいぶ前の話だけど、『ミッドチルダ』中央都市で魔法実験中に大きな事故を起こして追放されてしまった大魔導師だよ……。あの子は関係者かもしれない……。本名じゃないかもしれないけどね……。ともかく、捕まえてみれば解るさ。次は必ず捕まえる！」

そんななのはにクロノが説明する

「お前等に捕まえるのか？」

アंकは笑いながらクロノに言う

「ああ、必ず捕まえてみせるさ」

クロノは拳を握り締めている

出し抜かれた形になって頭にきているのだろう

「・・・プレシアさん」

映司はフェイトの母親であるその名を呟いた

話を終え、映司達は食堂に来ていた

映司とアंकは食事を取りに来た訳ではない

なのはやユーノが来ていて話がしたいと言っているから来たのだ

「それで、話つてなに？ジュエルシードの事？」

映司がなのはの前に座って訊ねる

「いえ・・・フェイトちゃんの事です」

「フェイトちゃんの事？フェイトちゃんがどうかしたの？」

なのはの言葉に映司は首を傾げた

「本当に管理局に保護を頼まなくていいんですか？」

なのはの代わりにユーノが映司に言った

「呆れた奴だな。あんな目に合いそうになって、まだ管理局を信用してるのか？お前は馬鹿か？」

アंकが少しイラッとした表情をしてユーノに言う

「い、いえ、そういう訳では・・・すみません・・・」

ユーノはアंकに睨まれてシュンとして言った

「まあまあ、なのはちゃん達が言うのもわかるから、アंकもそんなに睨むなよ」

ユーノを睨むアंकを映司が止めるように言った

「管理局にフェイトちゃん達を保護してもらう気はないし、今フェイトちゃん達を管理局に保護してもらっても、何の解決にならないんだよ」

「何か訳があるんですか？」

「うん。フェイトちゃんにもいろいろあるんだよ」

映司は笑ってユーノに言った

「・・・映司さん」

「ん？なに？なのはちゃん」

唐突になのはが映司に話し掛けた

「私も小さい頃はよく独りだったんです」

「そうなんだ」

「昔、お父さんが仕事で大怪我しちゃって・・・しばらくベッドから動けなかった事があるんです。喫茶店も始めたばかりで、まだ人氣はなかったから、お兄ちゃんやお母さんもずっと忙しくて」

「・・・」

なのはの話を、映司は黙って聞いている

話をしている時の、なのはの顔は少し寂しい表情をしていた

「お姉ちゃんは、ずっとお父さんの看病で・・・だから私、割と最近まで家にいる事が多かったんです」

そう言って、なのはは笑顔を作った

「映司さん」

「ん？」

「独りぼっちの子にしてあげるのは、大丈夫って優しく言う事でも、心配する事でもないと思うんです」

「・・・」

「同じ気持ちを分け合える事。悲しい気持ちも寂しい気持ちも半分にできる事だと思うんです」

「そうだね。悲しい事は半分になるし、嬉しい事は倍になるもんね」

なのはの答えを聞いて映司は笑ってそう言った

「はい！」

なのはも嬉しそうに笑って返事をした

その時、アースラ内に緊急事態のアラームが鳴り響いた

雷雲渦巻く海鳴市沖上空に、フェイトとアルフはいた

そして、金色の巨大な魔法陣が浮かんでいた

「アルタス、クルタス、エイギアス・・・」

フェイトが作り出した雷の魔法陣

その直径は数百メートルにも及ぶ巨大な物だった

フェイト達のプランは海中にある『ジュエルシールド』に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させ、位置を確認をするというものだった

それは、1人で行うにはリスクが大きすぎるというものだが、成功すれば未回収であるジュエルシールドを独占できるという魅力もあった

アルフは少し離れた位置で狼の姿をとりフェイトのサポートに努める

（海の中にあるジュエルシードの位置を特定するために、電気の魔力流を海に叩き込んで強制発動させる。それは間違っていないけど・・・）

「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス・・・」

フェイトの頭上に金色の巨大な球が構成され、ぎょろりと目のようなものが開く

そして、それは自ら雷を発していた

その金の球体はひとつではなく六つであり、それぞれが輪を描くようにして、雷で繋がっていた

「はああああ!!」

金の魔法陣が展開し、フェイトは宙を舞いながら、海鳴の海に向かって放つ

強風が発生し、海がうねりを上げている

海中の中にあると思われるジュエルシードを強制発動させる為、フ  
エイトが人工的に天災を引き起こしたのだ

海から5つのジュエルシードの光の柱が現れる

「見つけた・・・残り5つ！」

フェイトは息を荒げながらアルフに言う

（これだけの魔力を打ち込んで、おまけに全部のジュエルシードを  
封印するなんて・・・いくらフェイトの魔力でも絶対限界を超えて  
るよ・・・）

フェイトを心配しながらアルフは2人の人物を思い出していた

（映司・・・アンク・・・アンタ達なら、フェイトを止められたの  
かな・・・）

「アルフ！」

アルフがそんな事を考えていると、フェイトが声を掛けた

「空間結界とサポートお願い！」

「あ、ああ！任せといて！」

フェイトの言葉でアルフは考えを切り替えた

（弱気になるな！あたしはフェイトの使い魔なんだ！）

アルフは決意を固めた眼をする

（あたしも映司やアंकのように、全力でフェイトを護るんだ！！）

これで、回収出来なければ、完全に無駄骨になる

海中から走り出した光の柱をフェイトは息を乱しながらも、睨みつける

フェイト達の前でジュエルシードの光は巨大な竜巻になった

フェイトはバルディッシュをサイズフォームにして構える

「いくよ、バルディッシュ。頑張ろう」

バルディッシュを構えて、フェイトは嵐の中を飛んだ

緊急事態のアラームを聞いた映司達は、ブリッジに入った

映司達は現場が映し出されているモニターを見る

そこには、ジュエルシードの力に弾き飛ばされても必死に戦うフェイトの姿が映っていた

「「フェイトちゃん！」」

映司となのはが、フェイトの名を叫んだ

「なんとも呆れた無茶する子達だわ！」

画面を見ながらリンディが呆れ半分、心配半分に言った

「無謀ですね。間違いなく自滅します」

クロノが悪びれた様子もなく言った

その言葉に、アंकは眉を顰めた

「あれは個人が出せる魔力の限界を越えている」

「あ、あの！私、急いで現場に！」

なのはが、ブリッジの転送装置に行こうとした

しかし――

「その必要はないよ。放っておけば、彼女は自滅する」

クロノがそれを止めた

「!？」

クロノの一言でなのはとユーノは金縛りにでもあったかのように身体全身が停まった

映司とアंकはその言葉を聞いて、表情を険しくした

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところを叩けばいい」

「でも・・・」

クロノの非情な言葉に、なのはは戸惑った

「今のうちに捕獲の準備を」

「了解」

クロノの指示を受けたオペレーターが準備をする

「私達は、常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実よ」

リンディが険しい表情で画面を見上げた

フェイトは、まだジュエルシードを封印しようと必死に戦っていた

「・・・アंक、行こう」

画面を見上げていた映司が静かにアंकに言い、転送装置に向かつて歩き出した

「・・・ふん」

アंकも鼻で笑い、映司に続いた

「待て、何処に行くつもりだ？」

そんな2人に向かってクロノは言う

「決まってるでしょう？フェイトちゃんを助けに行くんだよ」

クロノに呼び止められ、映司は振り返って言う

「勝手な行動をしてもらっては困る！」

映司の言葉にクロノは怒鳴る

「わかってますよ。フェイトちゃんがやってる事はあなた達からすれば、悪い事だって。あなた達は世界を護る責任がある。あなた達の立場からすれば、この選択が最善なんですよね」

「だったら——」

「でも！俺は！俺自身はそうは思わない！！」

ブリッジに、映司の怒声が響いた

「目の前で苦しんでる人がいる！自分にはその人を助けられるだけ

の力がある！なら、助けたいと思うのって間違ってますか！？しかも！目の前で苦しんでるのはこの世界に来て行く宛てが無かった見ず知らずの俺達を信じて自分の家に泊めてくれるような優しい女の子なんです！この世界で初めて出来た『友達』なんですよ！？助けようとするのって間違ってますか！？」

映司がそう言うときクロノは何も言い返せなかった

「映司、ここは管理外世界だ。コイツ等、管理局が管理していない世界だ。コイツ等の指図を受ける必要は無い。行くぞ」

アंकはそう言って、転送装置に向かって歩いて行く

「おっと、何々？どこか行くのか？」

「遅れて申し訳ありません」

その時、アंकと転送装置に間に入るように伊達とリニスブリッジにやって来た

「ジュエルシードだ。退け」

「まあ、待てよ」

アंकは伊達を押し退けて転送装置に向かおうとしたが腕を掴まれた

「・・・？何かあつ——ッ！？」

リニスはどうしたのかと訊ねようとした時、モニターに映し出されたフェイトを見て目を見開いた

「伊達さんも映司とアंकを止めて下さい！勝手な行動をされては困るんです！」

クロノは伊達に映司とアंकを止めるように言う

「・・・何か良くわかんないけど、あの子を助けに行くなら早く行つて来い」

「なっ！？伊達さん！？」

伊達の言葉にクロノは大きく目を見開いた

「目の前で苦しんでる女の子がいるのに黙って見てるなんて冷たい男だなあ、黒坊。そんなんじゃないぞ？」

伊達は映司の肩を叩いてクロノ達の方に歩いて行く

「リンディ提督、どうせ弱ったところを捕まえようとか考えてんでしょ」

「彼女はロストロギアを所持し、更には管理局員に魔法攻撃も加えています。軽犯罪では済みません」

「死んだらどうする訳？」

今までニコニコしていた伊達がリンディを睨んで言った

「こんな小さな子によくそんな残酷な事出来るなあ。アンタ、ホントに1児の母？」

伊達はモニターを見上げて必死に戦っているフェイトを見て言う

「伊達さん……言って良い事と悪い事が——」

「クロノ！」

伊達に向かってクロノが怒鳴ろうとしたのをリンディが制止する

「か、艦長！？」

クロノは戸惑いながらリンディに顔を向けた

「リンディさん！！」

なのはの声がブリッジに響いた

「私、フェイトちゃんを助けたいです！！」

「僕もです！」

真っ直ぐにリンディを見つめながら、なのはとユーノが言った

「今行かなかったら、絶対に後悔します！だから、行かせて下さい！」

「お願いします!!」

2人の瞳には、強い決意が宿っていた

「・・・わかりました。行動を許可します」

「艦長!?!」

リンディの言葉に、クロノは驚いた

「ありがとうございます!」

「急ぐよ、なのはちゃん!ユーノ君!」

「はあ、やっとか」

「はい」

なのはがリンディに礼を言うと、映司達と一緒に転送装置に向かった

「火野！アンコ！高町！スクライア！」

走り出しそうとした3人を伊達が呼び止めた

「気いつけてな！」

伊達はグツと親指を立て、ニコツと笑って言った

「『はい！』『』」

「俺はアंकだ！」

3人は返事をし、アंकは名前を訂正し、転送装置に向かって走り出した

「・・・」

リニスは走って行く4人を見つめていた

「・・・お前も、行ってきたら?」

「えっ?」

不意に伊達に言われ、リニスは伊達を見る

「行きたいんだろ?行つて来い」

「・・・はい!」

返事をして、リニスも走り出した

その場にいる者の視界と体温を奪う雨と、目的へ行かせまいと障害物のように遮る荒波

そして、無慈悲に襲い掛かる雷の中にフェイトとアルフはいた

フェイトはジュエルシールド5個をいまだに1個も回収出来ずにいた

無茶とも無謀といえる方法を用いてジュエルシールド5つを強制発動させ、それを封印しようというのだ

体力も魔力も既にレッドゾーンに近い段階での回収ともいえる

「はあ・・・はあ・・・」

バルディッシュの金の鎌刃も既に消えてしまっている

フェイトの隙を突くかのように竜巻が襲い掛かる

体重が軽い上に、バテ気味なフェイトは紙のようにあっさりと後方へ飛ばされるが、何とか体制を整える事は出来た

「フェイト！」

アルフはフェイトを助けるために向かうが、雷が鎖のようにして彼女に纏わりつき、移動を妨げた

「ええい！！邪魔だねえ！！」

言葉を荒げるが、相手は物言わぬ脅威なので言葉による攻撃は効果はない

（回収・・・するんだ！絶、対に！）

ジュエルシールドが放つ光の柱を睨みながら強く思う

だが、身体は彼女の身体に反して動こうとはしない

眼前の荒波が魔物のようにも見えた

「うう・・・まだま・・・だあ・・・！」

意識まで朦朧とし始めた時、大きな竜巻から分裂した2つの小さな竜巻がそれぞれフェイトとアルフに襲い掛かった

「「ッ！？」」

反応が遅れたフェイトとアルフは避け切れないと思い、バリアを張

ろうとしたが、フェイトは魔力を使い切り、張る事が出来なかった

「フェイトッ！！！！」

アルフが叫ぶがアルフのいる場所からでは間に合わない

フェイトは遅い来る痛みを覚悟して目を閉じた

しかし、襲って来るはずの痛みは来ず、代わりに聞きたかった声が耳に入った

「セイヤアア！！！！」

「おらぁっ！！」

フェイトに迫っていた竜巻は強力な炎とエネルギー弾に掻き消された

フェイトはそれらを放った本人を見る

「映司！アंक！」

「フエイトちゃん！！大丈夫！？」

「また無茶したなあ、フエイト」

そこにあっしたのは、オーズ・タカジャバと翼を広げたアंकの姿だった

「映司！アंक！」

アルフも2人の姿を見て、少し驚いた

「・・・ッ！？アルフ！！」

「アルフちゃん！危ない！」

「えっ？あっ！？」

オーズ達に気を取られ、アルフは完全に油断していた為、竜巻が迫っている事に気付かなかった

「デイベイインバスターツ!!」

「ジェットスマツシャーツ!!」

しかし、その竜巻は桜色の閃光と山吹色の閃光が掻き消した

「アルフさん!大丈夫ですか!」

1人はなのはだった

そして、もう1人は――

「アルフ、戦闘中に油断は大敵だと教えたはずですよ?」

「り、リニス!?!」

嘗ての自分達の教育係リニスだった

「り、リニス・・・?」

オーズ達に助けられ、竜巻に襲われそうになっていたアルフの元に翔け付けようとしていたフェイトもリニスの姿を見て驚いていた

「フェイト、久しぶりですね」

「い、今まで何処に・・・」

フェイトがリニスに今まで何処にいたのか訊ねようとしたが、それをリニスは制止した

「今はこの状況を何とかするのが先ですよ、フェイト」

「う、うん！」

リニスの言葉にフェイトは強く頷いた

「2人共、回復魔法を掛けますね」

ユーノはフェイトとアルフに近付いて回復魔法を掛ける為に魔方陣を展開する

「私も手伝います。映司達が時間を稼いでくれている間に少しでも回復しましょう」

リニスは竜巻を次々と消しているオーズとアंकを見て言った

オーズとアंकは小さな竜巻を消し、避けながら、巨大な竜巻をじっと睨んでいた

そして、何かおかしいと考えていた

巨大な竜巻は、先程から移動していないのだ

フェイトとアルフを攻撃していたのは巨大な竜巻から生まれた小さな竜巻だけだった

小さな竜巻を使うという知能がこの竜巻にはあるという事になる

「・・・映司、あの竜巻消すぞ」

「うん」

アंकクの提案にオーズは頷き、タジャスピナーをスキャンしようとした

「映司！」

そこへ、回復が終わったフェイトとアルフ、なのはとユーノ、そしてリニスが近付いて来る

「あの竜巻を消すんですか？」

「うん。力を貸してくれる？」

「うん！」「はい！」

「もちろん！」「わかりました！」

「早く片付けましょう」

オーズの言葉に全員が頷いた

その時、何かを感じ取ったのか竜巻がオーズ達に攻撃を仕掛ける

「やらせない!!」

「Circle protection」

それを見たユーノはバリアを全員の前に張る

「今です!」

「わかった!」

オーズはドライバーからメダルを抜き取り、タジャスピナーに入れ、スキャンする

《TAKA!KUJYAKU!BATTAGIN!GIN!GIN!GIN!GIN!GIGASCAN!!》

「はあああ・・・セイヤアアアア!!!!」

「はあ!!」

「デイベイインバスターッ!!」

「Divine buster」

「サンダースマッシャーッ!!」

「Thunder smasher」

「ジェットスマッシャーッ!!」

「フォトンランサーッ!!」

全員がそれぞれ砲撃魔法や必殺技を放つ

6つの光が合わさり、巨大な砲撃に変わって竜巻に直撃した

「やった?」

砲撃の直撃によって生じた水柱を見つめてアルフが言う



「今まで出て来てないと思ったら、こういう事だったのか！」

オーズはそう言いながらイトマキエイヤミーが放つ攻撃を避ける

フェイトやなのは達もイトマキエイヤミーの猛攻に避ける事しか出来ていない

「鬱陶しい!!」

アंकが火炎弾を放つが、イトマキエイヤミーは海に潜ってそれを回避する

「デイベインシューターッ！」

「フォトンランサーッ！」

なのはとフェイトも魔力弾を放つが、水中を猛スピードで移動するイトマキエイヤミーに当てる事が出来ない

「はぁ・・・はぁ・・・もう、魔力が・・・」

フェイトが肩で息をしながら小さな声で呟く

少しは回復していた魔力をまた使い切ってしまったようだ

イトマキエイヤミーはそれを嘲笑うかのように水中を優雅に移動し、攻撃を加えてくる

「チツ・・・調子に乗りやがって！映司！このコンボだ！！」

アंकはそう言ってオーズにメダルを3枚投げた

「えっ！？コンボ！？」

コンボという言葉にフェイトは過剰に反応する

「おお！なるほどね！」

しかし、オーズはそんなフェイトには気付いていなかった

オーズはメダルを受け取って、ドライバーに入れてスキヤナーを滑らせた

キーン！キーン！キイインッ！

《SHACHI!》《UNAGI!》《TAKO!》

《SHA・SHA・SHAUTA!SHA・SHA・SHAUTA  
!!!》

いつもと違う歌が流れ、光が収まった時、そこにいたオーズの姿は変っていた

胸部の中心にあるサークルに刻まれた『鯨<sup>シヤチ</sup>』『電気鰻<sup>ウナギ</sup>』『蛸<sup>タコ</sup>』

『鯨の感覚』が備わった青の顔

『電気鰻の鞭』が装備された青の腕

『蛸の脚』が備わった青の脚





まるで、ロデオのようにオーズはバランスを取ってイトマキエイヤミーを乗りこなす

「はあっ！！」

オーズはイトマキエイヤミーのバランスを崩してやり、空高く舞い上がり、メダルをもう一度スキャンする

キン！キン！キイインッ！

《Scanning Charge!》

ボルトームウィップでイトマキエイヤミーを拘束し、自分に引き寄せる

「はあああ・・・セイヤアアアア！！！！」

そして、ドリル状にまとめた タコレッグでイトマキエイヤミーを貫通する蹴りを放った

『シャウタコンボ』の必殺技の『オクトバニッシュ』である

オクトバニツシュを受けたイトマキエイヤミーは大量のセルメダルをばら撒いて爆発した

その中に混じってジュエルシードも飛び散る

「フェイトちゃん！」

なのははフェイトの隣に移動する

「今度は私達の番だよ！2人でジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートの赤い玉から、桜色の魔力が出る

桜色の魔力は、バルディツシュの黄色い玉に入っていた

「Power charge」

バルディツシュに魔力が戻る

「Supplying complete」

フェイトは隣にいる、なのはに顔を向けた

なのはは、頷いて応える

「2人で”せーの！”で一気に封印するよ！」

レイジングハートを構える

「デイベインバスター、フルパワー！」

「All right, my master」

なのはの足下に、巨大な桜色の魔法陣が展開された

フェイトもバルディッシュを構えて、巨大な金色の魔法陣を展開する

「せーの！」

なのはが合図する

「サンダー・・・」

「デイベイイン・・・」

二人ともデバイスを構える

「レイジーツ!!」

巨大な雷が、竜巻に向かって放たれた

「バスターツ!!」

桜色の閃光が竜巻に直撃した

金の光と桜色の光が六つの竜巻を飲み込んだ

くアースラのブリッジく

「ジュエルシード、5個全ての封印を確認しました！」

オペレーターのエイミィが報告する

「な、なんてデタラメな……！」

クロノがジュエルシードを封印した2人に驚く

クロノだけでなく、ブリッジにいる全員が驚いていた

「いいえ……違うわ……」

その中で、リンディだけは違う事に驚愕していた

「えっ？どういう事ですか？艦長」

「本当にデタラメなのは……オーズの方よ」

リンディはオーズのデータが表示されているモニターを見てそう言った

『ガタキリバコンボ』の時はジュエルシードのエネルギーに邪魔されて正確なデータは取れなかった

『ラトラーターコンボ』の時はトライドベンダーによって余剰エネルギーが吸収されていた

しかし、今回は『シャウタコンボ』の正確なデータが取れてしまった

それを魔導師ランクで表すと、SSS

つまり、管理局にも存在しない程の力を有しているという事だ

「私達は・・・彼を甘く見ていたのかもしれないわ・・・」

本当に恐ろしいのは誰なのかをリンディは再確認させられた

く海上く

フェイトと、なのはの前に5つのジュエルシードが現れた

嵐は収まり、雲が割れて太陽の光が差し込む

「はい。映司さんとフェイトちゃんに分」

そう言って、なのはは4つのジュエルシードをフェイトに差し出す

「・・・ありがとう」

フェイトはそう言ってジュエルシードを受け取った

「映司、大丈夫ですか？」

フェイトはリニスの声がした方を向く

「う、うん。ちょっと疲れただけだから」

そう言っているのは、変身が解けて海に浮かんでいたところをアンクに回収された映司である

今はアンクに肩を借りて空を飛んでいた

「映司、大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。フェイトちゃんこそ大丈夫？」

映司は疲れきった顔をしてフェイトに訊ねる

「うん。映司達が助けに来てくれたから。ありがとう」

「約束したでしょ？ピンチの時は助けに来るって」

礼を言ったフェイトに映司は笑って答えた

「じゃあ、なのはちゃん。俺達はフェイトちゃん達と帰るから。何

か困った事があつたら伊達さんが真木博士を頼ってね。絶対助けてくれると思うから」

「はい、わかりました。映司さん、ゆっくり休んで下さいね」

「うん、ありがとう。なのはちゃん」

なのはの気遣いを聞いて、映司は笑ってお礼を言った

「それじゃあ、帰ろうか」

「うん。そうだね」

映司が言つとフェイトが頷く

「リニスさんも一緒に来ますか？」

映司はリニスを見て訊ねる

「私は伊達さんの使い魔ですから、アースラに――」

《おい、聞こえるか？リニス》

その時、伊達から念話が飛んで来た

「（伊達さん？）」

《火野が随分消耗してるみたいだな。看病してやってくれ》

「（え？それは・・・）」

《やっと会いたかった奴に会えたんだろ？一緒にいろ》

「（・・・はい！ありがとうございます！）」

リニスは念話で伊達にお礼を言うのだった

「伊達さんから許可が出ました。私も御一緒します」

「わかりました。じゃあ、行こうか。アंक」

映司はリニスからそう聞いて、アंकを見た

「ああ、まかせろ。リニス、代われ」

アंकはそう言うとりニスに映司を渡した

（今はあんまり使いたくないんだがなあ・・・仕方ないか・・・）

「うっう・・・はああああ！！！！」

そして、アंकは全身から赤い衝撃波と閃光を放った

そこ一帯がアंकのエネルギーで満たされ、その間に映司達は転移魔法を使い転移した

アंकが放ったエネルギーのせいで、アースラの機器はエラーを起こし、追跡する事は出来なかった

第10話『先生と否定と海のコンボ』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『シャチメダル』×1

『ウナギメダル』×1

『タコメダル』×1



## 第11話『変化と考え方と理解』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『シャチメダル』×1

『ウナギメダル』×1

『タコメダル』×1



## 第11話『変化と考え方と理解』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回までのハイライト――

何者かの手により、800年の眠りからオーズとグリードが目覚めた

オーズに変身のする火野映司はグリードのアンクと共にクイント・ナカジマを救う

その後、クイントを抹殺しようと奇襲を掛けて来たロボットと戦い、他のグリード4人と合流した

そして、通りすがりの仮面ライダー、門矢士に導かれ、ジュエルシードが散らばったとある世界にやって来た

その世界で映司はジュエルシードを探すフェイト・テストロッサとその使い魔・アルフに出逢った

その後、ジュエルシードを集めるもう一人の少女・高町なのはとユニ・スクライアとも出逢った

そして、この世界に現れたヤミーと映司達は遭遇する

そのヤミーはジュエルシードで強化されていた

オーズはアंकの作戦とフェイト達の助けにより、これを撃破した

次にフェイトとなのはが合間見えた時、ジュエルシードが暴走した

映司はジュエルシードの暴走で無限に生まれていたピラニアヤミーをオーズ『ガタキリバコンボ』に変身し、殲滅した

5つジュエルシードを集めたフェイトは母、プレシア・テストロツサに報告する為、時の庭園に向かった

しかし、過程を見ず、結果だけしか見ないプレシアにフェイトは体罰を受けた

それを見た映司は怒り、プレシアと相對する

一方、アंकは死んだはずの少女、アリシア・テストロッサと出会う

そして、アリシアが死亡する事になった事件を調べ、管理局の裏を知った

映司とアंकはプレシアに『同じ人間は作れない』と訴える

その言葉を聞いたプレシアの中で、何かが変わり始めた

元の世界に戻った映司達は再びジュエルシード集めを再会する

ジュエルシードを発見したフェイトは同じく探していたのはと共に封印する

そして、ジュエルシードを賭け、合間見えようとしたその時、管理局執務官クロノ・ハラウンが介入した

しかし、その隙を突かれ、再び黒いローブの男にジュエルシードを奪われ、サメヤミーを生み出されてしまう

映司は『ラトラーターコンボ』に変身し、伊達明から託されたトラ

イドベンダーを使ってそれを殲滅した

その後、クロノに連れられ次元空間航行艦船アースラに向かった

そこでアースラに艦長リンディ・ハラオウンの真意を見抜き、これを暴いた

そして、トライドベンダーを開発した真木清人に会い、御礼を言った

アースラに搭乗して数日、映司は伊達の元にいたプレシアの元使い魔リニスに出会った

彼女の話聞き、命の重要さと死への恐怖は当たり前だと教えた

そして、フェイトのピンチを知り、なのはとユーノ、リニスと共にアースラを飛び出した

竜巻の中にいたイトマキエイヤミーの存在を見抜き、竜巻を消滅させる

オースは竜巻の中から引き摺り出したイトマキエイヤミーを『シャウタコンボ』で撃破した

第11話『変化と考え方と予感』

くフェイトの自宅く

イトマキエイヤミーを撃破した次の日

映司はいつもの様に朝食の準備をしようとしていた

しかし、コンボを使ったせいで身体は重かった

「今日は・・・何にしよう・・・」

そう呟きながら映司はキッチンに向かう

すると、何やら良い匂いがしてきた

「ん？何だ？」

映司はそう呟いてリビングに入り、キッチンを見た

「映司、おはようございます。もう起きて大丈夫なのですか？」

そこには既に、エプロンを装備したリニスがいて、料理をしていた

「お、おはようございます、リニスさん」

映司はリニスが朝食の準備をしている事に驚いていた

「あ、リニスさん、手伝います」

「そうですか？では、野菜を洗ってもらえますか？」

「はい、わかりました」

映司はリニスと共に朝食の準備を始めた

「・・・私、実はプレシアに嫉妬してたんです」

「えっ？」

朝食の準備中、リニスの唐突な言葉に映司は聞き返した

「フェイトが、私の子供だったら良かったのにつて・・・。そうしたらこの手で抱き締めて、うんっと可愛がれたんです」

「・・・」

リニスの本当の想いを、映司は黙って聞いていく

「でも、プレシアの使い魔でなければ、フェイトとアルフに出逢う事はありませんでした。だから、嫉妬より感謝の方が少しだけ多いんです」

リニスは映司に苦笑いしながら言った

「・・・素直になるのって、凄く難しい事ですよね」

映司はリニスの方を見ずに呟いた

「本当の想いを伝えるのって、ちょっと恥ずかしいし、恐い事です」

「・・・そうですね」

「でも、言葉にしくたつて、リニスさんがフェイトちゃんの事を大切に思っているって伝える事は出来るんですよ？」

「え？」

映司の言葉にリニスは映司の顔を見る

「間違った事をしたら、本気で叱ってあげる。良い事をしたら、うんと褒めてあげる。甘えたいがっている時は、甘えさせてあげる。寂しいがっている時は、一緒に側にいてあげる。泣いている時は、ギュッと抱き締めて、頭を撫でてあげる」

「映司・・・」

「それだけでも、リニスさんの想いは伝わると俺は思いますよ」

映司はリニスの方を向き、笑って言った

「それに、リニスさんはもうプレシアさんの使い魔じゃないんですよ？」

「そ、それは・・・そうですが・・・」

「・・・照れてるんですか？」

「ッ！？て、照れてなどいません！いい加減な事を言わないで下さい！」

「ああ・・・プチトマトが・・・」

「・・・あつ・・・すみません」

リニスは動揺のあまり、プチトマトを握り潰してしまっていた

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・映司、何か言っして下さい」

「いい加減な事しか言えませんか？」

「・・・わかりました。私も覚悟を決めます」

リニスは何かを決意したように言う

「映司の言う通り、素直になっってみます」

「いや、別に素直にならなくてもいいですよ？」

「どっちなんですか!?!」

映司が「何言ってるの?」みたいな顔をして言うと、リニスは少し声を荒げて言った

「その調子です。リニスさん」

「へっ?」

「それくらいフェイトちゃんにも言えるようになって下さいね」

映司はリニスに笑ってそう言った

〈アースラ会議室〉

時間は少し戻って先日――

あの後、アースラに戻ったのはとユーノはそこにいた

リンディがなのはとユーノに対して計画を破綻させた責任をどう取らせるかを検討していたのだ

主従関係ならば命令違反になり厳重な処分を下す事が出来るのだが、自分達が協力要請をし、更には行動を許可してしまった為、リンディは2人に対して強く出れずにいた

だが、相手に5個全てを回収されなかっただけマシと考えればなのは達の功績は評価出来るものである

しかし、オーズの強大な力を持つ映司とアंकを自分達の監視の下から逃がしてしまった事は痛かった

（5個全てを回収するという計画は潰されて、オーズの力も逃がしてしまったけれど・・・得られる物はあったし、行動を許可した以上こうなることはわかっていたことだから・・・）

リンディはなるべく厳しい表情をしていた

しかし、なのはとユーノは最初から覚悟していた事なので、特に微動だにしていなかった

その2人の後ろでは伊達が壁にもたれ掛かって笑っている

2人がこんなにも気丈でいられるのは、伊達から「お前等は何にも悪い事してない。胸張れ」と言われていたからだ

（こちらにも不備はあったし、映司君達の行動を許した私の判断ミス・・・今回は不問が妥当かしらね）

リンディはそう考えてから口を開いた

「さてと、今回のあなた達の独自判断ですが・・・我々の側にも貴方達に対しての不備があったこともあり、痛みわけということでは不問」とします」

なのはとユーノは思った以上に軽い裁決に顔を見合わせる

「よかったなあ！お前等！！」

伊達が笑いながらなのはとユーノに近付いて頭を乱暴に撫でた

「は、はい！」

「ホッしました」

そんな伊達になのはとユーノも笑って返事をした

「さて問題はこれからね。クロノ、事件の大元についての説明を」

壁にもたれて今までのことを腕組みをして静観していたクロノが目を開いた

「はい。エイミィ、モニターに」

壁から離れて中央にあるテーブルまで歩み寄る

《はいはい》

別室にいると思われるエイミィ・リミエッタの声が聞こえた

同時にテーブルの中央にある半円の球体から映像が映し出される

その映像にはプレシア・テストロッサが映し出されていた

クロノは映像に映った人物について語り始めた

「僕等と同じミッドチルダ出身の魔導師。プレシア・テストロッサ。専門は次元航行エネルギーの開発で、偉大な魔導師でありながら違法研究の事故によって放逐された人物だ」

「テストロッサって・・・」

名前を聞いて、なのはが呟いた

「あのフェイトという少女はおそらく・・・」

「プレシアの娘、ね」

リンディが険しい表情で呟いた

なのはは、プレシアの映像を見つめる

「この人が、フェイトちゃんのお母さん・・・」

なのはがそう呟いた時、エイミイが部屋に入ってきた

エイミイは集めた情報から判断した事を話し始めた

「プレシア・テストロッサ。ミッドの歴史で数年前は中央技術開発局第三局長でしたが、当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉が急度の試用の際に違法な材料を持って実験を行い、失敗。結果的に中規模次元震を起こした事がもとで、中央を追われて地方へと異動へととなりました。この一件に関しては随分と揉めたいです。失敗は結果にすぎず、実験材料に違法性はなかったと。辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていましたが、その後、行方不明になって・・・それっきりですね」

「家族と行方不明になるまでの行動は？」

リンディがプレシアの家族構成について訊ねる

「その辺りのデータはきれいさっぱり抹消されちゃっています。今、本局に問い合わせて調べてもらっていますので・・・」

「時間はどのくらい？」

「一両日中には・・・」

リンディは納得すると、今後の事を考えているようだった

「あれだけの魔力を放出したフェイトさん。2人ともすぐには動けないわね」

「火野達もテストロッサ達が動かなきゃ動かないだろうよ」

リンディの意見に伊達が自分の意見を言った

「そうですね」

伊達の意見を聞いたリンディは頷き、席から立ち上がった

「あなたは一休みしておいたほうがいいわね」

リンディの意外な言葉にその場にいる誰もが目を丸くしていた

「え、でも・・・」

「特になのはさんは、あまり長く学校を休みっぱなしでもよくないでしょう。一時帰宅を許可します。ご家族と学校に少し顔を見せておいた方がいいわ」

「・・・はい」

なのはは渋々ながら返事をするのだった

＼真木の研究室＼

「ドクター、さっきの会議室での話、聞いてた？」

研究室に戻った伊達は先程の話を聞いていたか真木に訊ねた

「ええ、聞いていましたよ」

コンソールを叩きながら真木は答える

「プレシア・テストロッサ。どう思う？」

「おかしい事ばかりですね。彼女個人が開発していた次元航行エネルギー駆動炉と言っていました。が、駆動炉の設計図を見たところ、似たような物を見た覚えがあったんですよ」

そう言つて真木はパソコンを操作する

「これを見てください」

「何これ？設計図？」

モニターに表示された設計図を見て伊達は首を傾げる

「ええ、そして、これがプレシア・テストロッサが開発していた駆動炉の設計図です」

そう言って今度はプレシアが開発していた駆動炉の設計図を表示した

「・・・これがどうしたの？」

「一見違う設計図に見えますが、組み換え、並び替えると・・・」

「・・・ああ！！一緒だ！！」

そう、組み換え、並び替えられているが、それはプレシアが開発していた駆動炉の設計図と同じだった

「そして、駆動炉試用の際に違法な材料を用いての実験とありますが、材料に違法な物はありません」

実験に使用された材料の表を見て真木は言った

「・・・ぜーんぶ彼女に押し付けた訳か・・・」

「そして、彼女はこの事件で一人娘『アリシア・テストロッサ』を失っています。一体どれ程辛い思いをしたのでしょうか・・・」

真木はコンソールを叩く手を止めて言った

「・・・フツ、珍しいね。ドクターがそんな事言うなんて」

「私も、姉を失っていますから。家族を失う悲しみは理解出来ます」

そう言つて真木はまたコンソールを叩き始めた

「そつか。・・・ねえ、ドクター」

伊達は少し何かを考えて真木に何かを言おうとした

しかし――

「わかっています。隠蔽される前のデータを探せばよいのです。既にやっています」

「さっすがドクター！頼りにしてるよ！！」

既に作業を始めていた真木に笑いながら伊達は言つのだった

「時の庭園」

朝食を取った後、フェイトとアルフはプレシアにこれまでの事を報告しに来ていた

もちろん、映司とアंक、リニスも一緒である

しかし、アंकは知らないうちに何処かに行ってしまった

プレシアは玉座に座り、フェイトは部屋を中心に立ってる

「・・・ジュエルシードを、全ては回収できませんでした・・・」

怯えながらフェイトが報告する

「・・・回収したジュエルシードの数は・・・全部で12つ・・・」

プレシアは、宙に佇む12つのジュエルシードを見つめた

「う、ごめんなさい、母さん・・・」

顔を俯かせて、フェイトはプレシアに謝った

「・・・残りのジュエルシードを必ず回収するのよ。いいわねフェイト？」

「え？あ、はい・・・」

フェイトは少し呆然とした顔で返事をした

いつもなら、ここでプレシアの折檻が始まるのだが、今回は違った

「何をボーンとしているの？早く行きなさい」

「は、はい・・・」

そう言われ、フェイトは部屋を出た

扉の前で待ってたアルフはプレシアの折檻が無かった事を不思議に思いながらフェイトの後を歩いた

2人がいなくなり、部屋にはプレシアだけになった

「・・・入ってきたらどう?」

プレシアが扉を見つめてそう言っていると扉が開き、映司とリニスが入ってきた

「覚えのある魔力だと思っていたけれど・・・あなただったのね、リニス」

「久しぶりですね、プレシア・・・。少し、痩せましたか?」

「どうかしらね。気にした事もないわ」

プレシアは素っ気なくリニスの問いに答える

「・・・体重計に乗ってみれば――」

「映司、少し黙っていてもらえますか？」

「はい」

映司が余計な事を言い始めた為、リニスがさっさと黙らせた

「ちゃんと食事は摂っていますか？」

「さあ、まともな食事を最後に摂ったのはいつだったかしらね」

「その様子だと、まだ医師の診察を受けてはいないようですね・・・」  
「

悲しげな表情を浮かべながら、リニスは深い溜息をつく

「訪問の理由は、まさかそんな事なのかしら？」

「そんな事って・・・あなたの身体のことですよ？」

「そんな事よ。余計な事に気を回すつもりはないわ。今の私には、ジュエルシードを全て集め――」

「アルハザードへ渡る？」

代弁するように続けられた言葉に、プレシアは眼を大きく見開く

しかし、それも一瞬の事だった

「知っていた、という訳ではないわね。ジュエルシードから目的を推察した、という所かしら」

眼を細め、リニスなら気がついてても不思議ではないとばかりに言う

「もう私は止まれないのよ。今の私には、アルハザードを目指すしかない。例えそれがどれだけ危険で、確率の低い方法だとしても、私はそれに縋るしかないのよ」

「プレシア、あなた・・・」

「私には、もう時間が無いのよ」

プレシアは悲しげな表情を浮かべて言った

「リニス、少し映司と2人にしてくれないかしら？」

「・・・わかりました。映司、外でフェイト達と待っていますね」

そう言っで、リニスは部屋を出て行った

「・・・何ですか？プレシアさん」

映司は残れと言ったプレシアを見て言う

「あれから・・・ずっと考えていたの。あなたが言った、『フェイトとアリシアの母親は私だけ』という言葉の意味を・・・」

「そうですか・・・」

「・・・最初からわかっていたのよ、フェイトがアリシアじゃないって事は」

プレシアは顔を俯かせて映司に罪を告白するように言う

「だから、フェイトちゃんにあんな事を？」

「アリシアの顔なのにあの子ではない。それが我慢ならなかった」

「・・・」

「でも、あなたとアंकに言われてわかったの。あの子はアリシアじゃない、フェイトなんだと」

プレシアは側に置いてある小さな机の上に置かれた写真立てを見る

そこには、水色のワンピースを着た小さなフェイトが写っていた

「映司、大切な事に気付かせてくれて、ありがとう」

そう言って、プレシアは映司に礼を言った

「私は、いつも気付くのが遅い・・・」

「えっ？」

プレシアが消え入りそうな声で言った為、映司にその言葉は聞こえなかった

「いいえ、何でもないわ。聞いてくれてありがとう。ごめんなさいね、もう行ってくれて構わないわ」

「・・・わかりました」

映司は少し間を開けて、扉に向かって歩き出した

そして、扉の取っ手に手を掛けたが振り返り、もう一度プレシアの前までやって来た

「まだいたの？早く帰りなさい」

「・・・プレシアさん。気付いた時には遅いってよく言いますが、俺はそんな事無いと思います」

「え？」

「気付けたなら、取り返す事だって出来るんです。幸い、プレシアさんもフェイトちゃんもまだ生きてるじゃないですか。死んでしまった人の事を忘れるとは言いません。でも、生きて目の前にいる人の事は絶対に忘れないで下さい」

映司はプレシアに優しく諭すように言って、部屋を出て行こうと扉に向かって歩き出した

「・・・あなた、歳に似合わない台詞を言うのね。まるで、長い間戦場を生き抜いてきた兵士みたいよ」

「アハハ、よく言われます」

プレシアのその言葉に映司は立ち止まって振り返り、笑って言った

その振り返った映司の姿が、プレシアには18歳の青年の姿に見えた

しかし、瞬きをした次の瞬間には映司の姿は元に戻っていた

（今は・・・？）

「それじゃ、プレシアさん。また」

そう言つて映司は出て行き、部屋には再びプレシア1人になった

「・・・ゴホッ！ゴホッ！・・・グッ！・・・ゴフッ・・・」

プレシアは口を押さえて咳込み、大量の血液を吐き出した

手でそれを押し止めようとするが、血の味に刺激され、更に激しく咳き込んでしまう

「・・・私には・・・本当に時間がない・・・」

口元に付いてる血を拭きながら、プレシアは顔を上げた

「・・・こんな私といても・・・フェイトは幸せにはなれないわね・・・」

死に近付いていく中、プレシアはやつと気付けた大切な娘フェイトの幸せを考えていた

そんなプレシアの首元に服で隠れて見えなかったが・・・白い包帯のような物が纏わりついていた

アリシアの生体ポッドがある隠し部屋

そこに1人、アंकはいた

アंकは右腕からソウルメダルを取り出す

そして、生体ポッドに掲げるようにして見た

「・・・」

ソウルメダルの黒かった部分が金色になって来ている

「・・・あと少しだぞ、アリシア」

メダルを見てアंकは小さく呟いた

そして、メダルを仕舞い、アंकは隠し部屋を出て行った

海鳴市夕方5：42

映司達は海鳴市に帰って来ていた

映司はリニスと共に夕食の買い物に出掛けていた

「映司、1つ聞きたい事があるのですが、いいですか？」

「なに？リニスさん」

映司はしゃがんで大根を選びながらリニスに答える

「あなたはどうしてフェイト達の味方をしてくれるんですか？」

「・・・」

その問いに、大根を選んでいた映司の手が止まった

「プレシアからも聞いて既に知っていると思いますが、フェイトはアリシアから作り出されたクローンです」

「そうですね。知ってますよ」

「それに、あの子達がやっている事は認めたくはありませんが・・・犯罪です」

リニスは表情を暗くして映司に言う

「教えて下さい、映司。あなたはどうしてフェイト達の味方をしてくれているんですか？」

リニスの真剣な問い掛けに、映司は大根を置いて立ち上がった

「俺は、俺が正しいと思った事をやっているだけです。リニスさん」

「しかし、さっきも言った様にフェイト達がしている事は犯罪なんですよ。」

「それが何ですか？」

「えっ？」

リニスの言葉に「それがなんだ」という顔をして映司は言う

「俺にとってフェイトちゃんって近所で遊んでる普通の子供と一緒になんですよね」

映司は笑いながらリニスに言う

「でも、フェイトは強く、才能ある魔導師なんですよ?。」

「魔法が使えるようが使えまいが関係ありませんよ。俺にとっては普通の可愛い女の子なんです」

その言葉を聞いてリニスは驚いた

「それに、ロストロギアを集めちゃいけないなんて管理局が勝手に決めた事ですよ？そんなの俺の知った事じゃないんですよ」

映司は真剣な表情をして無茶苦茶な事を言い始める

「ですが、それが通る世の中では——」

「それに、フェイトちゃんがやってる事って別に变じゃないと思うんですよ」

「・・・どういふ事ですか？」

「子供がお母さんに笑って欲しいと思うのって、変ですか？」

「ッ—」

映司の言葉にリニスは衝撃を受けた

「俺も昔、母さんに笑って欲しくて綺麗な花を摘んで帰ったりした事があります」

映司は昔を懐かしむように言う

「大切な人の為に、その人の喜ぶ事をしてあげたい。そう考えるのって、人として当たり前の事じゃないですか？」

「それは、そうだと思いますけど・・・でも、ジュエルシードは危険なロストロギアなんですよ？」

「そうですね。危険な分、フェイトちゃんは俺よりも凄いですね」

「・・・」

笑って言う映司にリナスは何も言い返せなかった

「それに、俺はもう後悔したくないんですよ」

映司は少悲しげな遠い目をして言う

「手を伸ばせば掴んで上げられる距離にいて、自分にはもしかしたら助けてあげられる力がある。誰かに手を伸ばす理由なんて、それだけで十分です」

映司は笑ってリニスに言うのだった

「・・・そうですね、私もまだまだ経験が足りないようです」

リニスは少し微笑んで小さく呟いた

そして、伊達が自分をフェイト達と一緒にいさせてくれたもう一つ  
の理由が少しだけわかった気がした

く高町家く

「・・・とまあ、なのはさんの力を借りていたという訳だったんです」

「そうだったんですか。なのはから話は聞いていましたが、みなさんの助けになったなら幸いです」

リンディは高町家を訪れ、この10日間何があったかを話していた

最初はフィクションで塗り固めるつもりだったようだが、なのはが既に魔法の事を話してしまっていた為にそれは出来なかったのだ

「なのはさん、本当にありがとうね」

リンディは士郎の隣に座っているなのはを見て言った

「い、いえ、私なんて何も！殆ど映司さんが戦ってくれてましたし！」

なのはは手をブンブン振って自分なんてまだまだだとリンディに言った

「そのなのはの話の中に出てくる映司って人はどんな人なの？」

「えっと、私より少し身長が高くてね？凄く優しくて、凄く強くて、お兄ちゃんみたいなの！お母さん達に話した方がお母さん達も

安心するって言ってくれたのも映司さんなんだよ!」

「そう、良い人なのね」

「うん!」

嬉しそうな顔をして映司について話した

「その映司君という子は今日は来ていないんですか?なのはがお世話になったようなのでお礼を言いたいのですが」

映司は来ていないのかと士郎がリンディに訊ねる

「彼は今、私達とは別行動をしているんです。写真ならありますが、見ますか?」

「ええ、是非。町ですれ違う事もあるかもしれませんからね」

士郎の答えを聞いて、リンディは映司の写真を見せた

「ん?この子は・・・」

「お父さん、映司さんを知ってるの？」

「ああ、一度家の店にケーキを買いに来てくれた子だよ。小さいのに主婦層が好むケーキを買って行ったから記憶に残っているよ、顔も整っていたしね。確か、知り合いのお母さんへのお土産だったかな？」

「主婦層が好んで食べるケーキを知り合いのお母さんへのお土産で買って行ったんですか？」

「ええ、彼が映司君だったんですか、偶然ってあるもんですね」

士郎は写真を返し、笑いながらリンディに言う

「そうですね」

士郎が笑って言うとしんディも笑って答えた

「（主婦層が好んで食べるケーキを知り合いのお母さんへのお土産・・・・知っていたという事ね）」

リンディは士郎の話を聞いて映司がプレシアの事を知っていた事に  
気付いた

〈真木の研究室〉

そこで1人、コンソールを叩いている真木の姿があった

「・・・やはり、表では無理なようですね」

真木は『新型の大型魔力駆動炉・ヒュードラ』の開発プロジェクト  
について調べていたが、どれもこれもプレシアに全ての責任を負わ  
せたというものばかりだった

「・・・おや」

その時、真木の元に1通のメールが届いた

「アंक君からですか・・・これは！」

そのメールにはアंकが管理局の本部にハッキングして手に入れたデータが添付されていた

それは、今まさに自分達が探しているプレシアが関った事件の隠蔽される前のデータだった

「やはり、管理局の上層部が絡んでいましたか・・・」

そのデータに目を通して行き、真木は静かに呟く

「感謝しますよ、アंक君」

真木はデータを送ってくれたアंकに感謝を呟き、伊達に通信を繋いだ

《どうしたの、ドクター？》

「見つけましたよ、伊達君。早速来てもらえますか？それに例の物が完成しましたよ」

《ホント！？わかった、今すぐ行く！》

伊達はそう言って通信を切った

くフェイトの自宅く

映司達はただいま食事中である

そして、これからの事を考える会議もしていた

「もう見つかってないジュエルシードは無いんだよね？」

映司はご飯を食べながらフェイトに訊ねる

「うん。残りは全部あの子が持ってるから」

映司の問いにフェイトは茶碗を置いて答える

「なのはちゃんか……。じゃあ、今度の戦いが最終決戦かな？」

映司は味噌汁を飲んで呟く

「フェイト、アイツに勝てるか？」

アंकがフェイトになのはに勝つ自身はあるかと訊ねた

「……正直、わからない。あの子も凄い速さで強くなって来てるから……。でも！母さんの為にも負ける訳にはいかない！！」

最初は俯いていたが、顔を上げ箸を握り締め、フェイトは強く宣言した

「そうそう！そのいきだよ！フェイトちゃん！」

そんなフェイトに映司は笑って言う

「私も出来るだけ協力します。新しい魔法も教えましょう」

「本当かい？リニス！」

リニスの言葉にアルフが嬉しそうに聞き返す

「はい。わたしはあなた達の元教育係ですからね」

そんなアルフにリニスは笑って答えた

「よかったね、フェイトちゃん」

「うん！ありがとう、みんな」

映司の言葉にフェイトは笑って頷いた

「ジュエルシードを全部集めたら・・・母さん、また笑ってくれるかな？」

フェイトは少し頬を赤く染めて嬉しそうに言う

「うん。きつと笑ってくれるよ」

そんなフェイトを見て、映司は優しい笑みを浮かべて言った

く高町家く

時間は既に夕食時である

「いやあ、すいませんね。お邪魔しちゃって」

高町家の食卓に、何故か伊達の姿があった

「いえいえ、なのはが随分とお世話になったようですから。遠慮しないで下さい」

「じゃあ、遠慮なく」

士郎にそう言われ、伊達は夕食に手を付け始めた

「それでさ、ジュエルシードの事だけど、テストロッサと決着を着けない限りもう手に入らないんだよね。どうする？」

伊達は夕食を食べながらなのはに訊ねる

「私、フェイトちゃんとは0勝1敗1引き分けて、まだ勝った事がないんです」

「じゃあ、次勝てば同点になる訳だ」

なのはの話を聞いて伊達は言う

「その、フェイトちゃんって言う子はそんなに強いのか？」

「うん、すごく強い」

姉の『高町美由希』に尋ねられ、なのはは少し俯いて答える

「なのはが負けるんだ。相当強いんだろう」

兄の『高町恭也』は話を聞いて言う

「まあ、テストロッサの方が実戦の経験も魔導師としての期間も長いからな。それはしゃあないわ」

伊達はたくあんをポリポリと食べながら年長者らしい事を言う

「ところで高町、お前は自分の魔法の事どう思ってるんだ？」

「えっ？私の魔法の事ですか？」

伊達の突然の質問になのはは意味がわからなかった

「お前は何を考えてその力、つまり魔法を使ってるかってこと」

「えっと・・・ジュエルシードが暴走したら、たくさんの人に被害がでちゃう。そんなの嫌だから私は私に出来る事をしたいと思っています」

なのはは少し考えながら伊達に自分の信念を話した

「なるほど。でも、お前はその力がどういう物か理解出来てないな」

「えっ・・・？ど、どういう意味ですか？」

味噌汁を飲みながら言う伊達に少し納得がいかないといった顔で訊ねる

「お前、自分が戦った後、周りを見た事あるか？」

「あっ・・・」

伊達に言われ、なのはは思い出した

自分がジュエルシードの暴走を止める為に戦った後、周りの建物は壊れていた

暴走体が暴れたのもあるが、自分の魔法が建物を壊している時もあった

なのはがユーノの手伝いではなく、自分の意思でジュエルシードを

集めようと思った切っ掛けは、自分の安易な考えで防げたはずの大惨事を起こしてしまった事だ

しかし、結界のお蔭で自分の魔法が町を壊してしまっている事を忘れてしまっていた

「魔法は確かに誰かを守れる力だ。けどな、その力は簡単に周囲を傷つける。結界のお蔭で実際の町に被害は無いけど、お前はそれを理解してるのか？」

「えっと、その、私・・・」

伊達の問いに、なのはは答える事が出来なかった

なのはの家族のみなさんは黙ってなのはと伊達の会話を見守っている

自分達には口出し出来ない、いや、してはいけないと思ったのだ

これは、なのは自身が答えを出さなければならない事だ

しかし、まだ幼いなのはに答えを出すのは難しいと考え、伊達はヒントを出すことにした

「・・・高町はテストロッサを止めたいんだよな？何でだ？」

「えっ？・・・あ、はい・・・。私・・・フェイトちゃんと友達になりたいんです」

なのはは伊達に聞かれ、小さな声で答えた

「それは今でも変わってないのか？」

「は、はい！それだけは絶対に変わってません！」

なのははフェイトと友達になりたいという思いだけは絶対に変わってないと伊達に言い切った

「・・・よっし！それなら大丈夫だ！」

「えっ？」

「その真っ直ぐな想いがあれば、力の使い方を間違える心配もない」

伊達は先程までとはうって変わり、笑いながら言う

「俺の知り合いにもさ、高町みたいに真っ直ぐな男の子がいるんだよね。」

「わ、私みたいに？」

「そつ、後藤ちゃんって言うんだけどね。世界を護りたいって言うんだよねえ。弱いくせに」

伊達は何か嬉しそうに『後藤慎太郎』という少年の話をする

「よ、弱いんですか？」

「ああ、高町なら多分勝てるくらいな」

恭也が聞くと、伊達は軽く答える

「それでも、世界を護りたいって言うんですか？」

なのは首を傾げて伊達に訊ねた

「後藤ちゃんも自覚してるんだよね。今の自分じゃ力が足りない、無理なんだって。でも、そうしたいと思った気持ちは信じる、諦めないって言ってたなあ」

伊達は初めて後藤に会った時の事を思い出して笑う

「その子はきつと強くなりますよ。確信が持てます」

「俺もそう思ってます」

伊達の話聞いて、士郎は言う

「まあ、何が言いたいかって言うとな、高町。自分がやりたいと思った事に自信を持て。道を間違えたら誰かが教えてくれる。だから自分を信じて、自分のやりたいようにやれって事だ。もちろん、さっき言った事も忘れずにな」

「・・・はい！わかりました！私、自分を信じてみます！それから、私の魔法が周りに迷惑を掛けない様に頑張ります！」

伊達の話聞いて、なのは拳を握り締め、立ち上がりそう言った

「うん、わかったから座って食べような。行儀悪いぞ?」

「あ・・・ごめんなさい・・・」

伊達にそう言われ、慌てて座るのはだった

なのはとフェイトの決戦の時は近付いていた

## 第11話『変化と考え方と理解』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『シャチメダル』×1

『ウナギメダル』×1

『タコメダル』×1



第12話『決戦と決着と決断』（前書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『シャチメダル』×1

『ウナギメダル』×1

『タコメダル』×1



## 第12話『決戦と決着と決断』

魔法少女リリカルなのは

～欲望の王～

前回の3つの出来事――

1つ、プレシアのフェイトに対する態度が少し変化した

2つ、映司は何故フェイトを助けるのかリニスに話した

3つ、なのはとフェイトの決戦の時が近付いていた

## 第12話『決戦と決着と決断』

フェイトとなのはが決戦の為に、特訓を開始して1週間が経過した

～海鳴臨海公園～

早朝5：55

なのはフェイトと決着をつける為にアースラが展開した戦闘空間でフェイトを待っていた

ユーノと伊達はなのはから離れた場所で待機している

「・・・フェイトちゃん」

なのはは後ろに魔力を感じて振り返ると、そこにはバルディッシュをを持ったフェイトが立っていた

隣には映司、アंक、リニス、アルフがいる

「じゃあ、フェイトちゃん。頑張ってね」

「負けるなよ」

「応援してるよー!」

「精一杯、後悔のないようにするんですよ」

映司を初めに、アंक、アルフ、リニスがフェイトにエールを送る

「うん。ありがとう、みんな」

フェイトは4人にそう答えて、なのはの前に立った

「・・・ごめんね。あなたには悪いけど、やっぱりジュエルシードは諦められないんだ」

そう言って、フェイトはバルディッシュをサイズフォームに変形させた

それを見たなのはレイジングハートを起動し、その手に握る

「うん、私にもフェイトちゃんにも譲れない物がある。それをただ捨てればいいってわけじゃないよ」

片手にレイジングハートを握り、なのはは真っ直ぐフェイトを見つめる

「逃げればいいってわけでもない」

片手にバルディッシュを握り、フェイトは真っ直ぐになのはを見つめる

「だから、また勝負しよう！お互いが持つてる全部のジュエルシードを賭けて！」

「P u t o u t」

レイジングハートがそう発すると、なのはの周りに円を描くように9個のジュエルシードが現れる

「うん、わかった」

なのはの言葉にフェイトは静かに頷く

「P u t o u t」

バルディッシュがそう発すると、フェイトの周りにも円を描くよう

に12個のジュエルシードが現れた

「これが最後だよ。フェイトちゃん」

なのははそう言いながら、レイジングハートをフェイトに向ける

「そうだね、これが最後だ」

なのはの言葉にフェイトも頷く

「始めよう！全力全開！最後の勝負！！」

なのはがそう言った瞬間、なのはとフェイトを中心にそれぞれの魔力光の色をした光の柱が立ち上る

そして、上空で桜色と金色の光が衝突した

くアースラ・ブリッジ

「戦闘開始、かな」

エイミィがコンソールを叩きながらモニターを見て言う

「ああ、戦闘空間の固定は大丈夫か？」

モニターに映る激しい戦闘を見て、クロノはエイミィに訊ねる

「うん、上空まで伸ばした二重結界に戦闘訓練用のレイヤー建造物。誰にも見つからないし、どんなに壊しても大丈夫」

「うん」

「しかし、ちょっと珍しいね。クロノ君がこういうギャンブルを許可するなんて」

エイミィはクロノがなのはとフェイトが戦う事を許可した事に驚いていた

「なのはが勝つにこした事はないけど、勝敗はどう転んでも関係ないしね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれてる内に、フェイトちゃん帰還先の追跡準備と」

エイミイはそう言ってフェイトの追跡準備を始めている

「頼りにしてるんだ。逃がさないでくれよ」

「了解！・・・でも、なのはちゃんに伝えなくていいの？プレシア・テストロッサの家族とあの事件であった事・・・」

エイミイは少し表情を暗くしてクロノに言う

「なのはが勝つにこした事は無いんだ。今は迷わせたくない」

クロノはモニターで戦っている2人を見てそう言った

戦闘空間ではなのはとフェイトが激しい戦闘を繰り広げていた

「はああああ!!!!」

フェイトは高速移動で逃げるなのはを吹き飛ばした

「きゃあああ!!!!」

なのははビルを貫通し、海に激突するが水を切って、水面上を高速で移動する

フェイトはなのはから少し高い位置で後を追う

[Photon Lance]

フェイトは複数のフォトンランサーを生成する

「ファイアッ!!」

フェイトは後ろからなのはを狙い撃つ

なのははそれを何とか避け、今度はなのはがフェイトを追う側になる

「Divine Shooter」

なのはもフェイトと同じ様に複数のディバインシューターを生成した

「シューッッ!!」

なのはもフェイト後ろからを狙い撃つが、フェイトは軽々とそれを避ける

「Scythe Form」

そして、バルディッシュをサイズフォームに変え、なのはが放ったディバインシューターを切り裂く

そして、フェイトはまた高速移動を始める

「シュートッ!!」

なのはは残ったディバインシューターをもう一度フェイトに向かって放つ

フェイトはそれも軽々と避け、なのはに斬り掛かった

「Protection」

その斬撃をなのははバリアを張って防いだ

そして、さっきフェイトが避けたディバインシューターをコントロールする

「Thunder Fall」

「ファイアッ!」

フェイトはそれに気付き、片手にサンダーフォールを作り出し、なのはが張ったバリアに叩き付けた

「きゃああー!!」

サンダーフォールをぶつけられたバリアは碎け散り、なのはは諸に魔力弾を受け、ビルを貫通して海に落ちた

そこから金色の光が放たれ爆発する

後ろから飛んで来たディバインシューターをフェイトは頭の位置を少し変えて避けた

フェイトは落ちていったなのはを近くの屋上に立ち、見据える

爆煙で何も見えないがフェイトは警戒を続ける

「Divine Buster」

「・・・ッ!!」

そして、爆煙の先に微かな桜色の光を見て空に急いで舞い上がった

先程まで自分が立っていた場所を見ると、砲撃を受け綺麗に消えて

しまっている

「・・・」

爆煙が消えた先を見ると、レイジングハートを構えたなのはが肩で息をしながらそこにいた

「やはり実力的には彼女の方が上です。簡単には勝てません」

「知恵と戦術はフル回転中、切り札だって用意して来た。だから後は、ただ自分を信じて戦うだけ！」

「そうですね、私もあなたを信じます。必ず勝ちましょう！」

「うん、頑張ろう！レイジングハート！」

「All Right・master」

レイジングハートの答えを聞き、なのははまたフェイトに向かって行く

フェイトはなのはが向かって来るのを見て、高速移動で逃げる

なのはは無数のデイベインシューターを作り出し、後を追いながら放つ

フェイトは巧みに避け、雲を突き抜けて空高く飛んで行く

それを見て、なのはも後を追った

フェイトが高速で飛んで行く為、なのはもスピードを上げる

しかし、フェイトはそれを見て急停止し、なのはの後ろに回った

「あっ!？」

[Photon Lance]

フェイトは後ろから再びフォトンランサーを放ち、なのはを追う

[Divine Shooter]

なのはフォトンランサーをディバインシューターで相殺し、フェイトから逃げる

「Scythe Form」

フェイトはなのはとの距離をつめ、サイズフォームで斬り掛かる

そして、雲の中に突入しながら2人はぶつかり合う

2人のデバイスが何度も移動しながらぶつかり合う為、金色と桜色の光の螺旋が生まれる

2つの光は最後にぶつかり合った後、距離を取るように離れる

「はぁ・・・はぁ・・・」

フェイトは戦い始めてやっと疲れを見せ始めた

（最初は、ただ魔力が強いだけの素人だったのに・・・）

目の前でやはり肩で息をしているのはを見てフェイトは思う

「でも、負けられない。私がここで負けたら、母さんを助けて上げられない」

フェイトはプレシアの事を考えて呟く

そして、目を閉じて母であるプレシアとの思い出を思い出す

『ありがとう、アリシア』

「アリ・・・シア・・・？」

しかし、思い出の中のプレシアは自分の事をアリシアと呼ぶ

『どう？おいしい？アリシア』

（違う・・・母さん・・・私はフェイトだよ・・・）

記憶の中におかしなところが出てくる

『可愛いわ、アリシア』

プレシアは自分の事をアリシアと呼んだ

「・・・違う、どっちでもいい」

フェイトは迷いを振り払い、なのはを見る

（勝つんだ、信じて応援してくれたみんなの為に・・・。それに何より、勝って母さんの所に帰るんだ！！）

フェイトの足元に巨大な金色の魔方陣が展開される

そして、フェイトの周りに無数のフォトンスフィアが生み出された

[Shooting Mode]

なのははそれを見てレイジングハートを構え、砲撃の準備に入る

なのはが構えたレイジングハートの先端と後尾に桜色の魔方陣が展

開され、魔力が集束される

「なのもフェイトも砲撃を撃つつもりだ」

離れた場所で見えていたユーノが呟く

「フェイト・・・」

アルフが心配そうに魔方阵を展開しているフェイトを見て呟く

「フェイトの奴、デカイのをぶちかますつもりだなあ」

アंकはフェイトが展開した魔方阵を見て言う

「あれがフェイトちゃんの切り札？」

映司が大技を出すフェイトを見て言う

「いいえ、違いますよ」

映司の発言をリニスは静かに否定した

「えっ？そうなんですか？」

「ええ。あれにも改良を加えましたが、私が教えた魔法はあれとは別です。そして、もっと強力です」

リニスは真っ直ぐにフェイトを見て言った

フェイトはバルディッシュを前に突き出し、なのはに向ける

「フアランクス・・・打ち砕けッ！！」

「Photon Lancer Phalanx Shift」

無数にあったフォトンスフィアからフォトンランサーが撃ち出され、それがフェイトの前で一点に集中され合体し、巨大な砲撃になってなのはに向かっていく

「デイバイイン・・・バスターツ！！」



2人はそれぞれ別の方に吹き飛ばされる

「フェイトちゃん！なのはちゃん！」

「なのは！」「高町！」

「「フェイト！」」

「・・・」

その光景を見た映司達はアंक以外フェイト達の名前を叫んでいた

なのはとフェイトは別々の方へ飛ばされていたが、同じ海に落ちていた

「はぁ・・・はぁ・・・ゲホッ！ゲホッ！」

「はぁ・・・はぁ・・・ゴホッ！ゴホッ！」

2人共肩で息をして、かなり疲労していた

2人が纏っているバリアジャケットも所々破れてしまっている

「はぁ・・・はぁ・・・どうして・・・あなたは・・・」

フェイトが息を切らせながら何かをなのはに言う

「え？」

なのはは聞こえなかった為に、聞き返した

「どうして、あなたは・・・私なんかに構うの・・・？」

フェイトはなのはと出逢ってからずっと疑問に思っていた事を聞いた

「・・・私、ずっとフェイトちゃんに言いたい事があったんだ」

なのはは胸の前で握り拳を作ってフェイトに言う

「えっ？」

「伝えたい事がたくさんありすぎて、何から言ったらいいかわからなかったんだけどね。にやはは」

なのはは苦笑いしながらフェイトに言う

「でも、やっとまとまったの。私はフェイトちゃんといろんな事を話し合って、伝え合いたい」

目を閉じて、心を込めてなのはは1つ1つの言葉を繋ぐ

「友達に、なりたいんだ」

そして目を開いて、フェイトを真っ直ぐに見て言った

「でも、それはこの勝負が終わってから。全部それからだよ」

「C a n n o n M o d e」

そう言うてなのは両手でレイジングハート・カノンモードを構える

「G l a v e F o r m」

フェイトもそれを見てバルディッシュ・グレイヴフォームを構えた

「私達の全てはまだ始まってすらいない。だから、本当の自分を始める為に決着をつけよう!!」

なのははそう言うつと足元に巨大な魔方陣を展開する

そして、自分達が魔法を使用した際に周りに散っていた魔力を集束し始める

「負けられない!!」

フェイトもそう言うつて足元に巨大な魔方陣を展開する

そして、自分に残った全ての魔力となのはより少ないが散っていた

魔力を集束し始める

なのはの前には巨大な魔力球が、フェイトの前には巨大な魔力の剣が生成される

「これが私の全力全開!!」

「撃ち抜け、雷神!!」

2人は各々のデバイスを構える

そして、力の限りデバイスを振り下ろした

「スターライトブレイカー!!」

「Starlight Breaker」

「プラズマセイバー!!」

「Plasma Saber」

桜色の巨大な砲撃と金色の巨大な斬撃が衝突する

衝突した拍子に集められていた魔力が散って行き、まるで流星群のように降り注いだ

「はあああああ!!!!!!」

なのはもフェイトも己の全ての力を出し切るように叫ぶ

それぞれの砲撃と斬撃が更に威力を増し、膨大な魔力を散らす

そして、巨大な魔力爆発が発生し、そこ一帯は光に包まれた

巨大な光が止んだ頃、2つの光が海に向かって落ちて行っていた

「フェイトちゃん!なのはちゃん!」

それは、力を使い果たしたなのはとフェイトだった

しかし、その2人のすぐ側に奴がいた

「ジュエルシード、全て頂くぞ」

そう、またあの黒いローブを着た男である

「映司！」

アंकはそれを見て、映司にメダルを投げる

映司はそれを受け取り、ドライバーを装着してメダルを入れ、スキヤナーを滑らせた

「変身！」

キーン、キーン、キイイーンッ！

《TAKA!》《KUJYAKU!》《BATT!》

オーズ・タカジャバに変身した映司は空に舞い上がり、落ちていく  
2人の元に急ぐ

「映司！」

「映司さん！」

振り返ると、後ろからリニスとユーノが追い掛けて来た

「リニスさん！ユーノ君！2人をお願いします！」

「わかりました！」

オーズの話を聞いてユーノが頷くと、3人は更にスピードを上げて  
2人の元に向かう

しかし、間に合わず黒ローブの男になのはが持っていたジュエルシ  
ード全9個を全て奪った

次にフェイトが持っているジュエルシードを奪おうと男はフェイト

に近付いて行く

しかし、それは突如空に現れた雷雲から放たれた巨大な紫色の雷によつて阻まれた

「・・・ふん、最後の抵抗か。無駄な事をする」

その雷を諸に受け身体から煙を出しているが、男は全く動じていなかった

男はフェイトに近付かず、手から衝撃波を放ってフェイトが持つジュエルシールド全12個を全て奪った

その衝撃波のせいで、バルディッシュに罅が入ってしまう

「大魔導師と呼ばれた力も、今やこの程度か。過去に囚われた哀れな女だ」

そして、何かを嘆くように雷雲を見つめた

「セイヤッ!!」

オーズは男に向かってタジャスピナーからエネルギー弾を放つ

男は身体を捻らせてそれを避け、オーズを見る

「お前と戦うには俺はまだ力不足だ。コイツと遊んでいる」

「クエエー!!」

男がそう言つとオウムヤミーが現れ、オーズに襲い掛かった

「なっ!?!鳥系のヤミー!?!」

「俺のヤミーだと!?!」

オーズとアंकはオウム、つまり鳥系ヤミーが現れた事に驚いた

何故なら、鳥系ヤミーはアंकが生み出すヤミーだからだ

オーズはオウムヤミーの攻撃を避けて距離を取る

「ここはお前に任せる。好きに暴れる」

男はオウムヤミーにそう言つと姿を消した

その隙に、オーズはチラリとフェイトとなのはが気になって2人の方に視線を向けた

フェイトはリニスに、なのははユーノに受け止めて貰っていた

「よし！はあ！！」

2人の無事な姿を見てオーズは安心し、オウムヤミーに向かって行った

〈時の庭園〉

時間は少し遡り、フェイトとなのはの戦いの決着が着いた直後――

「・・・フェイト、私なんかの為に良く頑張ったわね」

モニターでフェイトとなのはの戦いを見ていたプレシアは小さな声で呟く

「・・・もう、いいかしらね」

プレシアは自分の為に必死に戦っていたフェイトの姿を見て何かが完全に変わった

「アリシア・・・あなたは、許してくれるかしら・・・？」

プレシアは写真立てに入れられたアリシアの写真を見て言う

そんなプレシアに、忍び寄る影があった

「いい加減、その欲望を解放したらどうだ？プレシア・テストアロツサ」

「ッ！？誰！？」

突然聞こえた声に驚き、部屋の中を見回す

部屋の隅に、黒ローブを着た男が立っていた

「いい加減欲望を抑え込むのはやめろ」

「あなた、何を言っで・・・何処から入って来た！」

黒ローブの訳のわからない言葉にプレシアは怒鳴る

「・・・はあ、大魔導師プレシア・テストロッサ。その精神力を少し甘く見ていたようだ」

そう溜息をつきながら言っで、男は1枚のセルメダルを取り出す

「どうやら、1枚では足りなかったようだな」

「何を言っで——ッ！？」

男がそう言ってメダルを構えると、プレシアの額にスロットが現れる

「その欲望、解放しろ」

男はそう言ってスロットにセルメダルを投げ入れた

すると、以前よりも更にプレシアの首元に白い包帯のような物が纏わりつく

「ジュエルシードを取って来てやる。早く欲望を解放して見せろ」

男はそう言って姿を消した

「・・・ううつ・・・ふえ、フェイトが・・・危ない・・・」

プレシアは自分の中の何かを必死に抑えながらモニターを見る

モニターには先程までそこに居たはずの男が映っており、なのはからジュエルシードを奪っていた

そして、今度はフェイトに近付いてジュエルシードを奪おうとしていた

「・・・ふえ、いと・・・フェイトッ！」

プレシアはそれを見て、やっと気付けた大切なもう1人の娘を護る為に次元魔法を発動した

その直後、自分の中に渦巻く何かに呑み込まれてしまった

フェイトとなのはの戦いで殆どが破壊されてしまった戦闘空間

その空では魔法少女ではなく、オーズとヤミーが戦っていた

「セイヤッ!!」

「クワッ!!」

オーズはタジャスピナーからエネルギー弾を放つ

しかし、オウムヤミーは火炎弾を吐き、それを相殺する

「やっぱり、炎と炎じゃ相性が悪い！」

オーズは更にエネルギー弾を放つが、それも全て相殺されてしまった

「映司！コレに変えろ！」

鳥系ヤミーを見て近くまで来ていたアंकがオーズに向かって叫ぶ

「アंक！はあ！！」

オーズは向かって来ていたオウムヤミーに回転蹴りを決めて吹き飛ばし、アंकが投げたメダルを掴んだ

そして、『タカメダル』を『シャチメダル』に変えてスキヤナーを滑らせた

キーン、キーン、キイインッ！

《SHACHI!》《KUJYAKU!》《BATA!》

「はっ！」

オーズはシャジャバに変わり、オウムヤミーに水流を放つ

「クエツ!？」

水流を受け、オウムヤミーは怯む

「効いてる、はぁ!!！」

オーズはオウムヤミーの周りをグルグル回りながら更に水流を放つ

まるで、いじめっ子が水鉄砲でいじめられっ子を苛めているようだ

「クエエ!!！」



「グエエ!!!!!!!!!!」

オウムヤミーはメダルをばら撒いて爆発した

「はあ、はあ、フェイトちゃん、なのはちゃん!」

オーズはオウムヤミーを倒すと急いで2人の元に向かった

アंकもその後が続くのだった

気を失ったのはとフェイトを映司達は伊達に診てもらっていた

「大丈夫、2人共魔力を使い過ぎただけだ。回復魔法を掛けて数分すれば目え覚ます」

伊達はバースに表示された診断結果を見て言う

「そうですか、よかったです」

映司は2人の側に座り込んで溜息をついた

「また無茶したなあ」

アंकは鼻で笑い、近くの瓦礫に座っている

「伊達さん、私も手伝います」

「あたしも少しなら回復魔法使えるよ！」

「僕もお手伝いします」

「おう。頼むぞ、リニス、アルフ、スクライア」

そう言って4人はなのはとフェイトに回復魔法を掛け始めた

「・・・アंक、奴がジュエルシールドを奪って行ったって事は・・・」

「

「ああ、間違いなくプレシアに何かあったな。だが、奴に次元魔法を撃ったところを見ると、仲間ではないみたいだな」

アंकは先程まで出ていた雷雲を思い出して言う

「すぐにも行きたいけど、今は・・・」

映司は眠っているのはとフェイトを見て言う

「奴の目的は確実に俺達だ、必ず誘いに来る。それまで待つぞ」

「・・・うん」

映司はプレシアを心配しながらもアंकの案を受け入れた

「アースラ」

その頃、次元魔法を確認したアースラはプレシアの居場所を特定していた

「魔力発射地点、特定！空間座標、確認！」

エイミイが時の庭園の座標を特定し、モニターに表示する

「転送座標、セット」

「突入部隊、転送ポートから出動！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です！」

様々な報告を受け、リンディは突入部隊の隊員に指示した

戦闘空間にいた映司達にもリンディの指示は聞こえていた

「・・・なあ、アंक。奴がいるってことは・・・」

指示を聞いた映司が恐る恐るアंकに訊ねると・・・

「・・・瞬殺されるだろうなあ」

アंकはニヤリと笑い、軽く凄い事を言うのだった

「「・・・う・・・うう・・・」」

その時、フェイトとなのはが同時に目を覚ました

「フェイトちゃん！なのはちゃん！」

映司はそれを見て2人に駆け寄り、顔を覗き込んだ

「・・・え、映司・・・？」

「・・・映司、さん・・・？」

2人は映司の顔を見て小さな声で映司の名前を呼んだ

「・・・私、負けちゃった・・・？」

フェイトは映司の顔を見て不安そうに訊ねる

「ううん、引き分けだったよ。頑張ったね、フェイトちゃん」

「にはは・・・また勝てなかったんだ・・・」

なのはは身体を起こして苦笑いをする

「そっか・・・。この場合、ジュエルシードは・・・あれ？」

フェイトはバルディッシュの中にあるはずのジュエルシードが無い事に気付いた

「どうして！？ジュエルシードが無い！！」

「ああ！！私が持ってたジュエルシードも無い！！」

なのはもレイジングハートの中にあっただはずのジュエルシールドが無くなっている事に気付いた

「2人共、落ち着いて。とりあえず、アースラに行こうか」

「えっ？どういう事？」

「・・・プレシアさんに・・・何かあったかもしれない」

映司は少し言い難そうにフェイトに言った

〈時の庭園〉

《転送反応、庭園内に侵入者多数》

管理局の突入部隊が侵入した事をコンピューターのAIが知らせる

そして、突入部隊がプレシアのいる部屋まで来るのに時間は掛からなかった

「プレシア・テストロッサ！時空管理法違反の容疑であなたを逮捕します！」

突入部隊のリーダーがプレシアに告げる

「速やかに武装を解除してください」

リーダーの言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる

隊員がプレシアを囲み、数名の局員が後ろに回る

プレシアは後ろに回った隊員を見た瞬間、目付きが変わった

その頃、映司達はアースラのブリッジにやって来ていた

フェイトは映司とアंकに挟まれるようにして立っている

それは管理局員がフェイトに拘束具を付けようとしたからだ

「何するんですか？いい加減にしないと怒りますよ？」

「フェイトに指一本でも触れてみる、殺すぞ」

しかし、映司とアंकが本気で脅しに掛かった為、拘束具は付けられなかった

ブリッジには、時の庭園の様子が画面に映し出されていた

「お疲れ様。久しぶりね、映司君」

「お久しぶりです、リンディさん」

リンディが映司達に近寄って言い、フェイトに顔を向けた

「フェイトさん？初めまして」

「・・・」

フェイトは映司の後ろに隠れ、手に待機状態のバルディッシュを握って顔を俯かせる

「総員、玉座の間に進入。目標発見」

モニター内では武装局員がプレシアのいる部屋に突入していた

《プレシア・テストロッサ！時空管理法違反の容疑であなたを逮捕します！》

突入部隊のリーダーがプレシアに告げる

《速やかに武装を解除してください》

リーダーの言葉に、プレシアは動じる事なく玉座に座ってる

隊員がプレシアを囲み、数名の隊員が後ろに回る

それを見て、リニスは焦り映司の顔を見る

「・・・」

しかし、映司はリニスの顔を見て静かに頷いた

（・・・フェイトに、真実を教えるんですね）

リニスは映司の苦い決断を知り、自分も覚悟を決めた

モニター内では隊員が隠し通路を発見し、中に入った

そして、アレを見つけてしまった

『ッ！？』

映し出された映像に、映司、アंक、リニス、伊達以外の全員が絶句した

ガラス張りのケースの中、緑色の液体の中を漂うアリシアが映し出された

「・・・」

「・・・」

フェイトとなのはは、驚愕に言葉も発せられなかった

「これは!？」

隊員達はアリシアの入った生体ポッドに近付く

「私のアリシアに近付かないで!!」

その時、プレシアが隠し通路に入って来て隊員達に襲い掛かった

「ぐわあああ！！！！」

隊員の頭を掴んで他の隊員に向かって投げる

それは完全に人間の力を超えていた

外にいる隊員達は既に全員黒コゲにされていた

「う、撃て！！」

残った隊員達はプレシアに向かって魔力弾を放つ

だが、閃光はプレシアの障壁によって掻き消された

「うるさいわ・・・」

プレシアは、手を前に突き出した

すると、何処から現れたのかミイラのような怪人、屑ヤミーが隊員達に襲い掛かった

「な、何だお前！？う、うわああああ！！」

「やめる！！」

襲われた仲間を助けようと屑ヤミーに魔力弾を放つ

しかし、屑ヤミーはその攻撃をもろともせずに他の隊員に襲い掛かった

「目障りよ、消えないさい」

プレシアがそう言うと、玉座の間に沢山の雷が落ち、隊員達は悲鳴を上げた

雷を受けた局員達は、その場に倒れた

「いけない！局員達を送還して！」

リンディの指示で、隊員達はアースラに転送された

局員達は怪我を負ったものの、死者は1人もいなかった

「屑ヤミーか。ヤミーじゃなくてよかったなあ。ヤミーだったら全員死んでたぞ」

アंकは怪しい笑みを浮かべてリンディに言う

「アリ・・・シア・・・」

フェイトはモニターに映し出されたアリシアを呆然と見ていた

《もう、終わりにしましょう》

プレシアはアリシアを見つめて静かに言うのだった

第12話『決戦と決着と決断』（後書き）

C o u n t   T h e   M e d a l s !

現在、オーズが使用したメダルは？

『タカメダル』×3

『クジャクメダル』×3

『ライオンメダル』×1

『トラメダル』×1

『チーターメダル』×1

『クワガタメダル』×1

『カマキリメダル』×1

『バツタメダル』×1

『シャチメダル』×1

『ウナギメダル』×1

『タコメダル』×1



## 第1回クリスマスパーティー（前書き）

このお話は本編とは関係ありません

本編より先の時間軸の人物が多数登場しますが、気にしないで下さい

これはリリカルなのは全てのお話が終わった呈での話です

映司達は全員のキャラと会った事があるという設定です

## 第1回クリスマスパーティー

映司「どうも、火野映司です」

アंक「アंकだ」

シュテル「シュテル・ザ・デストラクターです」

レヴィ「レヴィ・ザ・スラッシャーだよ！」

ディアーチェ「ロード・ディアーチェだ」

5人がそれぞれ自己紹介する

映司「アंक、ついにこの日がやって来たな」

トナカイのコスプレをした映司は言う

アंक「あ？・・・ああ、そうだな」

サンタのコスプレをしたアंकが答えた

レヴィ「そう、ついに待ちに待ったこの日がやって来た！」

シュテル「レヴィはずっと楽しみにしてましたからね」

ディアーチェ「我もずっと心待ちにしていた。気持ちはわかるぞ、レヴィ」

シュテルとディアーチェはサンタだが、レヴィはトナカイのコスプレをしている

映司「じゃあ、始めようか！クリスマスパーティー！」

4人「メリークリスマス！！！」

映司「アंक、言えよ！」

アंक「誰が言うか！！！」

第1回クリスマスパーティー

映司「ところでさ、アंक」

映司は疑問に思っていた事を聞こうと思い、アंकに声を掛ける

シュテル「今回は地の文があるんですね」

アंक「突破記念じゃないからな。で、何だ？映司」

シュテルの言葉にアंकが答え、映司に確認する

映司「クリスマスって・・・何？」

アंक「・・・」

シュテル「・・・」

レヴィ「・・・」

ディアーチェ「……」

その時、確かに時は止まった

アंक「……お前、クリスマスの準備してたよな？」

映司「いや、みんなが楽しそうに飾り付けてたから、聞くに聞けなかったんだ」

映司は苦笑いし、頭を掻きながら言う

アंक「お前は……。いいか？クリスマスってのはな——」

レヴィ「ケーキを食べる日だよ！」

アंकが説明を始めようとすると、レヴィが遮って間違った説明をする

アंक「違う！全然違う！」

レヴィ「じゃあ、プレゼントを貰う日！」

アंक「それも違う！クリスマスは元々、『イエス・キリスト』の降誕を祝うキリスト教の記念日・祭日だ！断じてケーキを食う日でもプレゼントを貰う日でもない！」

そして、断じて恋人と過ごす日でもない

ディアーチェ「今、地の文にあからさまに誰かの意思が宿っていたような気がするのだが」

シュテル「気にしないであげて下さい」

映司「じゃあ、今回のお題を出しますね」

アंक「どっから出したんだ・・・」

そう言つて映司は何やらサンタクロースが持っている様な袋を何処から取り出し、中を漁り出す

映司「えーっと、今回の最初のお題はこれです！」

ドンッー！

そう言って映司が取り出したのはミッドチルダで大流行しているS  
PSのゲームソフト

『仮面ライダークライマックスヒーローズリリカル』だった

レヴィ「ああ！それ！僕がサントさんに頼んだやつだー！！」

ディアーチェ「我が頼んだのもそれだー！！」

レヴィとディアーチェはそのゲームを指差して驚愕する

映司「さっき、トナカイが引く赤いソリに乗ってて、赤い服を着た  
お爺さんが袋ごと置いて行っただけど、誰だっただらうね？」

映司は袋を置いて行っただお爺さんを思い出しながら言う

シュテル「ま、まさか・・・」

アंक「いや、ありえないだろ・・・」

シュテルとアंकは現実を受け止められずにいた

映司「このゲームは仮面ライダー1号から仮面ライダーメテオまでが登場するらしいよ。そして、リリカルの名が付いているので当然、なのはちゃん達魔法少女を始め、数々の魔導師や騎士達が登場する訳です！」

映司はゲームの説明書を読み、ゲームの説明を始める

ディアーチェ「確か、ミッドチルダに現れた怪人も使う事が出来るそうだな」

レヴィ「僕、アंकが映司と一緒に戦ってるCM見たよ！」

そう、このゲームは仮面ライダーや魔導師以外にも怪人を操る事が出来るのだ

シュテル「実際にその者の動きをコンピューターで解析し、再現されているのも売れている理由の1つですね」

アंक「その仮面ライダーが持つ、フォームチェンジも全部搭載されているらしいな」

アंकは早速ゲームを起動し、プレイし始めている

レヴィ「あれ！？アंक、SPS持ってたの！？」

それを見て、レヴィは驚愕した

SPSはヒーローズリリカルが販売された事でいたる店で売り切れが続出しているのだ

映司が世界中を探してやっと6つゲットした程である

アंक「その袋の中にお前等に合わせた色の限定verが人数分入ってたぞ」

そう言っアंकはサンタ袋を指差す

それを聞いて、レヴィ、シュテル、ディアーチェはサンタ袋に群がった

レヴィ「あつた・・・あつたよ！僕の水色！！」

シュテル「私の朱色もありました！見て下さい、映司！」

ディアーチエ「我の黒紫もあつたぞ！！」

そう言つて、それぞれの色が表されたSPSを映司に見せるマテリアル3人娘

映司「よかったね、3人共」

そんな3人の頭を撫でながら映司は言つのだつた

アंक「ほら、映司！お前のだ！」

アंकは袋の中にあつた『OOO』のマークが描かれたSPSを映司に投げた

映司「おお、サンキュー」

毎度の事ながら、映司は見事にキャッチした

そして、全員がSPSを起動し、ゲームを始めた

今映司とアंकの画面上では――

《決着つけるか》

《行くぞ、アंक！》

アंकとオーズが戦っていた

マテリアル3人娘の画面上では――

《さあ、お前達の罪を数えろ！》

《いいなあ、俺も何か作ろうかな》

《宇宙キタースー！！》

《うわぁ！？ビックリしたぁ！何だって！？》

《宇宙っす！》

《宇宙？ああ、そう》

W、オーズ、フォーゼが並んで、怪人軍団と戦っていた

何故、自分達魔導師のキャラを使わなかったのだろうか・・・

それから1時間、5人はそれぞれゲームを楽しんだ

映司「さて、そろそろみんなゲームに慣れて来た頃だと思っただけ  
ど、どう？」

レヴィ「ダメだよ、映司。シュテルがへたっぴ」

シュテル「すいません、足を引つ張ってしまつて・・・」

映司「まあ、誰にでも向き不向きはあるからね。ゆっくり練習していこう?」

シュテル「はい!」

映司の優しい言葉に、シュテルは元気に返事した

映司「さて、これからこのゲームの本当の楽しみ方を教えたいと思う!」

レヴィ「本当の楽しみ方?」

映司「このゲームのオプションをみんな開いてみて?シュテル、ここだよ」

シュテル「ありがとうございます」

映司の指示通り、全員がオプション画面を開く

映司「で、このHELPモードをONにしてください。シュテル、これを押すんだよ」

シュテル「はい、これですね」

これまた映司の指示通り、全員がHELPモードをONにした

レヴィ「映司、これでどうなるの?」

映司「プレイしてみればわかるよ」

という訳で、早速プレイしてみる事になった

現在対戦しているのは、マテリアル3人娘の中で一番うまいレヴィと機械には何でも強いアंकである

《光翼斬ッ!!》

《喰らえっ!!》

画面上では、レヴィとアंकの白熱したバトルが続いている

しかし、次第にレヴィが追い詰められ始めた

「ああ！負けちゃう！！」

「トドメだ」

アंकは大人げない程に本気である

《トドメだ》

アंकは画面上で巨大な火炎球を作り出し、レヴィに向かって投げた

《うわああああ！！！！》

レヴィはその攻撃を受け、真っ逆さまに落ちて行った

《ふんっ、手応えのない奴だ》

画面上のアंकはそう言って、その場を去ろうとする

しかし――

《帰るのはまだ早いんじゃないか？》

《何だと？》

画面上のアंकが振り返ると、そこにはレヴィを抱えたオーズ『タジャドルコンボ』が飛んでいた

《映司……》

《レヴィ、行ける？》

《うん！》

オーズはレヴィを降ろし、並び飛ぶ

《今度はこっち番だ！》

《SHACHI!UNAGI!TAKO!SHACHI!UNAGI!  
TAKO!TAKA!KUJYAKU!CONDOR!GIN  
!GIGASCAN!!》

オーズは炎属性であるアंकに有効な水属性のメダルを多くギガスキャンする

《パワー極限ッ！雷刃封殺爆滅剣ッ！！》

レヴィは超必殺技の雷刃封殺爆滅剣を放った

《セイヤアアアア！！！！》

オーズは水と炎が渦巻くギガスキャンを放った

《うわああああ！！！！》

巨大な水色の雷とギガスキャンを受け、アंकは爆発した

《Down》

《Levi Win》

オーズとレヴィの合体技にアंकは敗れた

レヴィ「やったー!!」

アंक「ふざけんな!!何だ今の!？」

映司「何だって・・・HELPモード？」

アंक「HELPモード?じゃない!!避けられないってどういう事だ!?!俺が勝ってただろうが!!」

レヴィ「結果的に勝ったのは僕だよ」

アंक「何だと!？」

ディアーチェ「見苦しいぞ、アंक」

シュテル「大人気ないですね」

アंक「ぐっ……お前等ぁ……」

映司「まあまああ！落ち着けって！」

そう言って、映司はアंकを落ち着かせる

映司「こうやって、相手の体力を半分以上減らしてると、ピンチの時に仲間が助けに来てくれるんだ」

シュテル「という事は、私達がピンチになれば映司がアंकが助けに来てくれると言う事ですか？」

映司「HELPモードをONにすればね。後、なのはちゃん達も助けに来てくれるんじゃないかな？」

映司はゲームと同時に発売の攻略本を見ながら言う

アंक「相手がライダーか怪人の時は仲間の仮面ライダーか怪人が助けに来て、相手が魔導師の時は仲間の魔導師が助けに来るんじゃないかな？」

映司「そうそう！良く知ってるなあ、アंक」

レヴィ「普段はそういう事調べてるの？」

アंक「・・・お前等が欲しい欲しいって騒いでたんだろうが」

そう、マテリアル3人娘はCMを見る度に欲しいと言ったり、溜息をついたりしていたのだ

映司「欲しいですアピールが半端なかったからなあ、3人共・・・」

映司は苦笑いしながら言う

レヴィ「だって、欲しかったんだもん・・・」

映司「わかったから、そんな泣きそうな顔しない」

レヴィ「・・・うん」

映司「で、このHELPモードを使って、いろいろ遊ぼうと思うんだ」

アंक「なるほどなあ」

シュテル「おもしろそうですね」

ディアーチエ「よかるう。我もやってやるう」

レヴィ「僕もー!!」

こうして、HELPモード探求の時間が始まった

《大丈夫か？翔太郎、フィリップ》

《おやっさん!?!》

《そんなバカな・・・》

《2人共、俺はそう長居は出来ない。一撃で決めるぞ》

《・・・ああ、行くぜ、フィリップ!》

《死者と協力・・・ゾクゾクするねえ》

《SKAULL MAXIMUM DRIVE》

《XTREME MAXIMUM DRIVE》

《とおおおお!!!!!!》

《《ダブルエクストリーム!!!!!!》》

スカルが放った紫の光球の後を追う様に、ダブルがダブルエクストリームを放つ

敵はダブル超必殺技を受け、爆発した

《Down》

《K A M E N   R I D E R   W i n》

《良い面構えになったじゃねえか、翔太郎》

《おやっさん・・・》

《フィリップ、これからもこの半熟者を頼んだぞ》

《・・・ああ、任せてくれ》

《N o b o d y · s   p e r f e c t。じゃあな、仮面ライダーW》

そう言って、仮面ライダースカル・鳴海荘吉は姿を消した

《ありがとよ・・・おやっさん》

《N o b o d y · s   p e r f e c t・・・。忘れないよ、鳴海荘吉》

レヴィ「……ひぐっ……ぐすっ……」

シュテル「……感動です」

ディアーチエ「……泣かん、泣かんぞ。我は王なのだ……」

マテリアル3人娘は泣くのを我慢しながらゲームをプレイしていた

映司「凄いな……このゲーム」

アंक「ゲームの域を超えてるだろ……」

映司とアंकはゲームのパッケージを見ながら驚愕していた

《ディアーチェ達には手出しさせません》

《ユーリ！》

《紫天の盟主、ユーリ・エーベルヴァイン。私の友達に手を出す事は許しません！》

《ユーリだけに戦わせる事は我が許さん。行くぞ！シュテル！レヴィ！》

《焼滅していただきます》

《そこ退けそこ退け僕等が通ーーーーる！！！！！！》

《真・ルシフェリオーンブレイカーッ！！》

《パワー極限ッ！！雷刃封殺爆滅剣ッ！！》

《いでよ巨獣、ジャガーノートッ！！》

《エンシェントマトリクス（仮）》

4人の超必殺技を受け、相手魔導師は撃墜された

《Down》

《DEARCHE Win》

《みんな・・・無事で良かったです・・・》

《我等は無事だ。だから泣くでない》

《だって・・・》

《私達は大丈夫です。ね？レヴィ》

《うん！まだまだ戦えるよ！》

《我等はそう簡単にはやられん、お前を1人にはせん》

《・・・はい!》

映司「いいなあ・・・マテリアルズの絆」

アंक「ユーリはお前等がいなくなると泣くのか?」

ディアーチェ「1度迷子になった事があってな。泣き叫んで探しておったわ」

シュテル「その後はグズってなかなか離れてくれませんでした」

レヴィ「ユーリは甘えん坊だからね」

映司「・・・みんなも大概だと思う(小声)」

《あなたは何者！？》

《オーズ、仮面ライダー○○○》

《《仮面ライダー？》》

《上下3色とは興味深い》

《イケメンで強いよね、嫌いじゃないわ！》

オーズに迫るオカマドーパント

《嫌いじゃないわ！》

《ふっ！よっ！はっ！》

それを華麗に避けるオーズ

そして、バツタレッグを生かした蹴りを叩き込んでいく

《あっ！いやっ！》

《はっ！セイヤッ！！》

《ああっ！！》

オーズの蹴りを受けたオカマドーパントは後ろに転がる

《イケメンで強い・・・嫌いじゃないわ！！》

オカマドーパントはアメイジングアームを伸ばし、オーズを縛る

《私が抱き締めて上げる・・・》

そのままオカマドーパントはオーズを自分の方に手繰り寄せて行く

キーン！キーン！キイイーンッ！

《TAKA！》《KAMAKIRI！》《BATA！》

しかし、オーズは『トラメダル』を『カマキリメダル』に変え、タカキリバに変わる

《セイヤツ!!》

《あぁっ!切れちゃった!!》

オーズはアメイジングアームを切り裂き、そのままオカマドーパン  
トを切り裂く

《あぁっ!!!?!》

《ライダーは助け合いです!W、一緒に決めましょう!!》

《誰だか知らねえけど、行くぜ!》

《力を合わせよう》

《J O K E R   M A X I M U M   D R I V E》

キン！キン！キイインッ！

《Scanning Charge!》

《おっしやる通りだわあああああ！！！！！》

3人の会話を聞いていたオカマドーパントは突っ込んでいく

《《ジョーカーエクストリーム！！》》

《セイヤアアアア！！！！》

《あああああ！！！！！！》

オーズとWの超必殺技を受け、オカマドーパントは爆発した

シュテル「・・・世の中にはいろんな人がいるですね」

レヴィ「僕、怖い・・・」

ディアーチエ「絶対に会いたくない人物ベスト3に入るな」

映司「ま、まあ、あの人はね・・・」

アंक「変なおっさんだろ。気持ち悪いこと、この上ないな」

???「そう、変なおっさん・・・変なおっさん!？」

5人「!!!!!!」

謎のオカマが現れた

???「あなた!レディに向かって最大の侮辱よ!!」

アंक「何だお前!?!どっから入って来た!?!」

???「ムツキーー!!」

アンの言葉に謎のオカマは立ち上がり、キレて走り出す

???「あんっ!!痛い!!」

途中で転けたが、立ち上がりまた何事も無かった様に走り出した

走って行く謎のオカマを、5人は静かに見送った

アンの「・・・何だこのゲーム」

アンのゲームのパッケージを見つめて呟いた

シュテル「映司、ずっと気になっていたのですが、あの扉は何ですか?」

シュテルは部屋に取り付けられている謎の扉を指差して言う

映司「え？ああ、あれは時の扉だよ」

レヴィ「時の扉？」

アंक「今回のゲスト達があゝの扉を潜って来るって事だ」

ディアーチエ「要するに、今回のゲスト共は時を越えてやって来るって事か？」

映司「そういう事。いろんな時間に繋がってるんだよ」

アंक「確か、毎分12・24秒に扉を開けるとここに繋がるらしいぞ」

ディアーチエ「何処のデンライナーだ」

アंक「もしかして、さっきの変なおっさんもこの扉を通って来たんじゃないか？」

5人「・・・」

ジリリリリッ！！！！

シュテル「この音は？」

映司「あ、そうこう言ってる内に、ゲストが来たみたいだよ。これはそれを知らせるチャイム」

ディアーチェ「もうか！？」

レヴィ「展開早っ！」

アंक（全員、オカマがいなかった事にしてるな・・・）

ガチャ（扉が開く音）

????「あれ？ここは・・・」

映司「あ、フェイトちゃん！」

最初のゲストはフェイト・テストロッサ（大人）だった

フェイト「あ！映司！ここ、何処？今日はクリスマスだよ？」

映司「うん、知ってるよ？」

フェイト「・・・」

映司の軽い返事にフェイトは固まってしまった

シュテル「女心がわかっていませんね、映司」

映司「え？」

ディアーチェ「まあ、そんな物を映司に期待する此奴も此奴だがな」

映司「え？」

シュテルとディアーチェは呆れた様に映司に言う

映司は何の事かサッパリわかっていない

レヴィ「まあ、元気出しなよ、オリ——じゃない、フェイト」

フェイト「うん、ありがとう。レヴィ」

レヴィに励まされ、フェイトは少し回復した

シュテル「それで、ゲストの方に来ては頂きましたが、どうするのですか？」

映司「えーっと、プレゼントを渡して次の人に交代だって」

フェイト「プレゼント？」

映司「はい、フェイトちゃん。メリークリスマス！」

映司はフェイトにプレゼントを渡した

フェイト「えっ！？ぶ、プレゼント！？」

フェイトはプレゼントを受け取り、また固まってしまった

映司「うん、開けてみて？」

フェイト「う、うん！」

フェイトは嬉しそうにプレゼントの箱を開けた

フェイト「こ、これ！？」

なんと！プレゼントは金色の宝石が装飾された指輪だった！！

映司「喜んで貰えた？」

フェイト「うん！うん！ありがとう！映司！！」

フェイトは有頂天になり、嬉しさのあまり映司の手を握ってブンブン振り回す

映司「喜んで貰えてよかったよ！」

フェイト「じゃ、じゃあ！今日は早く帰って来てね！美味しい物、沢山作って待ってるから！」

そう言っていると、フェイトはさっさと扉を潜って帰ってしまった

映司「いやあ、喜んで貰えてよかったよ」

映司はうんうんと頷いて言う

シュテル「映司は意外とロマンチストですね」

映司「え？」

シュテルが関心した様に言うと、映司は首を傾げる

ディアーチェ「いや、此奴はそんな考えは微塵も持っていないぞ、天然オーラ全開だ」

その反応を見てディアーチエは呆れた様に言った

レヴィ「オリ——フェイトも可哀想に・・・」

レヴィは時の扉を見つめて呟いた

ジリリリリッ！！！！！

映司「あ！そうこうしている間にまたゲストが！」

アंक「都合の良い扉だな、おい」

???「おや？ここは・・・」

アंक「帰れ！！」

ゲストは、アंकによって追い返されてしまった

映司達には白衣に紫の髪をしていたという事しかなかった

映司「あ、アंक？」

アंक「次だ！次！！」

ジリリリリッ！！！！

シュテル「タイミングを見計らっているのでは・・・」

「？？？「あれー？ここ何処ー？」

映司「スバルちゃんか！」

本日、3人目のゲストはスバル・ナカジマだった

スバル「あ！映司さん！それに、アंकさん、マテリアルのみんなも！久しぶりー！」

スバルは5人を見てそれぞれに挨拶する

シュテル「お久しぶりです、スバル」

レヴィ「スバル！元気だった？」

スバル「うん！私はいつでも元気だよ！！」

ディアーチェ「毎日訓練に励んでいるようだが、体もちゃんと休めるのだぞ？」

スバル「はい！わかってます！」

マテリアル3人娘達とスバルは仲良さそうに話す

映司「じゃあ、スバルちゃん！メリークリスマス！」

映司はスバルにクリスマスプレゼントを渡す

スバル「えっ！？クリスマスプレゼントですか！？」

映司「そうだよ、開けてみて？」

スバル「は、はい！」

スバルは嬉しそうにプレゼントの箱を開ける

スバル「こ、これは！？」

箱に入っていたの1枚の紙切れ

しかし、スバルにとってそれは、天国へのチケットだった

その紙切れはミッドチルダで大人気のアイスショップの1年間無料券だった

この券があれば、1年間、例えばアイスが売れ切れていてもスバル用に作って貰えると言う優れものだ

スバル「え、映司さん！！ホントに貰っていいんですか！？」

映司「うん、クリスマスプレゼントだからね」

スバル「映司さん！！大好きです！！」

スバルは嬉しさのあまり、映司の手を握りブンブン振り回す

スバル「じゃ！私は早速アイスショップに行つて来ます！！」

そう言つと、スバルは走つて扉を潜つて歸つて行つた

シュテル「スバルさんはアイスが大好きなんですネ」

映司「そうだね。あの喜び様は尋常じゃなかったね」

アंक「浮かれすぎて問題を起こさないといいがなあ」

そう言つて、アंकもさっきの無料券を懷にしまふ

ディアーチェ「アイス等であそこまで喜べる奴もそうおらんだろつ」

レヴィ「あれ？王様この前、映司が買って来たアイス嬉しそうに食べてなかった？」

デИАーチエ「余計な事を言うでない！！」

ジリリリリリッ！！！！

映司「あ！また来た！」

シュテル「今度は誰でしょうか？」

???「ここは、一体・・・？私はヴィヴィオさんと訓練場に来た筈なのですが・・・」

映司「アインハルトちゃん！」

4人目のゲストはアインハルト・ストラトスだった

アインハルト「映司さん？それに、みなさんも。ここは何処ですか？」

アインハルト「ここは何処だと映司に訊ねる」

映司「ここはクリスマスのパーティー会場だよ」

アインハルト「クリスマスパーティー？まだ昼ですよ？」

レヴィ「昼からやっちゃいけないってルールは無い！」

ディアーチェ「そして、例えばダメとルールで決められていても、破る！」

アंक「つまらないルールは破る為にある」

この3人の考え方は滅茶苦茶である

映司「ま、まあ、それはいいよ。はい、アインハルトちゃん、メリークリスマス！」

アインハルト「えっ？頂いてよろしいんですか？」

映司「うん、はい」

映司はアインハルトにクリスマスプレゼントを渡した

アインハルト「では・・・ありがとうございます」

アインハルトはプレゼントを受け取る

映司「開けてみて？」

アインハルト「そ、そうですね」

映司に勧められ、アインハルトはプレゼントの箱を開ける

アインハルト「これは・・・映司さんと戦う権利？」

映司「ああ、それは未来の俺と戦って良いって言う権利だよ」

アインハルト「ほ、本当ですか!？」

それを聞いたアインハルトは映司にもう一度聞き返す

映司「うん、本当だよ。未来の俺には伝えてあるから」

アインハルト「世界を救った1人、仮面ライダー000。それに变身する火野映司さん……。こうしてはいられません！私、行ってきます！！ありがとうございます！！」

アインハルト深々と頭を下げて扉を潜り、帰って行った

アंक「お前、いいのか？あんな権利やって」

映司「あれだけ戦って下さいって言われたらしょうがないでしょ。それに、クリスマスだし」

アंक「まあ、お前が良いのなら良いがな」

アंकは鼻で笑い、呆れた様と言った

映司「さて！次は誰かな？」

ジリリリリッ！！！！！

シュテル「本当にタイミングが良いですね。狙ってるんですか？」

???「ここは・・・また迷ってしまいました・・・」

映司「イクスちゃん！」

5人目のゲストはイクスヴェリアだった

イクス「あ、映司さん。ここは家では無いのですか？おかしいですね、確かに家の玄関を開けたはずなんですが・・・」

イクスは頭を捻って考えるが、わからなかった

映司「ここはいろんな時間に繋がってる不思議な空間なんだ」

イクス「は、はぁ・・・。私、早く帰ってクリスマスの準備をしないといけないんですが・・・」

映司「ああ、ごめんね。はい、メリークリスマス」

そう言つて、映司はイクスにクリスマスプレゼントを渡した

イクス「わぁ！ありがとうございます！」

イクスは喜んでプレゼントを受け取った

映司「開けて良いよ」

イクス「はい！あ！遊園地のチケットですね！」

イクスへのクリスマスは遊園地のチケット3枚だった

イクス「あの人を誘って行ってみます！」

映司「うん。楽しんでおいで」

イクス「はい！」

イクスは笑顔で頷くと、笑顔で帰って行った

シュテル「イクスは彼が大好きですね」

レヴィ「まあ、好きにならない方がおかしいけどね」

ディアーチエ「まあ、そうだな・・・」

映司「えっ？なに？俺の顔に何かついてる？」

アंक「安心しろ。何もついてない、マヌケ面だ」

映司「それは安心していいのか!？」

アंक「いつもの事だろう」

映司「ああ、じゃあ良い——って良くない!!」

ジリリリリッ！！！！！

映司とアंकが漫才の様な会話をしているとチャイムが鳴った

レヴィ「次は誰だろうねえ」

???「あれ？何処だここ？兄さん！リリイ！銀十字！」

映司「次はトーマ君だ！」

6人目のゲストはトーマ・アヴェニールだった

トーマ「映司さんじゃないですか！それにアंकさんとマテリアルさん達も！ここは何処です？」

レヴィ「ここは・・・時空を超越した空間だよ・・・」

シュテル「レヴィ、急にどうしたのですか？」

レヴィ「いや、こう言った方がカッコイイと思って！」

アंक「まあ、変な空間だ」

トーマ「そ、そうですか・・・」

映司「じゃあ、トーマ君にも！メリークリスマス！」

映司はトーマにクリスマスプレゼントを渡した

トーマ「えっ！？いいんですか!？」

映司「うん、クリスマスだからね」

トーマ「ありがとうございます！いただきます！」

トーマは嬉しそうにプレゼントを受け取った

トーマ「開けていいですか？」

映司「うん。どうぞどうぞ」

トーマ「何たる・・・あれ？これって・・・」

レヴィ「何だったの？トーマ」

トーマ「これ、八神指令達に勝つ方法って・・・」

アंक「それを読み上げれば、自然とアイツ等は黙るだろうよ」

アंकが不敵な笑みを浮かべてトーマに言う

まあ、誰でも思いつく様な嫌がらせ、過去の恥ずかしいエピソード集である

映司「それで、怒られた時も安心だね！」

トーマ「あ、ありがとうございます」

映司の眩しい笑顔に、トーマは何も言えなかった

トーマ「・・・兄さんに渡そうかな」

トーマはそう呟いて帰って行った

アंक「アイツは自分では使わなそうだな」

映司「俺は自分では使わない方がいいと思う」

シュテル「恐らく、あの人が使うんではないでしょうか？」

レヴィ「僕もそう思う、絶対そうだよ！」

ディアーチェ「人をおちよくらせたら右に出る者はいないからな」

5人の頭にははやて（大人）達を笑みを浮かべながらおちよくる人物が浮かんでいた

映司「じゃあ、そろそろ終わろうか。シュテル、電源をOFFにして？」

シュテル「はい、これですね」

シュテルは時の扉の電源を切った

ディアーチェ「この扉はスイッチひとつで切れるのか!？」

レヴィ「時代の最先端を行くね!」

ディアーチェ「オーバーテクノロジー過ぎるであろう!」

ディアーチェは何か怒り始めた

映司「残りのプレゼントは後日送らせていただきます」

アंक「お前、誰に言ってんだ？」

映司は映司で謎の発言をし、アंकに突っ込まれていた

映司「じゃあ、そろそろみんなもプレゼントタイムにしようか」

レヴィ「えっ！？プレゼントはこれだけじゃないの！？」

レヴィはクライマックスヒーローズリリカルを手に驚く

映司「それは変わったお爺さんから貰った物でしょ？これは俺達からだよ」

そう言つて、映司は3つのプレゼントを出す

映司「はいこれ、シュテル」

シュテル「ありがとうございます、映司、アंक」

アंक「これはレヴィだ」

レヴィ「ありがとう！中身は何かな？」

映司「はい、ディアーチエ」

ディアーチェ「ま、まあ、感謝してやらなくもないぞ」

3人はそれぞれプレゼントを受け取った

レヴィ「ねえねえ！開けてもいい！？」

映司「うん、開けていいよ」

レヴィ「わーい！！」

映司が開けて良いと言った途端に3人は箱を開けた

レヴィ「わー！ブレスレッドだ！！」

シュテル「ネックレスですね」

ディアーチェ「ピアリングか」

レヴィは水色の宝石が装飾されたブレスレッド

シュテルは朱色の宝石が装飾されたネックレス

ディアーチエは黒紫色の宝石が装飾されたピアリング

アंक「映司が穴掘って見つけて来た宝石だ。俺がそれをカットしてプラチナに装飾した物だ。どれもこれも頑丈に作ってあるぞ」

アंकがアクセサリーについて説明する

映司「苦勞したよ。他にも桜色とか金色とか白色とか、いろいろ探したから」

映司は手に出来た肉刺を見て言う

彼はスコップとピッケルだけで穴を掘り、宝石を探したのだ

シュテル「映司、ありがとうございます」

レヴィ「ありがとうー！映司ー！！」

ディアーチェ「ほ、褒めてつかわそう。あ、ありがとう・・・映司」

3人共、嬉しそうにアクセサリーを見て映司に言った

シュテル「・・・ところで映司、この箱は何ですか？」

映司「え？・・・あれ？何だろう？アंक、これ何だ？」

アंक「あ？何だ？お前が用意したんじゃないのか？」

映司「いや、俺じゃないけど・・・」

レヴィ「開けてみればわかるんじゃない？」

ディアーチェ「そうだな。開けてみるとしよう」

レヴィとディアーチェが箱に近付いて行く

???「・・・まだかな・・・」

レヴィ・ディアーチェ「!？」

箱の中から謎の声が聞こえ、レヴィとディアーチェは驚き、映司に抱きつく

レヴィ「いいいいい、今、中から声がぁ!!」

ディアーチェ「そそそそそ、そんな訳あるか!聞き間違いだ!!」

シュテル「では、何故映司に抱きついているのですか?ディアーチェ」

ディアーチェ「う、うるさい!!」

アंक「何やってんだお前等・・・」

映司「俺が開けて来るよ」

そう言って映司は大きな箱に近付いて行く

???「・・・何だか・・・眠くなってきました・・・」

映司「・・・この声は・・・」

???「・・・あつ、近づいて来た（小声）」

映司「・・・」

映司はそつと大きな箱の蓋を開け様とした

???「わー！ー！」

小さな可愛い声で驚かせようとしたのか声を上げる箱の中にいた少女

ディアーチエ・レヴィ「わあああああ！！！！？」

その小さな驚かしに、本気でビビるレヴィとディアーチエ

シュテル「ユーリ、ユーリじゃないですか！」

映司「やっぱり、よっと」

映司はシュテルに『ユーリ』と呼ばれた少女を持ち上げて箱の中から出してやる

ユーリ「ありがとうございます、映司」

ユーリは頭をペコリと下げて映司にお礼を言う

ディアーチェ「ゆ、ユーリだったのか！驚かせるな！」

レヴィ「僕、心臓が飛び出るかと思ったよー！」

ユーリ「う、ごめんなさい・・・」

2人に怒られ、ユーリはしゅんつとしてしまう

ディアーチェ「あ、いや・・・べ、別に怒っている訳ではない。そんな顔をするな」

レヴィ「ぼ、僕もちよつと言い過ぎた。ごめんね、ユーリ」

ユーリ「いえ、気にしないで下さい」

謝る2人にユーリは気にしないでと言う

レヴィ「でも、急にどうしたの？ユーリ」

ユーリ「だって、クリスマスなのに、みんな私を置いて行くから・  
」

5人（し、しまった〜！！）

5人はいつものノリでやって来た為、ユーリを連れて来るのを忘れていたのだ

映司「じゃ、じゃあ！せっかく来てくれたんだし、自己紹介してくれる？」

ユーリ「あ、はい！ユーリ・エーベルヴァインです！よろしく願います！」

シュテル「彼女は紫天の盟主です。詳しくは、GEARS OF DESTINYをプレイして下さい」

アंक「サラッと宣伝をいれて来たな」

映司「じゃあ、ユーリにも今プレゼントを渡そうか」

そう言つて、映司はユーリ用のプレゼントを取り出す

ユーリ「本当ですか！ありがとうございます！！」

ユーリは凄く嬉しそうにプレゼントを受け取った

ユーリ「開けてもいいですか？」

映司「うん、開けて開けて？」

ユーリは映司に確認を取ってからプレゼントの箱を開けた

ユーリ「わあ！指輪だ！それも4つ！」

ユーリは嬉しそうに指輪を取り出す

4つの指輪にそれぞれシュテル、レヴィ、ディアーチエ、ユーリの魔力光色の宝石が鑲められている

映司「今はまだユーリの手は小さいからはめられないけど、大人になったらちゃんと付けられるからね」

アंक「今はチェーン通してネックレスにしとけ。もし将来、はめられなくてもネックレスにならつけられるだろ」

そう言っつて、アंकはネックレス用のチェーンをユーリに渡す

ユーリ「はい！ありがとうございます！」

ユーリはニコニコ笑いながらリングをチェーンに通す

ユーリ「シュテル、付けて貰えますか？」

シュテル「ええ。後ろを向いて下さい」

シュテルに言われた通り、後ろを向いてネックレスをつけて貰うユーリ

ユーリ「見てください！映司！アंक！」

付け終わると、映司とアंकにつけた姿を見せに行く

アंक「いいんじゃないか？」

映司「うん。似合ってるよ、ユーリ」

ユーリ「えへへ」

2人にそう言われ、嬉しそうにユーリは笑った

映司「じゃあ、そろそろ終わろうか、この後もみんなそれぞれ予定あるでしょ？」

ディアーチェ「我等はアマタ達とクリスマスパーティーだ！」

シュテル「今日は早く帰って来る様にと言われていましたね」

レヴィ「キリエがご馳走作ってくれるんだって！今日はオールナイトー！」

ユーリ「私も下ごしらえ手伝ったんですよ！」

アंक「俺はラト達に呼ばれてる。今日は徹夜で騒ぐらしい」

4人はこの後の予定をそれぞれ言う

映司「俺もフェイトちゃんが美味しいご飯作ってくれるらしいから早く帰らないと」

アंक「じゃあ、お開きだな」

アंकはそう言って席を立つ

映司「じゃあ、クリスマスパーティーはこれにて終了！」

ディアーチェ「うむ、では帰るぞ、皆のものー！」

レヴィ「あ、王様！待ってよー！」

シュテル「ユーリ、行きますよ」

ユーリ「はい！映司、アंक、さようなら！」

こうして、マテリアル達は帰って行った

映司「じゃあ、アंक。明日にはちゃんと帰って来いよ？」

アंक「ああ、わかってる。じゃあな」

アंकはそう言って、出て行った

映司「・・・さて、俺も帰るかな」

映司はトナカイの装飾を取って呟く

映司「・・・来年も出来たらいいなあ」

さっきまで騒いでいたみんなを思い出し、映司は部屋を見渡す

映司「さっ！帰ろう」

映司は部屋の電気を消して、家に帰って行った

## 第1回クリスマスパーティー（後書き）

メリークリスマス

さて、ケーキ食って寝るか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3068x/>

---

魔法少女リリカルなのは～欲望の王～

2011年12月25日18時57分発行